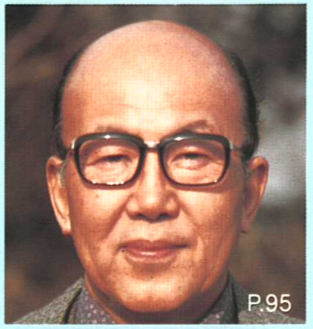
光よあれ

私たちは主のもの　25人の証しシリーズ第1集



















光よあれ

私たちは主のもの　25人の証しシリーズ第1集

吉祥寺キリスト集会編

「光が、やみの中から輝き出よ」と言われた神は、
私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光
を知る知識を輝かせてくださったのです。

（IIコリント　4・6）

定価330円

光よあれ

私たちは主のもの　25人の証しシリーズ第1集

吉祥寺キリスト集会　編

この世が自分の知恵によって神を知ることがないのは、神の知恵によるのです。
それゆえ、神はみこころによって、宣教のことばの愚かさを通して、信じる者を
救おうと定められたのです。
（Ⅰコリント　1・21）

まえがき

信頼できる人は、一体どこにいるのか？　今日、多くの人が、頼りにできる人、信頼できる人を切実に求めています。たしかにこの世には、信頼できそうな人物や誠実な約束が満ち満ちているかのように見えますが、いったん情勢が変ると、それらの約束の多くは捨て去られ、約束を守り通す人はごく希になってしまいます。こういった経験を通して、多くの人は「信頼すること」に懐疑的になり、身を護るために自分を不信の殻の中に閉してしまいます。しかしそのような中にあっても、心の支えをしっかりと持ち続けていると感じとることができるような人びとがいます。

昔は、出世することのために大切なことは、能力、教養、意志、貫徹力でした。しかし今日はどうかといいますと、出世した人でさえ、次のような問いにせまられています。一体何が頼りにできるのか？　すべてのものは変り、ますます加速度的な速度で、変化してしまうのです。この時代に、つまり不確実性の時代に、何か確実なものが、どこかに存在しているのだろうか？と。

もともと可能性は、二つしか存在しません。人間は、自分自身を信じるか、あるいは自己中心的な生き方を止めて、生ける神を信じるかのどちらかです。

まず自分自身を信じている人は、人間というものが、自分の力で、よりよい環境をつくりだすことができ、人間の努力によって、人生をいっそう人間にふさわしい、すばらしいものにすることができ、さらには、人間それ自体も、ますます進化してゆく、と確信しています。万物の尺度の中心は人間だ、というのです。

しかしながら、よく目を開いて現実の姿を見る者には、疑いが起ってくるに違いありません。そうして自分自身と、自分の能力に対する信仰が、根本から揺り動かされ、自己中心から開放され、生ける真の神を知るようになるものは幸いです。主なる神を知ることの結果は、全能なるおん方に「信頼する」ことであり、この方に従いはじめることです。これはあまりにも大いなることであり、人間が勝手に行ったり変更したりすることのできるものではなく、ただ主なる神の働きと啓示によってだけ可能となるものです。

確かに多くの人は、一生懸命勉強したり、仕事をしたりして、ある程度の成功を納めました。しかし、それにはそれ相応の代価が支払われました。犠牲なしには何一つうまくいきません。確かに外面的には一見良いかも知れませんが、内面的にはまことに虚しく、無常感が残ります。ここに、私たちがめったに考えないような法則があります。すなわち、私たちが獲得するすべてのものに対しては、支払いが必要だということです。たとえばあなたが車のモーターで馬力、熱、電気を得るためには、ガソリンを使わなければなりません。このことを人間に当てはめて考えると、ある人は、成功のために胃潰瘍という代価を支払い、また別の人は、道徳の喪失というかあなたが一体何を代価として支払っているかについて、一度じっくりと考えてみてください。次のことを証しすることが許されているということは、私にとって、非常に大きな喜びです。すなわち、イエス・キリストこそ、全幅の信頼を置ける方です。

三十八年間、私は私が神の子供であり、私の罪の債務が消されているということを知ることを

許されています。イエス・キリストは、宗教以上のものです。宗教は、信頼できる人生を人に要求しますが、イエス・キリストは、信頼できる人生そのものを与えてくださいます。

人間の内側の渇きは、いわゆる宗教によっては満たされません。そうしてまた、教義や努力によっても渇きは癒されません。孤独で、絶望した人間が、イエスのうちに債務を赦され、罪の許しを得て、絶えざる喜びをくださるお方を知ることによって、はじめて渇きは癒されます。

主イエスに信頼を置く者は、一人も失望させられません。しかし目に見える物、過ぎてゆくものに頼る人はすべて、言い表せないほど失望させられます。

この証しの本には、日常生活の具体的な問題において、いつも主イエスのみもとに避け場を求めた多くの人たちが執筆しています。その人たちは、自分の人生の主導権を、主イエスに明け渡すことをあえてしました。その人たちは心配や願望や重荷を抱いて、イエス様のみもとに行きました。そしてイエス様は、その人たちすべてに、新たな始まりを与えてくださいました。

あなたもまた、そのことを、今日経験することができます。主イエスは、あなたの人生をも、根本的に変えることがおできになります。主イエスは、生ける望みと確かな心の支えを与えてくださいます。

どうか、イエス・キリストに、あなたの人生を捧げることをなさってみてください。そうすれば、神の恵みによって、あなたの人生もまた、信頼できる人生になり、他の人びとを主イエスのみもとにつれてくる人生、そして間もなく再臨なさる主が栄光を顕される人生になります。

ゴットホルド・ベック

目次

まえがき

光よあれ　私たちは主のもの　25人の証しシリーズ　第1集

1　み翼のかげで……山本　孝子　13
2　虚しさからの脱出……野田　繁　37
3　主が語られたことは必ず実現する……染野　待子　59
　力石おじいちゃまのこと
4　光の中に移されて……池田　傳一　95
5　たちかえりの記……加納　久美　124
6　視聴率競争の果てに……加納　孝夫　131
7　Klein aber mein から klein aber Dein へ……野口　広　142
8　五人の子供が与えられて……小林多津子　151
9　国籍は天にあり……森田美枝子　172
　天に召された主人のこと

16人の証し（カラー刷り）……97～104

●診療を通して主に仕える…近森大志郎　●強くあれ、雄々しくあれ…中島章
●思いわずらいから解放されて…石井コギク
●キリストとの生きた交わり…ジョン・コルドウェル
●思い切って受けとった…竹本　隆　●自分の家を主のために…竹本真夫
●いのちをかけても…飯守恪太郎　●聖書こそ真実…松見敬三
●虚無からの脱出…蘇畑卓郎　●すべてを神の御手に…古田稔
●この命は主のもの…諸岡梅子　●人生を変える…江藤善清
●あなたこそ私の神です…重田定義　●すべての問題の解決は主に…岩上勲
●月曜病から解放されて…辻田浩康　●神とともに生きる力…宮田矢八郎

神は愛です……ゴットホルド・ベック　200

あとがき

基礎的なみことば……210

「実を結ぶ命」のおすすめ…212　次号予告…214　吉祥寺キリスト集会ご案内…215

み翼のかげで

山本　孝子

神奈川県横浜市出身。西戸部小学校、横浜市立高等女学校、日本女子歯科医専卒業後、東京医科歯科大歯列矯正学教室に在籍、その後アメリカDr. Ricket Institute等で研修を受け、オランダハーグ市で学校歯科医となり、目黒区で開業、その後軽井沢へ移り、現在は世田谷区東玉川で開業。診療活動を通して福音を宣べ伝える。著書「新軽井沢物語」雑誌「決断の時」のコラムを担当。家族はアメリカ留学から帰った長女いづみさん。

▼娘(左)私(中)オランダより一時帰国の妹(右)。



苦しみに会う前には、私はあやまちを犯しました。
しかし今は、あなたのことばを守ります。

（詩篇　119・67）

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。
私はそれであなたのおきてを学びました。

（詩篇　119・71）

私は心を尽くして主に感謝します。
あなたの奇しいわざを余すことなく語り告げます。
私は、あなたを喜び、誇ります。
いと高き方よ。あなたの御名をほめ歌います。

（詩篇　9・1、2）

たくさんのレントゲン写真と検査結果のファイルを置いた机を前にして、私の友人である医師は言いにくそうに主人の病名が肺がんであることを私に告げました。「あとどのくらいですか」と私は尋ねました。「三ヶ月という診断です」彼は気の毒そうに私から目をそらせ、その反面じっと私の反応をみるようなそぶりをしました。この古い善良な友人である医師は、私が泣き出すこと を恐れていたのでしょうか。その時なぜか私の心は水のように静かでした。主人のために一番大事なことをまずしなければならないと思うと、ある力が湧き上ってくるのをさえ覚えました。

つい一週間前に一ヶ月の外国旅行を終わって、その帰りの飛行機の中で私は思ったばかりなのです。「私は何と幸福なのでしょうか。もったいないみたい。寛大な主人とかわいい娘がいて楽しい家庭があり、一年に一度位は外国旅行もできるし、夏は涼しい軽井沢へ行けるし……。でもこの幸福は一体いつまで続くのでしょうか。それを考えるのは恐ろしい。やめておくことにしましょう」

今の医師の話によれば、その生活もあと三ヶ月ということです。そして私はすっかり違う運命の中に放り出されてしまうのです。いいえ、もうそれはすでに始まっているのです。主人は入院、家庭の責任はすべて私の肩にかかってきているのです。今まで想像もしたことがない未亡人になるべく私は一秒一秒を歩み、娘のいづみは父親を刻々と失いつつあり、主人は永遠のほろびへと一歩ずつ確実に歩み続けてゆくのでした。それにあと三ヶ月で、主人と永遠の別れをするなんてとても信じられないことでした。夢ならば早くさめてもらいたいと私は思いました。

病院を出ると私は少し走ってから、静かな所へ自動車を止めました。そして私の救い主、イエス・キリストに語りかけました。

「イエスさま、とうとう私の恐れていたことが起きてしまいました。主人は救われないうちに、がんであと三ヶ月という残された命をもつだけになってしまったのです。どうしたらよろしいでしょうか。私は苦しいのです。主人を永遠のほろびに行かせたくありません。それに私は恐ろし

いのです。病気のことも、また主人を失った後の生活のことを考えるのも。でもイエスさま。あなたさまはオリーブ山で、父なる神のみこころのようになさってくださいとお祈りになられましたね。私も今、あなたさまにならってお祈りいたします。『父なる神さま、どうぞ私の願いではなく、みこころが行われますように』」

祈り終わると汗と涙がとめどもなく流れてきました。家にいれば患者さんと来客と電話とで、一人になるのは深夜の自分の部屋とこのせまい自動車の中だけなのです。私はここでだけ、人々に気がねなく涙を流すことができたのです。涙をふいて家に帰る途中、元気な頃の主人とのたびたびの会話が思い出されました。

「僕はクリスチャンだよ。イエス・キリストを信じていますよ。父が厳しい人だったので精神修養に必要だと言って、学生の時に牧師さんの家に一ヶ月ほど預けられたことがあるんだよ。その時は毎朝聖書を読み、賛美歌を歌って、お祈りをして、食事をして学校へ通っていたんですよ」

「それだけではクリスチャンじゃないと思うわ。人は生まれ変わらなければ神の国を相続することはできないって、聖書に書いてあります。生まれ変わりの体験ないでしょう?」

主人はきょとんとしています。ずい分変なことを言ってるけれど、あなたの信じているのは本当のキリスト教なのとでも言いたそうな顔です。どうも二人共、全然ちがうレールの上を歩いているのです。尊敬している主人なのですが、一度話題が新生のことになるとまったく話が通じなくなってしまうのです。私は何度も理解されない苦しみを経験しました。それに自分は月曜から

土曜日まで働いているのだから、日曜日位は自由にゴルフがしたいというのです。そのかわり、あなたといづみは朝から晩まで教会にいてもかまいませんというので、私はその方があなたにとって都合がよいのでしょうと、いや味を言うようになってしまいました。これではとても教会に来てくれそうもない。でも何とか死ぬまでには主人も信じてくれるでしょうと、半分はあきらめていたのでした。私が救われた時の願いであった、毎週日曜日には親子三人で手をつないで教会へ行くという熱い思いも、だんだんと冷えてきてしまいました。それは全部、私を理解してくれない主人のせいだと思っていたのです。

この自動車の中で主イエス・キリストは、大きなあわれみをもって私に私自身の姿を写し出して見せてくださいました。キリストの香りももたない愛もない、思いやりもない自己中心でごう慢な私自身の姿がそこにありました。私は主人を裁きながら、イエス・キリストを伝道しようとしていたのでした。「主よ。主よ」と救い主のみ名をよびながら、みことばを守らない哀れな貧しい私の姿がそこに写し出されました。私は初めてわかりました。イエスさまはどんなに私のために悲しまれたでしょうか。

「イエスさま、私が救われてから今日まで四年間、主人の救われなかったのは私のごう慢と怠けの罪のゆえです。どうぞお赦しください。今は三ヶ月という期限つきとなってしまいました。時間切れということも考えられます。どうぞ主人が永遠のほろびに行くことなく、永遠のいのち

に入ることができますように助けてください」。

私が主に助けを求めた時、主イエス・キリストは私に一つのみことばを思い起こさせてくださいました。家に帰ると私は自分の部屋に入り、すぐに聖書を開き探しました。

この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです。

（ヨハネ 11・4）

私の心に光がさしこみました。

「イエスさま。そうだったのですか。信じます。どうぞ主人の心を整えてください。福音を聞いた時に素直に信じることができますように。イエスさま。ありがとうございます。みことばに感謝いたします。あなたさまは全知全能で望みの神です。み名を心から賛美申し上げます」

主人の死が、神の栄光のためであるとは何というすばらしいことでしょうか。主人は必ず死ぬ前に信じるにちがいないという確信がもてるようになり、私は心から神を賛美しました。

その日の夜、私は娘のいづみにパパが肺がんであることを知らせました。そして同時に主にある兄弟姉妹の方々にも連絡して、主人の救いのための祈りをお願いいたしました。未信者であった母にも知らせました。母はおどろいて信じられない、信じられないと言いながら、一生懸命に私を慰める言葉を探しました。その時私は、神のみことばと人の言葉の違いがよくわかりました。

真理にふれていない人の言葉は、意味もなく死んでいるのでした。私は心の中で繰り返しました。神の栄光のためのものである。神の栄光のためのものである。と。

次の日、尋ねてくださった牧師さんと共に祈り、主人は病室で主イエス・キリストを自分の個人的救い主として受け入れました。ハレルヤ。

私の母もその時一緒におりましたが、病院の帰り道、私のことを怒りました。

「孝子も牧師さんもずい分ひどいじゃありませんか。死んで行く人を前にして、『信じなさい。罪を悔い改めなさい。そうすれば天国へ入れます』なんて言うのは。まるでそれは死の宣告ですよ。私は気の毒で山本さんの顔が見られませんでしたよ」

私は申しました。

「お母さん。どうしてもそれが必要なんです。死ぬ人は準備がいるのです。最後まで直る病気のように思いこませてだましておいて、何の死への準備もなく永遠のほろびに追いやることはできません」

母はじっと何も言わず考えておりました。多分、自分がまだ死への準備がないことを思ったのかも知れません。

次の日、病院へ行くと主人は申しました。

「ああ、もうイエスさまが一緒にいてくださると思うと、心がとても平和で、病気に対する恐れがなくなったよ」

顔も明るくなったように思えて、私は主に感謝いたしました。

また、ある日、主人は申しました。

「今、同室にいる青年なんだけど、いろいろな食物にアレルギーでやせ細っているんだよ。今は注射だけでもたせているけど、気の毒でしょうがない。家の祈り会でこの人のために食事が食べられるよう、祈ってほしいんだけど、よろしくお願いするよ。名前はKさんというんだよ」

私は快く、祈りのリクエストを受けました。いよいよ主人も、他人のために祈るようになったのだと思うと、胸がいっぱいでした。

「ご主人はがんだということをご存知ですよ。私は何十年も患者をみておりますが、知らない人はしつこく病名を聞くのです。ご主人は一度も聞いたことがありません。もし奥様が言いにくければ私が言って差し上げますよ」

相談に行った担当医は、このように言いました。さらに、

「でも私は言う必要はないと思うんですよ。それは崖っぷちに立っている人を突き落とすようなことになりますよ」

「主人はイエス・キリストを信じ、受け入れて天国に入る準備はできているんです。私の口から

ら主人に話しましょう」

「イエス・キリストを信じたら天国へ入れると、あなたは信じていらっしゃるのですか。天国をほんとに信じていらっしゃるのですか」

「はい」

担当医の先生は、気の毒そうに私の顔をまじまじと見ました。

この人は患者の死を、一体どのように受け止めているのでしょうか。私は彼が生と死についてまったく無知でありながら、神に創られた人間のいのちを扱っていることが不思議に思えてきました。私は思わず彼のために祈りました。「主イエスさま。あなたさまによって創られた人間の体を、あなたさまを知らない人がさわってもよいのでしょうか。神を知らない人がどうして神に創られた人間を知ることができましょう。神を恐れない人がどうして人のいのちを大切にすることができましょう。どうぞこの先生だけでなく、世界中の人間を扱う医療担当者の方々のために、特別の救いのみわざが行われますように」

ある日とうとう機会が来ました。主人が何気なく聞いたのです。

「あのレントゲン写真の白い部分は何かしら」

私は、すぐに答えました。

「あの白い部分にがん細胞があるんですよ。病院では、今、抗がん剤を使って治療しています」

「ああ、そう」

それはいつもの日常会話とまったく同じであり、主人の顔は平和そのもののように見えました。イエスさまが主人を支えてくださっていて、主人もすべてをイエスさまに明け渡し、お委ねしていることがわかり、私の心も平和そのものでした。

どうか望みの神があなたがたを信仰によるすべての喜びと平和をもって満たし、聖霊の力によって望みにあふれさせてくださいますように。

（ローマ　15・13）

ある人は言いました。家内ががんという診断を受けた時、私たち家族は一晩中泣きあかしました、と。また私の友人の婦人の医師は、三年前にご主人ががんと診断された時、立っていることができないでその先生の前に座りこんで泣いてしまいました、と。また私の一人のクラスメートは、ご主人がかわいそうで言えないといって、ご主人がそれに気がついてたいへん怒りました。どうして僕をだましたのか。死んだら怨霊になってお前を迎えにくる、と言ったのです。友人は大金を払って戒名をつけてもらいましたが、今だに一寸のもの音にも怖くてしかたがないということでした。

その頃娘のいづみは高校二年生でした。三年が終了したらアメリカの大学へ行くことに予定しておりましたが、今年の夏休みには志望している大学のいくつかを、見に行く予定になっていたのです。私はもうすぐ天国に召されるであろう主人を思い、この娘の旅行は取りやめた方がよいのではないかとも思いました。でも私の心には、かつて想像したこともないような平安がありました。主人はただ死という一点を通過して、朽ちるこの世のいのちから、朽ちることのない永遠のいのちに入るだけなのだという思いが、私の心を支配しておりました。「神さま、私はひどい妻でしょうか。ひどい母でしょうか。今主人が死にそうだというのに、私はこの娘の旅行の計画を変えるつもりにはなれないのです。私の心に平安があるからです。でももし間違っていたら教えてください」。

私は祈り、また娘に尋ねました。

「パパが天国に招かれる確信がありますか」

「あります。神さまのお約束ですから」

と娘は答えました。みことばもまた私に語りかけました。

信仰は望んでいる事がらを保証し、目に見えないものを確信させるものです。

（ヘブル　11・1）

私や娘がそばにいてもいなくても、主人のこの肉体の痛み苦しみを助けることはできません。また、そばにいてもいなくても、神が主人を天国に召してくださることには確信があります。それにここには悲しみの方で病を知っていらっしゃる救い主、イエス・キリストがいらっしゃるのです。この方だけが病の床にある主人を支えてくださる方であることを、私は知っていました。

何とすばらしい事実でしょうか。

「いづみ。今夜はあなたがこの世でお父さまを見る最後の時になるでしょう。もう手術の後ずっとお会いしてないでしょう。今夜はよく祈って、また天国で会う日までのお別れをしなさいね」私たちは夜食事がすんでから出かけました。

主人は注射のせいか、白いベッドの中で安らかに眠っているように見えました。いづみはベッドに近寄り、のぞきこんでいつものように明るい声で言いました。

「パパァ。ずい分顔色がいいのね。きれいなお顔ね。気持よく眠っていらっしゃるわ。いづみ安心したわ。では明日行ってまいります」

私はそれを聞きながら短く祈り、娘と共に病室を出ました。エレベーターを降りて駐車場までの間、私たちは一言もしゃべりませんでした。自動車に乗るといづみは急に大声で泣きだしました。あんなにパパっ子だった娘と、目に入れても痛くないほどいづみをかわいがっていた主人が、死によって別れるということは、どんなに二人にとって悲しいことでしょうか。でも私たちの信じている神は望みの神なのです。

「イエスさまに感謝しましょう。私たちはまた天国でパパとお会いできる希望があるでしょう。それにこの世のお父さまがいらっしゃらなくなっても、あなたには天のお父さまがいらっしゃるんですよ。この方は病気になることも死ぬこともありません。永遠の御方です。十七才までパパ

の大きな愛を受けて成長したことは、何と感謝なことでしょう」本来ならば、私は娘を抱いて、共に泣くべきでした。でも神の力は弱さのうちに働くのです。私たちは神の大能の力によって強められました。この時神は今後の私たち母娘の生活において、神にだけ信頼と望みをおくように示されたのです。キリスト者であるといいながら、目に見える主人とその寛大な愛、働いて持ってきてくれるお金を頼りにしていた私のような者をも、忍耐をもって愛し続け、働き続けてくださった主を見上げた時、私はイエス・キリストの両手のくぎの痛みを感じたのです。それは私のためでした。主は御身を傾けて私の方に向いてくださり、私はこの方が夜もまどろむことなく、私のために働きとりなしていてくださったことを知ったのです。たとえこの世が崩れ去っても、わたしの言葉は変わらないと言われる神のみことばは、強烈な力となって私の生活に働き始めました。

神がまず私を愛してくださり、その一人子をこの世にお送りくださった天の父なる神の愛が私に迫りました。私は父なる神の前にひざまづき、心からの賛美と感謝をもって、今日までのクリスチャンとしての中途半端な生活を悔い改めたのです。

娘がアメリカへ行った次の日から、私は主人の病室に泊ることにしました。朝になると家に帰り、患者の治療をして、昼間一度病院を尋ね、また午後の患者の治療のため家に帰り夕方また病院へ来るという生活でした。私は疲れていました。でも私は、主人は苦痛のためにもっと疲れている事を知っていました。夜中に看護婦さんが注射に来ると主人は、「すみませんが家内は疲れて

おりますから起こさないでください」と言っておりました。起きようとしていた私は急いで目をつぶりました。

朝がきました。病室の窓のブラインドのすき間から初夏の青空が見えてきました。

何という平和でしょうか。今朝私が死にそうな主人と同じ部屋でさわやかに目ざめたなんて考えられません。平安と清らかさはこの部屋に満ちておりました。苦しいはずなのですが、主人の顔も何とも言えず平和に見えるのです。今、主人はどんな夢を見ているのでしょうか。もう天国がそこに見えているにちがいありません。イエスさまが主人の手を引いて、一歩一歩天国への道を歩いてくださっているのでしょうか。呼吸は早くなったり遅くなったり、いよいよその時が近づきつつあることを知らせています。私は今朝は落ち着いて仕事ができないけれど、一応約束の患者さんのために家に帰ることを決意しました。そして家に帰る前に私は主の御前にひざまずき祈りました。

「天の父なる神さま、あなたさまは私の苦しみの時に、ゆとりを与えてくださいました。(詩篇4・1)またあなたさまはご自分の聖徒を、特別に扱ってくださることを感謝いたします。(詩篇4・3)あなたさまは夕方五時にぶどう園に来た私の主人に、一デナリという約束の天国へのパスポートをくださいましたことを感謝いたします。まったくこれは一方的な恵みです。この病院生活の苦痛の中で、主人はあなたさまのために何のご奉仕もできませんでしたが、あなたさまはいつも主人と共にいてくださりありがとうございます。あなたさまの送られた一人子の神、イエス・キリストは、悲しみの人で病を知っていた方であることを感謝いたします。またあなたさまはご自分が苦しまれたので、苦しんでいる人の心をもご存知ですから感謝いたします。十字架の上で『わが神、わが神。どうしてわたしをお見捨てになったのですか』とまで叫ばれて、私たち人類の罪を背負い、贖いの御わざを成就してくださった主イエスさま、ありがとうございます」

今朝はもう主人の部屋には朝食も運ばれてこなくなりました。必要がないのです。遠慮がちにドアをノックする音がするのでそっとドアを半分開けて見ると、見知らぬ青年が立っております。この人も入院患者らしく白い寝巻きを着て心配そうな顔です。

「どなたさまでしょうか」

「私はKという者です。おじさんはいかがですか?」

私は思い出しました。主人から祈ってくれるよう頼まれた、あの青年でした。

「ああ、あの時のKさんですね。もうすっかりよくおなりになったのですか」

「はい。あの時おじさんが祈ってくださったので、ほんとうにうれしかったんです。僕、明日退院するので、お礼にうかがいました」

「そうですか。わざわざありがとうございます。主人はもうすぐ、天国に参りますでしょう…」

K青年は目を丸くして私の顔を見ました。そして両手を顔に当てて、

「おじさあん。僕のために祈ってくれたのに……」と泣きながら廊下をかけてゆきました。私はその後ろ姿を見ながら、彼の救いのために祈りました。主人が生前、福音を伝えた唯一の人だったでしょう。私は、神が主人を一粒の麦とならせてくださることを信じて感謝いたしました。

看護婦さんにお願いして、私はいつものように家に帰りました。シャワーを浴びて朝食を済ませ、洋服を着替えていると病院から電話がありました。急変したのですぐ来てくださいということです。

「主よ。天国に主人を招いてくださっていることを感謝いたします」と祈りつつ家を出ようとすると、ちょうど花束をもった私の友人がお見舞いにきてくださいました。その方を家の人に頼んで郵便箱を見ると、アメリカの娘から父の日のカードがきたところです。私はそれをつかんで自動車に飛び乗りました。

病院に入ると、もう呼吸の止まった主人のベッドのそばに、二人の医師と三人の看護婦さんたちが立っていて、気の毒そうな顔で私を見ました。部屋はいつものように輝いていました。私はすべてを了解し「長い間お世話になりありがとうございました」とお礼をのべました。あわてた担当医の先生は、「今、人工呼吸もいたしましたがとうとうだめでした」と言いました。神の光の前に人間の考えや言葉はまったく何の価値もないものでした。

この医師たちがクリスチャンだったらどうでしょうか。私たちは共に手を取り主イエス・キリストを賛美したことでしょう。

父なる神はこの時突如として、私にこの場でイエス・キリストを証(あか)しするように迫られました。私はベッドと医師たちを後ろにして壁の方を向き、見えない神に礼拝し感謝を捧げました。大きな声で祈りました。いいえ、祈らされたのです。

「天の父なる神さま、み名を賛美申し上げます。主人を天国へ導いてくださりありがとうございました。この世の肉体の苦痛から解き放ってくださりありがとうございます。痛みも苦しみもない天国へ招かれたことを心から感謝いたします。イエスさまのみ名によって、アーメン」

立ち上って後ろを振り向きますと、医師たちは無言のままぼう然と私を見ておりました。

ベッドの主人のまくらの横には、私がいつもお願いしていたので、看護婦さんはちゃんと主人が読んでいた聖書を置いてくださっておりました。

ああ、イエスさま、あなたさまの十字架上での贖いのゆえに、私たちはしばしの後に天の御国でまた会うことができるのです。あなたさまは希望の神、忍耐の神、そしてよみがえりの神です。

私の心は主イエス・キリストへの賛美と感謝であふれました。

彼に信頼する者は、失望させられることがない。（ローマ　10・11）

私たちは土で造られた者のかたちを持っていたように、天上のかたちをも持つのです。兄弟たちよ。私はこのことを言っておきます。血肉のからだは神の国を相続できません。朽ちるものは、朽ちないものを相続できません。（Ⅰコリント 15・49、50）

しかし、朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた」としるされている、みことばが実現します。（Ⅰコリント 15・54）

しかし、神に感謝すべきです。神は、私たちの主イエス・キリストによって、私たちに勝利を与えてくださいました。（Ⅰコリント 15・57）

かつて恐怖の壁であった「死」が、ついに勝利にのまれてしまったとは何とすばらしい福音でしょうか。

何の価値もない土で造られたものでありながら、天上のかたちをも持たせてくださるこのよみがえりの主イエス・キリストの力とは、何とすばらしいものでしょうか。ちりになるのみでなく、永遠の神の裁きの火に燃やされるべき人間のいのちに、ついに主イエス・キリストは不死を着せてくださり死に勝利させてくださいました。

ハレルヤ、主のみ名はほむべきかな。私はヨブのように叫びます。

その時私はある光景を思い出しました。たしかに同じ死体です。でも何か違うのです。それは私が学生の時、三十数年前の人体解剖学実習室でのことでした。

コンクリートの冷たい地下の実習室の、これもまた冷たい石のベッドのような解剖台の上に、冷たく乾いた死体が並んでいました。戦争の末期で死体はたくさんありました。まるで猫か犬の死体が道端にころがっているように、または魚市場に投げ出されている大きな魚のように、それらはまるで人間とはほど遠い物質の塊のようでした。悪臭のたちこめるその部屋で、それらの死体は無言のうちに私に語りかけたのです。ある死体は言いました。

「どうだ。おまえは死が怖くないのかね」

私は恐ろしさに震えながら答えました。

「怖いです。怖いです。私は今、この部屋から逃げたいくらいです。死なんて考えたくもありません。見るのもいやです」

「ではおまえは死なないつもりかね」

「死にたくないけれど死ななければならないでしょう。でも私はまだ若いんです。二〇歳です。死ぬことなんか考えたくありません」

「ふーん。おまえも『死』にふろしきをかぶせて、押し入れの中にしまって見えないようにして隠している人たちの仲間だね。ある日その『死』がふろしきをかなぐり捨て、おまえの前におどり出てきた時どうするつもりかね」

「いやです。いやです。もう黙ってください。死ぬまでのしばらくの間、『死』を忘れて楽しく暮らしたいのですから。私はまだ若いのです」

「ふん。おまえの友だちは最近二人死んだけれど、年はいくつだったかね」

「一人は十七歳。一人は十八歳でした。でも私と関係はありません」

栄養失調の行き倒れの死体の中でも、少し皮下脂肪の多そうな若い死体が言いました。

「じつは私もそう思っていたのです。しかし絶対者であり支配者である神の力の前にはどうすることもできなかったのです。私は無意味な人生を生きて、戦争のために爆風でこのように死ななければなりませんでした。私は動物のように吹き飛ばされて死にました」

「動物のようにね。それが私は怖いのです。人間とは一体何なのですか。動物とどこが違うのですか。文明を持った動物を人間と呼ぶのですか」

別の死体が言いました。

「何を言っているのか。文明も哲学も宗教も、人間のいのちとは関係ないのさ。ただ言えることはお前が確実に一秒一秒『死』に向かって歩いていることだけなのだ。生まれた瞬間からね。そしてお前が見て恐れている私たちのこのみじめな死体は、すなわちおまえの終わりの日の姿なのさ。私たちもおまえも何の変わりもない同じものなんだ」

絶体絶命、私はまったく同感でした。もし人間に、「何か」がない限りは。私は父が幼い日に教えてくれた、天と地とすべてのものを創られた唯一の神である方に祈りました。

「神さま、創造者で全知全能の絶対者でまたすべてのものの支配者。私は今あなたのことを神さまとお呼びいたします。なぜならお呼びする他の名前を知らないからです。あなたは今、私がどうしてもあなたに祈らなければならないほど悩んでいることをご存知でしょう。どうぞ教えてください。人間は何のために生きてどうしてあのように死ぬのですか。ある哲学者は言ったそうです。『人は生まれ苦しみそして死ぬ』と。でも私はいやです。目的のない人生を動物のように生きていたくありません。それなら生まれてこなければよかったのです。でも私は気がついたら生まれていました。もう元に引き返すことはできないのです。私はどうしたらよいのですか。どうしたら人間として誇りをもって生きてゆけるのでしょうか。どうぞ教えてください。私はこのみじめな人間の一生から救われたいのです」

祈り終わると私の心の中にある崇高な思いが広がってきました。永遠なるものへの憧れが湧いてきました。

「神さま。私はあなたさまと親しくさせていただきたいのです。そしてお話を伺いたいのです。でもどうしたらあなたさまと連絡をとることができるのでしょうか。どうしたらお話を伺うことができるでしょうか。あなたさまはすべてをご存知です」

いつか必ず私はこの方と連絡ができるという確信を与えられました。どうしてかわかりません。この確信だけをもって、暗中模索の人生を私は歩んできたのでした。

二十年後、私は救い主、イエス・キリストという神の一人子に出会いました。クリスチャンと呼ばれている輝いた顔の人たちの中に、私はこの方の栄光を見ました。そして私の人生がこの方の栄光のためにあり、この方の栄光のために死ぬものであるということがわかりました。私はやっと人生の目的を見出しました。またこの方を通らなければ、だれも天の父なる神のみもとへ行くことはできないという事もわかりました。また私が恐れていた「死」は、人間の罪の報酬であるという事もわかりました。人間は一度死ぬことと死後裁かれることが定められているという事もわかりました。でもこのイエス・キリストという罪のない神の一人子が、私たちの罪の身代りとなって十字架で死んでくださったゆえに、それを信じて悔い改めるならば、罪は赦され永遠のいのちに入ることができるという事を聞きました。私は自分で赦そうとして努力していた罪が、どうしても自分の力では赦せない事を知っていました。この方は死んで三日目によみがえられ、今も生きて天の父の右の座におられて、私たちのためにとりなしていてくださる事を聞きました。私の心は罪赦されて清められることと、永遠の命への思いで希望にふくらみました。あの二十年前の、人体解剖学実習室での悲しくみじめないのちへの絶望の思いは、この時消えてなくなりました。私は夢中でよみがえりの主であるイエス・キリストにしがみつきました。私を救ってくださったのはあなたです。私はもうあなたを離しません。と私は言いました。この方はもう一度この世に来るということを聞きました。その時この方を信じた人たちは、栄光の姿をもって天に上げられるというのです。輝ける天の御国が見えるようでした。私はその日が待ち遠しくて待ち遠しくて、天上への憧れはつのるばかりです。なぜならそこは私たちのふるさとだからです。

私がまだこの方を知らない時に、この方は罪人であった私のためにいのちを捨ててくださいました。この方の偉大な愛は私を圧倒しました。なぜならこのような深く広い愛を、私はこの時まで知らなかったからです。またこの方の厳しさと正しさにもふれたのです。

十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。
（マタイ　10・38）

わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいる所に、わたしに仕える者もいるべきです。もしわたしに仕えるなら、父はその人に報いてくださいます。
（ヨハネ　12・26）

私はこの方の厳しさをも愛したのでした。でも私の人間的な弱さは、私をこの世に引き止めようといくどしたことでしょうか。私は今心から言うことができます。

「主よ。苦しみに会ったことはしあわせでした」と。

主人の告別式は、伝道会として神の祝福の場とされました。私は心から救い主、イエス・キリストを賛美いたしました。ある人は私にピンクの花束をくださり、ある人は言いました。「あなたの顔は輝いています。心からご主人が天国に招かれておめでとうございますと言いましょう」と。またこの時を通して私の母、弟、二人の妹、患者さんたち二十人以上が、救いに導かれました。

主は、すばらしいお方です。

ああ、私は床の上であなたを思い出し、
夜ふけて私はあなたを思います。
あなたは私の助けでした。
み翼の陰で、私は喜び歌います。
私のたましいは、あなたにすがり、
あなたの右の手は私をささえてくださいます。

（詩篇　63・6、7、8）

虚（むな）しさからの脱出

野田　繁

一九四一年兵庫県川西市に生る。終戦後東京に移住し、桃井第4小、明治大付属中・高校を経て明治大商学部卒。第一実業㈱入社、現在情報機器に関する営業担当の次長。家族は妻暢子さん、長男賢一君、次男浩司君。趣味は旅行など。



▲会社の運動会。豊島園グランドにて。'74年。

▼軽井沢バイブルキャンプで妻と。'80年11月。



▼会社で。'78年。



▼母の誕生日。吉祥寺聘珍楼にて。



私はある商事会社に勤務する平凡なサラリーマンです。聖書の福音に、はじめて接するようになった六年前にくらべますと、救われている現実をさまざまな喜びとして覚えることができるのが不思議にさえ感じます。私自身には、いわゆるイエス・キリストとの劇的な出逢いこそありませんでしたが、主イエスは私にもっともふさわしい方法で導いてくださいました。

どのようにして聖書に触れるようになったか

私は、若い頃から聖書の福音に接していたわけではなく、人生の折り返し点ともとれる35才の時にはじめて、聖書にふれる機会が与えられました。それまでは「こういう分野」には入りたくありませんでしたし、大学時代に英語の勉強で渋谷の教会に通ったことはありますが、何となく雰囲気が好きになれなかったこと、日本人の常として何か受け入れにくいような受けとめ方をしていました。自分の生き方を通しても、「自力で入学し、自分の力で入社したのだ」という、傲慢な態度がわざわいして、たとえ食わず嫌いといわれても聖書には無関心で通そう、と思っていたからです。それでなくても、このややこしい時代に、これ以上ややこしくなってはかなわない、とも考えていました。けれども小さい時、叔父の死にあったり、高校時代に、二人の知人をそれぞれ自殺で失った時、死というものを自分なりに真剣に考えたことがあり、死に対する何ともいえない恐ろしさを自分なりに紛らわす一方、たとえば当時の生徒会誌には、「自分も完全なものを求めて歩んでいるのだが……」とその不安な気持を追悼文集に投稿したりしています。

さて、吉祥寺キリスト集会へ顔を出すようになり聖書を手にするようになった直接のきっかけ

は、家内の熱心な勧めがあったからで、事実、彼女は聖書を読みはじめてから、少しづつ変ってきたのに気付きました。長い間考えていたことがふっきれたような感じです。彼女が洗礼を受ける決心をしてからは、自分も自分なりにある程度聖書を知っておかなければ……と思いましたが仕事も忙がしく、何か特殊な宗教社会へ引きずり込まれるのではないかと非常に逃避的でした。確か昭和五十一年の夏頃だったと思いますが、吉祥寺キリスト集会へはじめて顔を出したとき、集会の責任をもっておられるベック兄が近寄ってこられたので、あわてて知っている英語で、"I am glad to meet you." と、心にもない挨拶をしてしまいましたが、極めて流暢な日本語で「よくいらっしゃいました」と言われ、私の小さな手がつぶれんばかりに力一杯の握手をされ、痛さを我慢しながら作り笑いをしてしまいました。でも、本当にニコニコしておられ、もう一つびっくりしたことは、どちらかというといやいや足を運んできたにもかかわらず、そこに来ている方々の、自然な喜びと集会の明るさでした。

それでもやはり、集会へ行くのは正直いって苦痛でした。何ヵ月かたって、自分が聖書をまったく読まないままで「断る」のも、あるいは知ろうともしないで拒絶するのも良くないと思い、いきなり聖書から読みはじめるのにはこだわりがありましたので、以前集会のある方にすすめられた日本聖書刊行会発行の「人生を変える」を購入して読みはじめました。実は、これこそ題が違うだけで（段々と知らされたことですが）内容は聖書そのものでした。次第に、聖書に対して抱いていた誤解と偏見は取り除かれていくのですが、一通り調べてから……というつまらない私のこだわり、面子のようなものが、逆に役立つ結果となったのです。

バイブルキャンプに参加

当時から、吉祥寺キリスト集会では、年に何回か、軽井沢でバイブルキャンプを開いており、その年の秋に、家族を連れてはじめてそのキャンプに参加してみました。家族を連れて、というのは実は誤った表現で、子供が楽しみにしていたことと、家内が本当に熱心に勧めるので、週末に一人置き去りにされてはかなわないと思い、重い腰をあげて恐る恐る連れられていったようなわけです。

軽井沢のキャンプ地は本当によいところでした。秋も深く、すでに紅葉が美しくて、ひんやりとした空気の中で、東京では味わうことのできないすばらしい環境をたのしむことはできましたが、聖書からのメッセージにはまったく無頓着で、お借りした部厚い聖書も、ただ開くだけで、内容はまったく解りませんでした。お話しの間は、漢字の数を必死になって数えたり、外の景色をぼんやり眺めたり、ストーブの暖かさも手伝ってうとうとしたりで、横に坐っていた家内も、ひやひやしていたそうです。

しかし私は、このキャンプを通して一つの不思議なことを発見したのです。それは他人のために祈るということです。すなわち、集っている多くのクリスチャンの方が、本当に真剣になって「私の心が開かれるように」祈っていてくださったことです。他人のために祈る……こんなことは私には考えられないことでした。ですから逆に「ひまな人が世の中には結構いるものだなあ」と思いましたし、むしろ迷惑にさえ感じました。その頃の私は、仕事を通しての利害関係の中にどっぷりつかっていたためか、心にあったことは、「どうすればうまく仕事が進められるか」、

「どうしたらもっと儲かるか」、「もっと良い商品が見つからないか」、「どのようにすれば職場での人間関係を円滑に営めるか」ということばかりでしたので、自分を犠牲にして他人のことを祈る人種が存在するなどということは、到底理解しがたいことでした。

夜、食堂に集り、ストーブを囲みながら交した会話は次のようなものでした。

「神様の存在を信じますか?」

「信じません。いるかも知れないし、いないかも知れない」

「なぜですか?」

「世の中、あまりに矛盾と不合理が多くて、それに一生懸命努力しても、なかなか自分の思うようにはならないし……」

「罪って解りますか?」

「自分には、ありません」

「死んだあとは?」

「何もありません。無です」

「何を基準に生きていますか?」

「和と協力の精神です。また、唯一のたよりは自分自身でしょう……」

「ご一緒に聖書を読みはじめませんか?」

「いや結構ですよ。それでなくともややこしい時代に、これ以上面倒なことになっては……」

私の口調が次第に荒々しくなり、極端に不快な表情を見せはじめてからは、周囲の人は気を利

かして話題をほかに移されましたが、正直いってすがすがしい自由なクリスチャンにくらべて、自分の心は何かもつれてゆくタコ糸のように思えてなりませんでした。一人一人はとっても親切でした。この人たちには、自分にない何かがある。

読みはじめる

いつまでも中途半端でいては、と考え、「人生を変える」を真剣に読みはじめましたが、いわゆるキリスト教（それまでキリスト教という宗教にこだわっていました）にかたよることを恐れていた私は、同時にさまざまな角度から沢山の本を読みはじめました。それは遠回りでしたが、私にとって必要な方法だったのでしょう。実は私は、昔から本を読むのが嫌いで、あまり熱心に集中して本を読むことが少い者でしたが、どういうわけか、その少し前に、山岡荘八著「徳川家康」二十六巻を奇跡的に二ヵ月で読み通し、本を読む根気をあらかじめ備えられるようなプロセスがありました。よせばよいのに、会社で「全巻を六十日弱で読破したぞ！」と吹聴していましたらひと月で完読した人もいて、すっかり笑われてしまいました。家内は常々遠回りせずに「聖書をまず読まなければ駄目よ。まず聖書を」と言い続け、日が経つにつれますます懇願調に変ってきましたが、時には聖書を避けるように他の本に没頭しました。「夜と霧」「代表的日本人」（内村鑑三著）「塩狩峠」「こころ」「行人」……あるいは「宗教を現代に問う」といった、当時毎日新聞社の出版したシリーズものにも手を伸ばし、自分なりに聖書はどう位置づけられているかを調べようとしていたわけで、ほんの短時間に、そういった信仰や宗教色の強い本を三十冊ぐらいも読んだように覚えています。どうやら心の中には「聖書が絶対」という皆の言葉に激しい反発があったことは事実で、結局はまったく異質な書物である聖書にたどりつくまでの抵抗だったようです。聖書を否定するために企画されたといわれる「ベンハー」の作者が、結局聖書に魅せられてゆくようになる過程を、今、思い起こされます。そして真剣に「人生を変える」を読みかえすようになりました。

私の持っていたいくつかの誤解

まず第一に「聖書」という本に対してのイメージでした。少なくとも聖書というのは、道徳的で潔い、あるいは厳しい西洋の書物であるとばかり思っていました。またイエス・キリストという一人の歴史上の偉大な人物を伝えている本という程度の認識でした。ですから、とっつきにくい読みたくないという先入観。何か自分が縛られてゆくような不安にかられる存在。さらに、この忙しいビジネスの世界に何が一体役立つのだろうか……。でも偏見を持たずに虚心に読みはじめると、聖書の、読者に訴える力の大きさを感じるようになり、どうしても理解できないという個所にぶつかると、そのままにして読み続けてゆき、やがて自分が抱いている特別なイメージが、徐々にほぐれてゆくようになりました。聖書が実に奇妙な本であることを感じたのは、旧約聖書新約聖書を併せて、多くの人がお互い何の打合せもしないのに、一つのこと「イエス・キリスト」にストーリーが集結することでした。すなわち、人間の罪の問題とそれから救われる必要性（Ⅱテモテ3・15、16）……私は日本におけるキリスト教が聖書を一応土台にしていることは理解で

きても、聖書は宗教としてのキリスト教を伝えているのではなく、救い主としてのイエス・キリストを伝えていることが次第に解ってきました。

第二に「教会」という言葉の解釈です。そんなことはどうでもよいことかも知れないでしょうが、妙にこだわりがありました。教会というと、一般には荘厳な建物やおごそかな音楽の流れるところ、また難しい説教を聴く場所と思っていましたから、私が導かれたところが「〇〇〇キリスト集会」と呼称しているので、「どうしてかな?」と疑問がありました。個人的には、それまでインテリじみたつき合いにくい雰囲気が教会の特色だという印象をもっており、まだしもお寺の方が肌に合うなあと感じていました。けれども聖書には、教会を「ふたりでも三人でも、わたし（主イエス）の名において集まるところには、私もその中にいるからです」（マタイ18・20）と書いてあることや、「使徒の働き」に載っている初代教会の姿が、心のこだわりをほぐしてくれました。

第三に「宗教」観。私は聖書を「宗教の教典」と思いこんでいたため、反発していました。私は一生懸命に努力することによって自力で生きてゆこうとし、生涯無神論者で通したいと考えていたものですから、宗教という世界にはぞっとするような嫌悪感を持っていました。「私は決して弱くない。神に頼らずに生きる」そんな気慨でした。ですから宗教に近づく人たちはどんな人なのか、を知るためにも「宗教を現代に問う」を読んだと記憶しています。けれども、冷静に考えさせられたことは、有史以前から存在する神は、人間がどう言おうと、つまり、私個人が神様を受け入れようが拒もうが、この世界を創造された神は厳然と存在しておられること、そして世の

中で見かける「いわゆる神々」とは、人間の側から作りあげた、人間がはかない努力で追い求める宗教としての神々にすぎない、という現実でした。聖書は、これを偶像ときめつけています。聖書を、人間の側の都合に合わせて、宗教界の一部分に引きずり込んでよしとするのは、確かに人間側の自由であり勝手であるかも知れませんが、聖書は決してそのような、いわゆる宗教の書ではありません。

私自身、聖書を読み進むうちに、聖書が「人間が努力したり、捜し求めて作りあげてゆくような、人間側から見ての理想の宗教像」を決して描いているものではなく、むしろ神様からの一方的な愛とあわれみとしての福音が、くり返しくり返し宣べ伝えられている書であることがぼんやりと解ってきたのです。思えばずい分、遠まわりをしてきたようでした。聖書は、「神様が私に一体何を語ろうとされているのか」を問いかけながら読んでいくと、はじめて心にささり、何かが見えてくる書です。私はまた、いわゆる宗教というものの陥りやすい悪い面も、その間違いをマタイの福音書から教えられました。それでも当時、私は集会のあるクリスチャンの方に、次のような手紙を綴っているのです。

「私は聴く耳を持たないようです。現実に毎日が恵まれすぎていて（空いばりだったのでしょう）必要性がなく、宗教への私自身の抵抗も大きいのです。またいくらよいことでも、強制されるのは嫌です!」

どうやら、宗教という言葉を使って逃げまわっていたようです。

聖書を読みながらの心の戦い

読む以上は、できる限り自分の血となり肉となるような読み方をすべきなのに、さまざまな枝葉のことに一つ一つ愚痴をつけながら読んでいたようで、ひねくれている性格をそのまま浮き彫りにしているようでした。思い出しながら、その事例をいくつかあげてみます。

某月某日

「わたしが来たのは地に平和をもたらすためだと思ってはなりません」（マタイ　10・34）

この箇所にふれるなり不愉快になって読み続けるのを止めた。聞いていたことと話が違う。

某月某日

「天におられるわたしの父のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです」（マタイ　12・50）

何のことかさっぱり解らない。それにしてもいとも簡単に兄弟とか姉妹とか。気安いなあ。

某月某日

「人から出てくるものが、人を汚すものなのです」（マルコ　7・16）

冗談ではない。人にはそれぞれ良い面があり、皆せい一杯真剣に生きようとしているのに。

某月某日

「さばいてはいけません」（ルカ　6・37）

たまたま賞与の査定期にあたっていたので、とてもつらい気持になった。査定するより査定される方が楽に決っている。こんな追い打ちを忙しい今、かけてくれなくてもよいのに。

某月某日

「あなたがたが、わたしの名によって何かを私に求めるなら、わたしはそれをしましょう」（ヨハネ　14・14）

えっ本当に？　正月の初詣ではないが、思わずあれもこれもと願いごとを口に出そうとしたがわたしの名によって、というところが妙に気になる。

某月某日

「少しも疑わずに、信じて願いなさい」（ヤコブ　1・6）

困ったな。入社以来商売は相手を疑うことから始めるようにと教わった。駆け引きも悪いのか。

某月某日

「重要なのは神の命令を守ることです」（Ⅰコリント　7・19）

そしてやがて、言葉じりをとらえたり、表面的な社会慣習を守ったり、儀式を重んじたりすることではなく、心から神様を恐れることの必要性がぼんやりと解りはじめてきたのです。

まあ、こんな調子で、当時の私の聖書の読み方は、何から何まで自己中心の読み方でした。自分を通していくら「信仰」を臨み見ようとしても、自我がふさいでそれを見させない、そんな感じでした。けれども集会の多くの兄弟の方がたは、とにかくどんな読み方でもよいから読み続けなさい、とすすめてくれました。

やがて私は、聖書が最も強く言おうとしている人間の「罪」という問題に、おぼろげながら気がつきはじめました。次にあげたみことばに目が止ったのも、その一例です。

私たちは、見えるものにではなく、見えないものにこそ目を留めます。見えるものは一時的であり、見えないものはいつまでも続くからです。（Ⅱコリント　4・18）

黙示録は、よく理解できませんでしたが、ペテロ第二の手紙の次の個所は、まさに私自身がこの部類に入るのか、と苦笑いをしてしまいました。

無知な、心の定まらない人たちは、聖書の他の個所のばあいもそうするのですが、それらの手紙を曲解し、自分自身に滅びを招いています。（Ⅱペテロ　3・16）

「たしかに俺は、自分自身が解っていない！」

私の当時の環境

当時の日本経済は、その発展が鈍り、高度経済成長時代が一区切りとなってきた頃で、世の中は、宣伝さえすれば売れるような華やかさはなくなってきましたし、会社の方も不運な事態が続いて減産経営に入り、創立以来のピンチを招いていました。安宅産業のニュースが他人ごとには思えないような、そんな状況でしたが（安宅産業から転職したクリスチャンの方の証しを聴いて大変に参考になりました）、自分の生きる目的や、何のために働いているかを考えるには、結果的によいチャンスになりました。私の上司は、「十人いて、パンが五つしか無かったら、一人一個ずつ取って残りの五人はもらえないようになるか、一人が半分ずつ分ち合い、お互いに我慢し

あうしかない」と、時代の流れが節目にきていることを説明してくれたものです。自分の年令や社会構造、企業の実態を眺めた時、難しい現実の問題にとまどいながらも、聖書のメッセージが鍵となってきているのか「仕事は大切な生きるための手段であり、会社そのものは人生の目的では無い」ということが解りはじめ（参照・創世記3・17～19）、かえって以前よりも身を入れて仕事ができるようになってきました。財産やお金を第一に追い求めていると、それが失われると き、本当に虚しさだけが残ってしまうことを、如実に示されるような思いでした。

一方、わが家には二人の子供がいますが、家内が洗礼を受ける時は、まだ小学生でした。私は子供の教育については、何一つ自信がありませんでしたが、かといって、母親に任せっきりにし ておくだけでよいものだろうかと思わされ、子供が自殺するニュースが流れたり、中学生が暴力を振るうことなど耳にしますと、「あれは特殊なケースですよ」と簡単に言い切れないような思いにかられ、自分の家庭に同じことが起らないという保証は何一つないのだ、と思うようになっていました。ですから、親として子供を一人前にするまでの責任は大きいなあ、と、今さらのように実感しました。子供たちは、学校では楽しそうに遊び、沢山の友人に恵まれ、また兄弟喧嘩らしいものもなく……それらのことは親を安心させてくれる一面でしたが、やがて過熱気味の受験戦争に入り、また物資が豊かになり、何不自由なく必要なものが与えられる時代にあって、物質文明や権威の頂点にたどりつくことだけが人生の目的ではないことを理解してほしい、そう願わずにはいられませんでした。ますます混乱と不確実性が加わるこの時代にあって、この子たちは「幻」の生きがいではなく、本当に心を打ちこんで献身できる「何か」を持つようにと、祈るよう

になっていました。

ある友人

信仰に導かれるとき、概してふさわしい人が与えられるのでしょうか、そんな歳月の流れる中でのある日、私の学生時代の友人であり、クリスチャンでもあるAさんに会うことができ、聴きたいと思っていた聖書についてのいくつかの質問をぶつけることができました。忙しい仕事の時間を快くさいてくれて、喫茶店が看板時間になるまで、十分に説明してくれました。

彼は、私のもつ疑問に対して、まとめながら一つの点に絞って話してくれました。

その一つは、聖書はこの世界を創られた神様（御子イエス・キリスト）が、私たち人間一人一人に直接語りかけているメッセージで、「個人的」にとらえねばならないこと。

もう一つは、神様は人間が救われることを願っておられ、そのためには悔い改めが必要なこと自分を通していくら神様をとらえようとしても、罪（自我）がふさいでしまい、それを見させないようにしていること、そして、それを解決するために、神様からの約束（賜物）としてイエス・キリストをこの世に送り、十字架にかかって人間の罪の解決の道を備えてくださったこと。

私は彼を非常に尊敬していましたが、こんな話をしたのはとに角初めてで、いつもは自己に厳しすぎる人のように見えたためか、あまり難しい話は、私からさけていたものです。このときに確か「眠られぬ夜のために」（第一部、第二部、カール・ヒルティ著）をいただきました。

こうして聖書が何を言おうとしているかの輪郭をつかむことができましたが、どうしても自分

の問題とは思えず、「キリストの十字架が自分の罪の解決のためであった」ということがいくら考えても実感として受け止められませんでした。ただ、神様が現実に存在していることは、はっきり認めなければならないと、示されてきました。

決心へ

その秋ごろからぼちぼち集会へは顔を出していましたので、ベックさんからは、

「一度ゆっくり、お話してみませんか？」

と言われていましたが、あるいは電話もいただきましたが、実際に口から出る言葉は、

「今日は会議がありますから」

「明日から出張のため忙しくて」

「疲れていますから」

などと、ずっとお断り続けていました。それは、はっきり白黒をつけることが嫌だったことと、ひょっとしたら降参させられて、とり返しのつかないことになるのではないかと、自分勝手な想像をしていたからです。妙なプライドもありました。食事のお誘いさえノーと答えていたのを覚えています。

しかし、聖書を読み、解らない疑問を詰め、それでも拒み通すのは男らしくないと思い、お会いしてみようと心に決めたのですが、そのときは初めて集会へ足を運びはじめた翌年の、三月十六日で、日記には次のように綴っています。

「また電話がきた。かかってくるのではないかと思った。うるさいなあ。でもなぜか暖かい声だ。私一人がクリスチャンになったからといって、何のメリットがあるのだろうか。私が神様を信じようが信じまいが、私個人の問題にすぎないと思うのに。でもはっきりした理由なしに会わないのは不自然だし失礼だ。彼の熱意に負けて会うことにした。正直いって、憂うつだ」と、かなりとり乱していたようです。でも、今でこそ感謝できることは、一人の人間の失われている魂への暖かい思いやり。そして軽井沢キャンプで覗いた「他人のために祈る」ことの意味。

その翌日、ベックさんとお会いし、「罪」について解りやすくお話をいただきました。「罪」という言葉は、決して快い響きがありませんでしたが、聖書が、「神様は罪を憎み、しかし罪人を愛する」ことを証しするために、一人子イエス・キリストを遣わし、そして十字架にかかられたことから、実際の生活に具体的に照らし合わせながら、解りやすく説明されました。小さな、つまらないことに必死になって意地をはり続けていた自分が、また自分のもっていた誤解や偏見が、何か恥ずかしくなってしまいましたが、彼との話を通して感心させられたことは、「彼にはしっかりした土台がある、ゆるぎないものがある。そしておそらく集会の一人一人にも共通したものに違いない。私には確固たる基盤がない。何を土台に生きてきたのか？何を土台に生きようとしているのか」ということでした。そして帰りぎわに、神様に従って歩みはじめられるように、一緒に祈ったのを覚えています。小さい時からわがまま一途で育ち、学校時代も好き勝手なことをやらせてもらい、卒業して運よく今の会社に入って働きだしてから十年あまりを経過し、たしかに外見上は順風満帆に見えた生活も、ややうわべだけのつくろいにさえ思われて、「これから、新しい

何かがはじまるかな」「見せかけの、つっぱった生活から、少しでも解放されなければ」「今までは死ぬことの不安にとりつかれることが多かったが、聖書の言葉は、だてには何千年も継承されているはずがなく、罪の解決が死の問題の解決の鍵であるのなら……」と、希望のようなものが湧いてきて、主イエスは私の底にある、得体の知れない虚しさを、はっきりと掘り起こし示してくださったのです。

洗礼へ

元来、こういう問題に対しては、悩みが多くなる青年期や人生の峠を越した熟年期に、比較的関心が集まるか、何か重い病気とか事故のような、厳しい試練を通して真剣に考えるケースが多いようですが、確かに、忙しい働き盛りの壮年期にあっては、たとえば仕事が面白くて仕方がなかったり、育児に追われてしまっているような場合は、信仰を持つ持たない、の必要性を、十分に考えることは難しいかも知れません。

そういうわけで、洗礼を受ける前の心の葛藤の中にあって、ある人から「考えすぎだよ」とか「みっともないね、いい年して」といわれたのは事実です。信仰とは、自分一人の個人的な問題とは知りながら、やはり知り合いの人の言葉となると気になるもので、ましてや心の中でも洗礼までいくつかの心の戦いがありました。「まじめになりすぎて、この世の中で過ごしにくくなるのではないか」「複雑な生活慣習にある日本で果して円満にやってゆけるだろうか」「今まで積み重ねてきたものが失われ、価値観がすっかり変えさせられてしまうのでは」「当分の間は忙しいし、

もう少し先へ、洗礼を延ばそうかな」あるいは「もう少し年をとってからでも」……。

私は傲慢でした。たとえば人間は、いくら真面目になろうとしても自分の力では難しいわけで、また自分が自分の選択で真面目になれる、と思っていたのですから、お恥ずかしい次第です。

聖書は「今が時だ」と繰り返し繰り返しのべています。示されたとき、導かれたときが「その時」と言っています。「あれをしてはいけない」「これをしてはいけない」と、いわゆる律法的な戒律を守るように勧めているのではなく、聖人君子のようになるように命令しているわけでもなく、「まず人間が罪（神から離れている状態）を認め、悔い改める」ことを終始一貫して説いています。

私が洗礼に至るまでに与えられた聖句は、次の三ヵ所でした。

人は、たとい全世界を手に入れても、自分自身を失い、損じたら、何の得がありましょう。
（ルカ　9・25）

ただ、おのおのが、主からいただいた分に応じ、また神がおのおのをお召しになったときのままの状態で歩むべきです。
（Ⅰコリント　7・17）

神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。
（Ⅰコリント　10・13）

そして洗礼を受けたのが昭和五十三年四月十日であり、洗礼式では、私に多くのアドバイスをしてくださった江藤さんが、「主は私の羊飼い……」ではじまる詩篇二十三篇全部を読み、祈ってくださいました。

日々感じること

クリスチャン生活をするということ、信仰を持つということは、遠回りしてしまった私がいうのは恥ずかしい限りですが、決して難しいことではない訳で、聖書には、

神は人を正しい者に造られたが、人は多くの理屈を捜し求めたのだ。（伝道者　7・29）

とありますが、なるほどそうかなあ、と思いました。

クリスチャンになるということは、本質的に聖書を詳しく学ぶことではなく、いわゆる教会へ几帳面に通うことではなく、真面目に敬虔に生きねばならないということではなく、きちんと定期的に献金することではなく、美しく祈ることでもないことが解りました。私は、少くともそうしなければクリスチャン生活には入門できない「資格」のようなものだと信じていましたから。人間である以上、日本人であろうが外国人であろうが、「罪」という性質があり、それを認めようが認めまいが、結果的に人間を苦しめていること（三浦綾子著の「自我の構図」「氷点」などを読むとよく説明されています）、そして人間の幸福は決して外から訪れるものではなく、心の中の問題「罪」の解決がなければ、ゆるぎない平安はない、ということを聖書から教えられました。賭

けて出発したことがよかった、と、つくづく思いました。イエス・キリストの十字架という尊い犠牲が、私自身の罪の解決であったことを信仰によって受け入れてから、確かに日常生活に変化が出てきました。家ではよく愚痴ばかり並べていたのが感謝に変り、「虚しさ」は日ごとにうすれてゆきました。今までは表面的な明るさでごまかしてきていましたが、共通の土台が与えられたことによって、問題を徹底的に話しあうようになりました。私の結婚一つふりかえってみても、自分なりに一生懸命考えて出発したつもりが、単なる「好きである」という感情に押し流されていたと思える時があり、神様が私たちに示してくださった「愛」というのは、そんな安っぽいものではないことも教えられました。

日常の喜びが増すと、自然に聖書に接する気持が深くなり、集会へも楽しく出られるようになり、より前向きな明るい交わりも与えられ、また献金も義理でなく感謝をもってできるようになりました。二人の子供も喜んで日曜学校へ集っています。

またサラリーマンの生活では、「いちいち気にしたって仕方ないさ」と互いに慰め合いながらも、ストレスに埋もれている日が多いものであり、職場の人間関係を大切に保つようにそれぞれ考えます。特に日本社会は地位や序列を過剰に意識し、また自分の行動を決める際、他人からどう見られるか、他の人はどう反応するかを気にして、影響されることもしばしばです。また意見をはっきり言うと摩擦を起こすので控え目になり、かえって相手を傷つけることがあります。そういう意味では私自身、典型的な日本のサラリーマンでした。

けれども、まず神様と私の関係を正しくすることからうながされて、毎日の問題に一つ一つ考

え、祈り求めてきますと、それなりに道が開かれてくるもので、

人はうわべを見るが、主は心を見る。

（Ⅰサムエル　16・7）

という聖句は、厳しい叱責となったり、また時にはやさしい慰めの言葉として与えられたりします。他人とくらべる前に、「そういうお前は、どうなのだ?」という主の声は、性格的に短気で横暴な言動に走りやすい私の悪いくせをとどめてくれる時もあります。

クリスチャンになったからといって、現実のきびしさが遠のくわけではなく、難しい仕事もありますし、クレームも発生します。職場での人間の軋轢に巻きこまれるケースもしばしばです。家庭の中も、やりくりが楽になったわけでなく、受験地獄のまっただ中に突っこまれています。しかし、きわめて人間的に独力で解決しようとする時、しっぺがえしされるもので、立つべき土台が与えられている「便利」なクリスチャンは、立つべき土台に立って処理しなければならないことを教えられる毎日であり、確かに、護られてきています。

私は洗礼を受けてから間もなく、三組のクリスチャンホームに招かれました。もうその時は私も喜んで出かけましたが、ほんとうに「あたたかいなあ」という快い印象を受け、自分が向かおうとしている方向がこういう世界か、と感謝しました。あと何年たったらこの人たちと同じようになれるのかな、と思わずうらやましくなりましたが、私どもには私どもにふさわしい方法が備えられますように、と祈ったものです。

私たちの身近かな生活は、毎日が大変なスピードで動いています。いかにも幸せそうに、また

張りきって過ごしているように見えても、いざ内側を覗く時、さまざまな悩みや葛藤の中に戦っている事例を多く聴きます。そして何らかの形で聖書の福音にふれて、救われた後のそれぞれの証しに接しますと、神様が生きていて、私たち一人一人に働いてくださっていることを実感します。幸い、吉祥寺キリスト集会には、老若男女いろいろな方がまんべんなく集い、携わっている職業も千差万別で、導かれる方法も多種多様であり、私自身の毎日の歩みにも大きな励ましとなっています。

そして私にとって、繰り返し繰り返し心にとどめねばならない聖句は、次のみことばです。

心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りにたよるな。

（箴言　3・5）

主が語られたことは必ず実現する

染野　待子

東京都吉祥寺に生る。立教女学院を経て成城学園短大卒。アクセサリーデザイナー、彫金などの仕事をし、その後ＴＶプロデューサーの茂夫さんと結婚。子供は長女麻衣子さんと長男浩一郎君。読書は狂がつくくらいの本好き。

▼主人受洗の日に家族４人で。



両親の死

私は、四人兄妹の一人娘として、両親に本当に可愛がられて育ちました。小学校から聖公会のミッション・スクールで育ちましたが、本当の福音に接したことはなく、「救い」という言葉さえ知りませんでした。神は唯一であり、天地の創造者であり、イエスさまは救い主として、十字架にかかられた、という頭の知識だけで、実際は神さまから遠く離れた、傲慢な者でした。

主は、そのような者をご自分の者にしてくださるために、色々な試練を私の人生に送り込まれました。両親は私を世の常ではないほど可愛がり、愛してくれましたし、私もまた、自分の命を投げ出してもよいと思うほど両親を愛していました。その両親を、主は一年間の内に天に召されました。二十三才にもなっていましたが、私はほとんど半狂乱といってよいほど、深い悲しみに沈みました。つい先刻まで肌を触れ合うことのできた暖かい身体が、見る見るうちに冷たくなってゆき、ただの物体のように何も語らず横たわり、火葬にされ、納骨されてゆく過程を、私は冷静に直視することは不可能でした。いのちのはかなさ、生の目的、世の中のさまざまな不条理を追求し、行きついたところは、生は死のためにある、という結論でした。父は生前いつも、「愛を求めなさい。真実の愛はお金で買うことのできない永遠のものである」と、テープに吹き込んでくれていましたが、親子でさえ死で切り離されるのです。私は、親子の愛以上のものを見い出せないと信じていましたし、自分自身を振り返りましても、永遠に続く愛など持ち合わせていませんでした。

神さまが愛そのものであることも、提供してくださる永遠のいのちのことも知りませんでしたから、絶望の果てに、三度も自殺を計りました。本当に罪深いことでした。命は神さまから与えられたものであり、自分自身のものではないことを知らなかったからです。

冬の夜中に海に入水したこともあり、多量に服毒したこともありました。友人は、「失恋したわけでもなく、親が死んだからといって死ぬなんて、弱すぎるし、考え過ぎよ」と言いましたが、私は、人間の行き着く先は死であるという事実を、人々はなぜ冷静に受け入れることができるのでしょうと、かえって不思議でした。死だけが願望であり目的になっていた、恐ろしい罪人の私を、主は赦してくださり、三度の行為を失敗に終らせてくださいました。

しかし、今はっきり主によって生かされてきたことを深く理解し、感謝しています。

次に主は、沢山の病いを送ってくださいました。胃。十二指腸潰瘍。肝炎。急性肺炎。腎臓炎。腸閉塞。声帯ポリープ。骨折など十指にあまり、慢性に移行して現在に至っているものもあります。

私は、それらのすべてを今感謝できるのです。それは、ほかの病んでいる方々のことを少しは理解させていただけるからです。主はすべてを益に変えてくださいます。

そのような中で、私は、自分の命を子供に受けついでいくことで、両親に対する孝行、恩返しができるのではないかと思うようになりました。子供を産む決心をしました。子供はまたその子供を愛することによってお返しをしていくしかないと、結婚を決意しました。しかし、二年足らずで破局に終ったのです。それは、私の我ままと、神さまを知らない思い上りが原因の、大きな罪でした。

けれども主は、私の犯した大きな過ちを赦してくださったばかりではなく、益に変えてくださ

ったのです。次のみことばのとおりです。

神を愛する人々、すなわち、神の御計画に従って召された人々のためには、神がすべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています。（ローマ　8・28）

集会の力石さんは私の最初の夫の父親です。神さまのお恵みにより、ずっと父親として愛することができたこと、また、永遠に主にある兄弟として、救われていますことは、本当に感謝です。力石のおじいちゃまは、悪性腫瘍という大きな試練にもかかわらず、日々喜びを持って天に召される時を迎えられました。このことは、この章の終りに別に書かせていただきますが、大きな危険な手術、肩から腕までの切断さえ、感謝の心を持って受けることができました。一つの部分が苦しめば、他の部分もともに苦しむというみことばそのもので、毎日兄姉方が交わりを持ってくださり、神さまの家族は本当に素晴らしいです。そればかりか、主にある兄弟として、今の主人に紹介することもできました。

主人の洗礼式の時には、おじいちゃまの実弟である辰一郎さんも、共に受洗なさいました。主の御名を心から賛美します。私たち人間が、神さまの前にへりくだり、悔い改めて救いを受けた時、驚くべきことに、神さまは身を低くして、私たちの心の中に聖霊として、宿ってくださるのです。この聖霊を通して始めて、人は他人を、いえ敵でさえも赦し、愛することが可能になるのです。ですからこの世の常識では考えられない光景を主は見せてくださいます。

みことばは、次のように言ってくださいます。

神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。

（Ⅰテモテ　2・4）

ですから、これから主人と共に、最初の夫の救いも祈ってゆきたいと思っています。

何事でも、神のみこころにかなう願いをするなら、神はその願いを聞いてくださるということ、これこそ神に対する私たちの確信です。私たちの願う事を神が聞いてくださると知れば、神に願ったその事は、すでにかなえられたと知るのです。（Ⅰヨハネ　5・14、15）

離婚と、そして再婚

十数年前の離婚ということがなければ、主人との出会いはなく、主人と出会っていなければ、私は、自分がまったく十字架刑に値するほど、神の御目に、聖なる聖なるお方の御前に、臭くて汚らわしい見るにたえない存在であることを、知ることができなかったかも知れません。

みことばは、心の中で思うことさえ、すでに罪であると教えます。ですから私は殺人者と変りはないということを知りました。主人を憎み、恨んだ毎日の生活がなければ、もし、家庭的な優しい主人でしたら、私は罪人であるという自覚すら持たなかったかも知れません。

もし、神の光に照らされていなかったとしたら、自分だけが可哀相で、忍耐深く、正しいのだと思い続けていたかも知れません。

もし、神が愛であり、この私のために死んでくださったのだということを知らなかったとした

ら人生を呪い、主人を恨み、決して赦すことはできなかったかも知れません。

もし、神があわれみの方であり、罪人を招くためにいらしてくださり、救い主、癒し主、赦し主であり、永遠のいのちを与えてくださり、「重荷を負っている人は来なさい。わたしが休ませてあげます」と呼びかけておられることを知らなかったとしたら、私は考えるだけでもぞっとする滅びの生涯を送らなければならなかったかもしれません。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ　3・16）

右のみことばに私は自分の名前を入れて読みました。御名を心から賛美し、感謝します。

ここで少し主人との生活に触れなくてはなりません。お話するのは辛いことですけれど、主がすべて赦してくださっている問題ですから、主のご栄光が現れますならば、あえてお話させていただきます。私は二度目というハンディキャップがあり、前の結婚の反省もありましたので、今度こそはという思いで尽くしました。「同じ失敗を二回もくり返すのは馬鹿だ」とも言われていますので、とにかく、頑張ろうと思いました。

結婚の約束をするまでは、痒いところに手が届くという形容がぴったりするほど優しく、多くの面で、特に知的な面で私の望んでいたものを満たしてくれました。

酒量は当時から多く、すでに十代の中頃から飲んでいたそうです。飲み方の異常に気付いたのは、結婚と同時でした。当時、アルコール中毒という病気すら、実際に存在することさえ知らず、

そのような人々は、失礼な言い方ですけれど、職もなく、ガード下やなにかで寝ている浮浪者を指しているのだろうという認識があった程度でした。ボトル一本は軽く空け、初めから午前さまで、外泊もあり、一週間に三、四日は、数人の友人を連れてきて、夜明け近くまで酒宴でした。

江戸っ子特有の気前の良さで、人様には大変好かれ、細かく気を遣う反面、家庭、妻子のことはまったく無視という生活が続きました。飲む、打つ、買う、の三拍子で、女性問題ですら、半ば公然で、時には、連れ帰った見知らぬ女性に朝食を出してあげ、送り出したこともありました。さい疑心の入り込む余地の無いほど、浮気は現実のもので、また絶えず酔っているので喧嘩を売る気も起らなくなり、泣いて文句を言うことさえ、自尊心が許さず、できることといったら、不愉快な、ブスッとした顔をするだけの、まったく自分の最も嫌いなタイプの妻になり、主人に対してもひどいものでした。

より幸せになれるはずの結婚でしたのに、毎日が地獄のようでした。生来、明るいというかさっぱりした性格でしたから、よそ目には、何の心配もない明るい家庭に見えたかもしれません。

主人は、家の中では一切、私に発言権を認めず、二言目には、「馬鹿な奴は黙っていろ！　一切話すな！　世界が見えていない、物の見えない奴は何も言うな、馬鹿は口をきくな、お前は女じゃない」と、人様の前で相槌を打つことさえ否定され、お客さまの前では、良くできた女房として、にこにこ笑っていなければなりませんでした。

男兄弟の中のただ一人の女の子ということで、みなから優しくされ、父は、女の子を待ち望んでいたので、「待ちに待った、待子」という名を付けてくれたほど、優しく育てられましたので、

大きな声を出すとしたら自分が出すぐらいで、男性からは怒鳴られた経験もなく、父親には、ぶたれたことはおろか、大きな声で叱られたこともありませんでした。ですから、声を荒げてべらんめえ調で罵る主人が本当に怖く、ショックで、本当にいやで、主人に物を言うのが怖く、十年たっても、慣れることができませんでした。三番目の子供を身ごもり、六ヵ月半の胎児の内に妊娠中毒症のため失ったのは、七年前のことです。この時も、夫婦の会話も、慰めもなく、心が本当に冷えてしまいました。実家も、姉妹も無い私は、やり場のない辛さ、悲しさを自分の心の中にしまい込み、絶望そのものの毎日でした。主人が酔って、間違って他人の家へ入り、警察のお世話になり、一週間も留置されたこともありました。当時小学校四年だった娘のクラスの男の子の家でしたので、娘に本当に辛い体験をさせました。映画の中の一駒でしかありえない面会の場面は、せつなく本人がとても可哀相で、何も文句を言わないで迎えました。そのとき、主人はすでに、アルコール依存症であったのです。またすぐ飲み始めました。

主人の病いとの戦い

その頃、私に分ってきたことは、主人は「病気」であり、私を妻としてではなく、母親に対するような思いで接しているのだということでした。病気であるならば、治療をしなくてはいけないと思いました。そのような日常の中で、初めに魅力を感じていた主人の知的な部分と優しさは、家庭の中ではまったく消え失せてしまい、私は尊敬することもできなくなってゆきました。家庭は完全に破壊されていました。体の弱い私は、子供たちの寝顔を見るたびに、「私が先に死ぬでしょうし、残されたこの子たちは、一体どうなるのでしょう」と、どれほど涙を流したことでしょう。

私が両親を失った時のショックを思い、娘が、息子が、あのような悲痛な思いをするくらいならば、産まなければよかったと、非常に苦しみました。

主にあって永遠のいのちをいただいている今は、この問題は完全に解決しました。

生ける真の神さまを知らない人生は、たとえ一時的な喜びがあったとしても、悲しみが多く、死へ向って旅をしている虚しいものだと思います。林芙美子が言っているように、「花のいのちは短くて、苦しきことのみ多かりき」ではないでしょうか。

虚しさだけの人生を真面目に追求してゆく人々は、死を選ぶより他に道はないのでしょう。息子が小さい時よく言っていた言葉、「僕がおじいさんになっても、おばあさんにならないで生きていてね」という問いに、今、自信を持って答えてあげることができます。「大丈夫よ。イエスさまを信じている人は、死んでも生きるのよ。いつまでもみんな一緒よ」と。何という考えられない幸せでしょう！　イエスさまを知らないでこのように答えきることのできる方がいらっしゃるでしょうか。

神さまは、この哀れな、盲になってしまっている私たちをご覧になり、愛の御手を伸ばし始めてくださいました。忘れもしない、一九七九年、九月三日の朝、目覚めた私は突然、「神さまが護っていてくださる。主人は今日から断酒させていただける。今までお願いばかりで感謝をしたことがなかった、そうだ、感謝をしましょう」と、心の中から思いが湧き起ったのです。不思議な

ことでした。ミッション・スクールで育ったので、聖書は読んでいましたし、祈ることは知っていましたが、信仰はまったくなかったのです。その日、確かに、聖霊が働いてくださったと信じます。

その年の四月に会社を辞めた主人は、初めは、テレビ・マンガの脚本などを書いたりしていましたが、なにしろ一日中自由の身となりましたから、朝、昼、晩、お酒を飲む時間がありました。最後の何ヵ月かは、何も食べずに飲み続け、これ以上飲むことはできない状態まできていました。ただの大酒飲みではなく、アルコール依存症という、れっきとした病気であることを主人が認めることができるために、会社を辞めたことは幸いでした。この病気は長年多量に飲酒をする者は、誰でもなる可能性のある恐ろしい病気で、治療は断酒以外にないそうです。しかし飲み続けていれば禁断症状が出ず、進行性のもので最後は廃人に至るということです。はっきりした病識を本人が持つために、会社を辞めたことも、何もかも、主がすべてをご存知で許してくださっていたのだと思います。この期間、私は毎晩泣きながら寝て、夜中に自分の大きな泣き声に驚いて目が覚めるような毎日でした。耳鳴りは、まるでバスのエンジンのように鳴り響いていました。はっきりした信仰もなにも無い者でしたが、その朝、私は神さまの護りを感謝し、ベッドの中で祈りました。その日を境に主人は二年近く断酒をさせていただいたのです。

まことに主は生きておられます。しかし、主人は自分の意志だけで止めていると思い、主が癒してくださっていることを知る由もありませんでした。

そのころのある日、同級生であった江藤姉妹に集会に誘われ、ベックさんと初めてお話をしま

した。

以前に二、三回出席したことはありましたけれど、その日、私は救われたのです。神さまが、私をあわれみ、霊の目を開けてくださったのです。イエス・キリストは、この私の罪のために死んでくださり、復活してくださったということがはっきり分り、すべての重荷を主がかわって負ってくださるということを知りました。まさに、イザヤ書九章のみことばのとおりでした。

やみの中を歩んでいた民は、大きな光を見た。死の陰の地に住んでいた者たちの上に、光が照った。

（イザヤ　9・2）

天のお父さまが、私を愛して、いのちさえ与えてくださったこと、十字架の死は、私個人のためであったという事実を、初めて、心で知ることができたのです。感極まって言葉も出ない思いでした。

神にとって不可能なことは一つもない

私は父に熱愛されていましたので、ましてや、神さまの御愛がいかばかりか、痛いほど理解できたのでした。神さまが人間を木の間からお増やしにならないで、親という者から産まれ出るようになさったのは、ご自分の愛の片鱗を私たちに理解させるためではなかったかと、私は思います。

霊の目が開かれたので、まことの光である聖書という鏡に映し出された本当の自分の姿を知ることができました。聖書を読んだことはありましたから、人はみな罪人である、ということは知

人が仕事でシンガポールに行った時、再飲酒をし入院することを、お許しになりました。
次のみことばに支えられました。

私の敵。私のことで喜ぶな。私は倒れても起き上り、やみの中にすわっていても、
主が私の光であるからだ。

（ミカ　7・8）

そして、ドイツからも、ベックさんの次女ウルスラちゃんを通し、みことばが与えられました。

それでモーセは民に言った。「恐れてはいけない。しっかり立って、きょう、あなたがたのために行なわれる主の救いを見なさい。あなたがたは、きょう見るエジプト人をもはや永久に見ることはできない。主があなたがたのために戦われる。あなたがたは黙っていなければならない」

（出エジプト　14・13、14）

秋には退院したものの、十二月ハワイで失敗し、二月の再入院となりました。この時、病院の先生から厳しい言葉で、私のやり方を叱られました。この病気の治療に命を賭け、身体を張っての専門治療に当っている素晴しい先生です。「あなたはクリスチャンかも知れないけれど、夫婦としての根本的な理解と結びつきが無くてよいのですか。思い切って文句を言うなり、意見を言って、ぶつかり合ってごらんなさい。黙っているのが良いことにはなりません。依存症という名の通り、奥さんのやり方では絶対本人が立ちなおらず、反省する機会もないです。それぞれのケースで違いますが、あなたがそうやって平安にしていたのでは、酒をやめる理由も見つからないでしょう。

お宅の場合は、離婚するべきです」というようなことでした。私が平安でいられる理由を先生は知りません。それは、生けるまことの神さまを知る者だけが持たせていただける平安で、神さまへの信頼の結果です。でも私は先生のいわれることも、もっともだと思いました。

救われてからというもの、主人に文句を言おうとしても、主の前の自分を考える時、たいした者でもないのに、なぜ主人だけを責められましょう、同じ罪人なのですから、と、偉そうな口をきけなくなるのです。主は彼をご覧になって、あわれみで胸があつくなるとおっしゃってくださるのです。そして彼が神さまのもとへ帰ってくるのを待っていてくださるのです。

わたしは彼の道を見たが、彼をいやそう。
わたしは彼を導き、彼と、その悲しむ者たちとに、
慰めを報いよう。

（イザヤ　57・18）

本当に愛に満ちた何という慰めの言葉でしょうか。主人は中学生の頃、教会へ行ったことがあり、その時から、ずーっと、主は、彼を呼び続けていてくださったのです。

そして、主はみこころを次のようにはっきり教えてくださいました。

イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、わたしの子をエジプトから呼び出した。
それなのに、彼らを呼べば呼ぶほど、彼らはいよいよ遠ざかり、
バアルたちにいけにえをささげ、刻んだ像に香をたいた。それでも、
わたしはエフライムに歩くことを教え、彼らを腕に抱いた。しかし、彼らは

わたしがいやしたのを知らなかった。わたしは、人間の綱、愛のきずなで彼らを引いた。
わたしは彼らにとっては、そのあごのくつこをはずす者のようになり、
優しくこれに食べさせてきた。
（ホセア　11・1～4）

わたしの民はわたしに対する背信からどうしても離れない。
人々が上にいます方に彼を招いても、
彼は、共にあがめようとはしない。
エフライムよ。わたしはどうしてあなたを引き渡すことができようか。
イスラエルよ。どうしてあなたを見捨てることができようか。
どうしてわたしはあなたをアデマのように引き渡すことができようか。
どうしてあなたをツェボイムのようにすることができようか。
わたしの心はわたしのうちで沸き返り、わたしはあわれみで胸が熱くなっている。
わたしは燃える怒りで罰しない。わたしは再びエフライムを滅ぼさない。
わたしは神であって、人ではなく、あなたがたのうちにいる聖なる者であるからだ。
わたしは怒りをもっては来ない。
（ホセア　11・7～9）

私の愛する主がそのようにおっしゃるのです。酔いつぶれている主人を目の前にする時、もはや人の思いではなく、主の愛が、聖霊を通して働いてくださいます。

私は祈りました。ヨハネの福音書十一章にはこうあります。
「主よ。ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です」
イエスはこれを聞いて、言われた。
「この病気は死で終わるだけのものではなく、神の栄光のためのものです。神の子がそれによって栄光を受けるためです」
（ヨハネ　11・3、4）

「主よ。ご覧ください。あなたが愛しておられる茂夫が病気です。助けてください」
「あなたの愛しておられる茂夫が病気です」と、一日中祈り、すがりついたのです。
台所にいる時も、どこにいる時も、畏れ多いことで恐縮ですが、本当にトイレの中でも祈り続けました。子供が話しかけても、返事をしないので文句を言われ、
「今、祈っていたのよ」
「だって手を合わせていないじゃない」
「手を合わせていなくても、いつも祈っているのよ」
と、いうやりとりもありました。
ベックさん夫妻も「マチコさんのやり方は、少し間違っていますよ。罪に手を貸してはいけません。神さまは愛のお方ですけれど、ただ白いおひげのおじいさんではなく、イザヤ書にもあるように厳しいお方でもあることを彼は知らなくてはいけない。本当の愛は正しく、長い目で見なくてはいけません。愚かな愛ではいけません」というような意味の言葉をくださいました。他の

問題はともかく、お酒に関しては、どうしても黙認するだけではいけないと悟り、本当に心を鬼にして別居に踏み切りました。この機会を逃したら、主人は永遠の滅びに入るかも知れません。生きるか死ぬかの瀬戸際だと思いました。昔、イスラエル人がエジプトから脱出する時、主が海を陸地とされたように、主人の入院も偶然ではなく、主が御自身の栄光と力を現すために備えてくださったのだと思いました。

そのとき、モーセが手を海の上に差し伸ばすと、主は一晩中強い東風で海を退かせ、海を陸地とされた。それで水は分かれた。そこでイスラエル人は海の真中のかわいた地を、進んでいった。水は彼らのために右と左で壁となった。（出エジプト　14・21、22）

別居に踏み切って

家は、私の親が残してくれたものでしたが、この日のために神さまが両親を通してお与えくださっていたのだと思いました。主人が救われるのならば、この世の財産は失われても感謝です。神さまは、世にあるものを愛してはいけない、とおっしゃいますし、自分の宝は天に積みなさいと、教えてくださいます。家を売却して、子供たちを育ててゆく決心をしました。主人が何年後に救われるか分らないのですから、大きな賭けでした。神さまの話は主人が怒りますので、私からみことばを伝えたことはありませんでしたが、この時初めて手紙で私の思いを伝えました。

「私と子供たちの求めているものは、心から尊敬し、愛することのできる夫であり、父親なのです。主イエスさまの支配下に、あなたが入ってくださった時、初めてそのことが可能にな

ります。一家そろって神さまを礼拝することができるように、子供と一緒に祈り続けます」

主人はまもなく、病院から集会に顔を出すようになりました。無神論者で通っていた主人は、キリストのキの字も馬鹿にしていましたのに。奇蹟の第一歩が始まりました。

大きな「賭」ではありましたが、私の側には主が付いていてくださるので、負けることのない「賭」だと分っていました。この時与えられたみことばは、次のものでした。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。
――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。（エレミヤ　29・11）

この時期、おじいちゃまの再入院と主人の入院と、引越しが重なり、肉体的には疲労の限界にきていましたが、主は次のような恵みに満ちた体験を与えてくださいました。

「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。（Ⅱコリント　12・9）

小さなアパートに親子三人で引越しました。クリスチャンの群れは、神さまを父とするひとつの家族なので、私たち信者はお互いを兄弟姉妹と呼んでいます。実はその引越しの時もたくさんの主にある兄弟姉妹が手伝ってくださり、神の家族の一員にしていただいている喜びを、心から

感謝いたしました。すべての必要を主が満たしてくださり、特にお名前を挙げることができないほど、多くの兄弟姉妹がさまざまな形で援助してくださいました。主にある兄弟がトラックを借りてくださったので、運送屋さんには一銭も支払わずに済みました。

大きな不要な荷物は、ある知人が無料で貸してくださった倉庫に収め、アパートにその他の荷物を運び、兄弟方の手を借りてすべてが一日の内に終りました。

食事は、なんと、デザートまで含めて姉妹方が用意してくださり、主を賛美しつつ、笑いながら、まるでパーティをしているようで、惨めさは少しもありませんでした。

ハレルヤ。主は生きておられます。

今後の生活についても、家の売却についても、主のみこころのままになりますように。

嬉しくて嬉しくて何の心配もいりません。二人の子供たちも、慣れない生活の中にも護られています。そして神さまのなしてくださった奇蹟、父親の救いを心から喜んでいます。

理解に苦しむ困難に出会った時、いつも私に与えられるみことばは、次のものです。

主よ。私の心は誇らず、私の目は高ぶりません。
及びもつかない大きなことや、奇しいことに、私は深入りしません。
まことに私は、自分のたましいを和らげ、静めました。
乳離れした子が母親の前にいるように、
私のたましいは乳離れした子のように御前におります。
イスラエルよ。今よりとこしえまで主を待て。

（詩篇　131・1～3）

「試練の時は、意味が分らなくても、まず、感謝ができますように祈ります。後で振り返ってみると、神さまが無意味なことを一つもなさらないことが分ります。」

結局、後で感謝することになるのですから、自分の感情に頼らず、みことばだけを土台にして、感謝した方が得であると教えられました。私は自分の子供たちが母親を信頼して、喜んでいてくれる時に、一番幸せを感じます。天のお父さまも、ご自分の子供たちがいつも喜んでいるのを望んでくださっているはずです。

いつも喜んでいなさい。
絶えず祈りなさい。
すべてのことについて、感謝しなさい。

（Ⅰテサロニケ　5・16～18）

神さまは、「愛する者を懲らしめる」とおっしゃいますし、この私を私生児として扱わず、子として扱ってくださるのですから光栄です。神さまは、耐えることのできない試練を与えず、必ず、脱出の道も備えてくださると、おっしゃってくださいます。

もちろん、悔い改めへの導きの時も多いですし、罪を示され、自分の肉（生まれつきの性質）がいかに主の前で汚らしく、なおらないものであるかを知らされるたびに、赦されていることの感謝が増しますし、自分自身にまったく信頼できないということを、つくづく思い知らされるのは、恵みだと思います。私は、もうこれ以上自分の本当の姿を知らされたくはないと思うほどひどい者ですが、知れば知るほど、十字架の血潮の価値を新たに覚えることができました。

神の御子イエス・キリストの十字架の血潮は、私のためであったのはもちろんですが、まず、父なる神にお見せするためであったことを、最近、新たに教えられました。

昔、エジプトでイスラエルの民が救われたのは、神さまが、家の中で食事をしている人びとを見られたからではなく、戸口と、かもいに塗られた子羊の血を主がご覧になったからです。現代の私たちのためには、イエスさまの血潮があります。私たちがたとえどんなに汚れていても、主なる神さまは、私たちをご覧になって、よし、とされるのではなく、イエスさまの血潮をご覧になる時一〇〇パーセント満足してくださることが分った時、もう嬉しくて、飛び上りたいほどでした。

神さまの細かい行き届いたご配慮で、主人の入院中に、おじいちゃまのお世話も少しだけですがさせていただけました。主が用意してくださらなかったら、私には何もできなかったのです。

「喜ぶ者と共に喜び、泣く者と共に泣きなさい」とおっしゃる神さまは、すべての行いをも、備えてくださいます。苦しい病気を通して、神さまのご臨在を証ししてくださり、とても嬉しく思います。

主人が救われてから、日曜日の聖餐式のぶどう酒がぶどうジュースに変りました。たった一人のためにも、細かい愛の配慮をしてくださり、感謝しています。

神さまは、妻の霊的指導者として、夫を尊敬し仕えるようにおっしゃいますが、みことばを馬鹿にしていた主人を尊敬できず、以前は次のように祈っていました。

「神さま、主人に従うことはできます。でも心から尊敬できないのをどうか赦してください。



あなたはしなさいとおっしゃるのですから、必ず心から尊敬できる主人にしてくださると信じます。『主を恐れることは知恵の初め、聖なる方を知ることは悟りである』と神さまはおっしゃいます。どうかそのようになしてください」と。

今は、主にあって心から主人を愛することができます。イエスさまは、悲しみを喜びに、憎しみを愛にさえ変えてくださる、「力ある神」であられます。

洗礼式の朝、ベックさんのお宅で、主人は子供たちと私を前にして、心から謝ることができ、共に赦し合い、共に祈ることができました。主のご臨在を感謝し、涙が溢れ出ました。

奇蹟がもたらされて

このようにしてわが家に奇蹟がもたらされたのです。私たち夫婦は共に、罪過の中に死んでいたような愚かしい者でしたが、あわれみ豊かな神さまによって、これからは、共に主を賛美し、礼拝し、主のご栄光のために生きることを許されました。そして次のようにいうことができますことを感謝いたします。

「私と私の家とは、主に仕える」

（ヨシュア　24・15）

子供たちにもやっと、本当の家庭が与えられました。幼い心が私以上に傷ついていましたし、父親を赦せない気持ちも強かったと思うのですが、まことの医者でもあられる主が、その心の痛手を癒してくださいました。娘は去年受洗しました。神さまに愛される清らかな女性として成長

して欲しいと思います。息子は、神さまのご用が足せる者として成長させてくださるよう、みこころならば、宣教師としてお用いくださいと祈っています。中学二年と小学二年の幼い者たちですが、主が導いてくださいますので、将来の不安はありません。主を知らない方々は私のことを、「単純でおめでたい人ね」とおっしゃいますけれど、実は、私にとってこれ以上のほめ言葉はないのです。

主にあって、おめでたい人だと言われるくらいの喜びはありません。そうです。主イエスさまのみもとに来る人は、どんな理屈屋でも、頑固な人でも、主がすべて「おめでたい人」に変えてくださるのです。それは、私たちの天のお父さまは、全知全能であられ、すべての創造主であられるからです。これだけ立派なお父さまを持っているので、子供は心配する必要がないのです。

人間は裏切ることもありますけれど、神さまは、ご自分のところへ来る者を決して見捨てないとおっしゃいます。どうか、まだ神さまを知らないで苦しんでいる方々、恨み、憎み、悲しんでいる方々、主イエスさまを信じて救われてください。主はそれらのすべてを益に変え、喜びに変えることのできる、ただ一人のお方です。

いま泣いている者は幸いです。
あなたがたは、いまに笑うようになりますから。
（ルカ　6・21）

燃える蛇やさそりのいるあの大きな恐ろしい荒野、
水のない、かわききった地を通らせ、堅い岩から、あなたのために水を流れ出させ、

あなたの先祖たちの知らなかったマナを、荒野であなたに食べさせられた。
それは、あなたを苦しめ、あなたを試み、
ついには、あなたをしあわせにするためであった。
（申命記　8・15、16）

神さまが無意味に私たちを苦しめられるお方でないことを本当に感謝します。二月十二日、主人が入院した日に、主は次のみことばをくださいました。何というご愛に満ちた慰めでしょう。

「慰めよ。慰めよ。わたしの民を」と、あなたがたの神は仰せられる。
「エルサレムに優しく語りかけよ。これに呼びかけよ。その労苦は終わり、その咎は償われた。そのすべての罪に引き替え、二倍のものを主の手から受けたと」
（イザヤ　40・1、2）

今、このみことばどおりこの身になしてくださった主に感謝します。
このつたない証しを通して、ただ主イエスさまのみが、ほめたたえられますように、そして、すべての恥は、この身にありますようにお祈りいたします。

力石元吉おじいちゃまのこと

一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかしもし死ねば、豊かな実を結びます。

（ヨハネ　12・24）

力石のおじいちゃまは、片腕切断手術の後、半年ばかりの間、主の証し人として神さまのご臨在と、ご栄光を現す器として用いられて後、昭和五七年九月十八日に平安のうちに天の故郷へ召されていかれました。七十五年の地上での生活から解放され、永遠の喜びの中へ召し入れられましたことを確信して感謝しています。死は、私たちにとって永遠の別れではなく、束の間の別離です。もし、そうでなかったら、私は今、おじいちゃまの思い出など、あまりにも悲しくて書くことができません。たくさんの楽しかったことを思い出し、淋しさはありますが、それを超えた再会の期待で心の中が満たされます。おじいちゃまが一粒の麦となって主のために実を結ぶことができますように、ご遺族の方々、お一人お一人の上に、神さまの祝福が豊かにありますように、心からお祈りいたします。またそれだけがおじいちゃまの最大の祈りであり願いでもありました。

私が救われてから、一番先に神さまのことをお伝えしたかったのは、おじいちゃまでした。今の主人の父親はすでに召されておりましたし、前の主人と別れたとはいえ、一度は親として与えられた、大切な方でした。年を取られて、お一人で住んでおられたので、気が気ではありませんでした。そして親として、ずーっと愛してこられたということも、思えば不思議なことで、これ

は神さまの恵みであり、何かご計画がおありなのだと確信いたしました。すべての人が救われて、真理を知り、永遠のいのちをいただくことは主のみこころです。おじいちゃまの救いだけを願って、私は小冊子や、証しの本を通して福音をお伝えし、祈り続けました。祈り始めて一年あまりたった時、主が、ビリー・グラハムの伝道大会におじいちゃまを導いてくださり、その時、はっきりと、決心なさったのです。ビリー・グラハムを通してのメッセージで、いろいろと思い当るところがあったとのことです。誰に強制されたのでもなく、ただ聖霊に導かれて、主の前に立ってくださった時は、感謝と、安堵で、涙が溢れました。次のみことばの通りでした。

わたしの羊はわたしの声を聞き分けます。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて来ます。

わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。

（ヨハネ　10・27、28）

それからというもの、日曜日ごとに集会に集うごとに、喜びが増し、集会にくるのが待ち遠しいくらい楽しいとおっしゃり、それまでの孤独から主が完全に解放してくださったようでした。眼がご不自由であるにもかかわらず、往復の車中でさえ信仰書をいつもお読みになり、聖書もよくお読みでした。神さまは、霊の糧をたっぷりお与えくださったのです。その年の十二月に眼の手術をお受けになった時は、本当に主にすべてを委ねて平安のうちに守られているご様子がありありとうかがえました。ある兄弟を通して、次のみことばがおじいちゃまに与えられました。

私の目は、みことばを慕って絶え入るばかりです。「いつあなたは私を慰めてくださるのですか」と言っています。

（詩篇　119・82）

そして翌年の昭和五十六年四月十九日、復活祭（イースター）の日に受洗されました。少し遅れて六月二十八日には娘麻衣子も受洗し、神さまの家族に加えられました。おじいちゃまは洗礼式の時にお読みした次のみことばを心から確信しておられました。

イエスは答えて言われた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、新しく生まれなければ、神の国を見ることはできません」ニコデモは言った。「人は老年になっていて、どのようにして生まれることができるのですか。もう一度母の胎にはいって生まれることができましょうか」イエスは答えられた。「まことに、まことに、あなたに告げます。人は、水と御霊（みたま）によって生まれなければ、神の国にはいることができません。肉によって生まれた者は肉です。御霊によって生まれた者は霊です」

（ヨハネ　3・3～6）

あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わることのない、神のことばによるのです。

「人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主のことばは、とこしえに変わることがない」

（Ⅰペテロ　1・23～25）

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか」

（ヨハネ　11・25、26）

おじいちゃまは、仏教などの信仰書にも詳しく、そういった本の著者に手紙をお出しになられたこともあるくらい深く真理を求めておられました。しかし、神さまのみことばである聖書に触れるまでは、心が満たされることが無かったそうです。神さまは人間に、永遠を思う心、神を求める心をお与えになっておられるので、人間は動物と違って誰でも信仰心を心の奥に持っているのでしょう。求める心が不純な動機でない限り、必ず正しく導びかれ、生ける真の神さまにお会いできるように準備してくださるのだと信じます。おじいちゃまは小学生の時、故郷の湯ヶ原で、クリスチャンであった担任の先生の路傍伝道のお手伝いをして、よくついて歩かれたとのことです。その時、最初の福音の種が幼い心の中にまかれ、何十年もたって、この地上の生涯の最後の二年間で実を結んだのでした。

そして、次のみことばだけを覚えておられ、聖書を手にした時、一番初めに探したそうです。

そのとき私は、御座から出る大きな声がこう言うのを聞いた。「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである」

（黙示録　21・3、4）

すべての事に偶然はなく、まことに、神のことばは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く（ヘブル4・12）、働き続けていてくださったのです。

その年の九月頃から肩に痛みを感じられ、悪性腫瘍ということで暮れには手術を受けられました。苦しみが祈りを教えるといいますが、毎日祈りとみことばによって力づけられ、はげまされて、よりよく主を知ることができる素晴しい体験を与えられたようでした。イエスさまの十字架上の苦しみを思えば何でもないとよく話しておられました。

しかし、一月に退院してから、三月入院までの数ヵ月は、夜も昼も床の上に横になることもできないほどの想像を絶する苦痛があり、主がともにいてくださるのでなければ、人は絶対に堪えることができないと思われるほど激しいものでした。診察のたびに付きそっていきましたが、幼な子のように神さまに信頼し、「祈っていたら、治療中の痛みがなかったよ。本当だよ」と瞳を輝やかせて放射線室から出てこられた姿を、私は忘れることができません。神さまがともにいてくださるので、誰もみな、私たちを本当の親子と思っていたようでした。神さまの本当に行き届いた細かい配慮で、主人は入院中でしたので、最後の数ヵ月をおじいちゃまと毎日一緒に過ごせた恵みを心から感謝しています。私のような者、不孝をおかけした悪い者をも、おじいちゃまは、誰よりも信頼してくださったのは主がともにいてくださったからです。再入院の時も、四、五人の姉妹方が付きそい、毎日毎日、主にある兄弟姉妹が、一日も欠かさずお見舞いしてくださり、聖

書を読み、祈り、慰め、はげましてくださいました。もし神さまを知らなかったら、孤独で不安な、苦しい毎日だったでしょう。

救われている者には死に対してさえも恐れはなく、むしろ喜ばしい天国への望みがあるのです。

神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。

（Ⅱコリント　1・4）

このみことばのように、苦しんでいるおじいちゃまの方が、お見舞に行った者たちへ、はげましと、慰めを与えてくださり、私たちは、お会いするたびに、ずい分と勇気を与えられたものでした。

ガンの中でも最もたちの悪い苦痛を伴う腫瘍は、一人で腕を支えられぬほど大きくなりましたが、たくさんのみことばで日々守られていました。特にお好きだったみことばは次のものです。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。たじろぐな。わたしがあなたの神だから。
わたしはあなたを強め、あなたを助け、わたしの義の右の手で、あなたを守る。

（イザヤ　41・10）

あなたの神、主であるわたしが、あなたの右の手を堅く握り、「恐れるな。わたしがあなたを助ける」と言っているのだから。

（イザヤ　41・13）

肩の上まで転移した腫瘍を除くため、鎖骨のあたりからの切断手術が決まった時、おじいちゃまから集会の兄弟姉妹への伝言は次のものでした。

愛する兄弟姉妹の皆さまへ。

たびたびのお見舞、日々のお祈り、ただただ感謝です。私は今朝、一つのことに思い当り、神に感謝を捧げました。私の左腕切断について神は、こう教えてくださいました。腕でよかったのだ、これが反対の胸の方であったら、腫瘍の摘出、また切開と、入退院をくり返さなければならない、と。

根絶のための切断こそ幸いであると、神のお選びくださった場所を心から感謝して、お祈りいたしました。皆さまもどうか、感謝の祈りを捧げてください。同時に、苦しみに耐える力を私にお与えくださるよう、私のためにどうかお祈りくだされば幸いです。　三月十三日

そして次のみことばが添えてありました。

天の下では、何事にも定まった時期があり、すべての営みには時がある。
生まれるのに時があり、死ぬのに時がある。
（伝道者　3・1、2）

神のなさることは、すべて時にかなって美しい。神はまた、人の心に永遠への思いを与えられた。しかし、人は、神が行なわれるみわざを、初めから終りまで見きわめることができない。
（伝道者　3・11）

手術後、感謝を込めて話されたのは次のみことばでした。

主は私を広い所に連れ出し、私を助け出された。主が私を喜びとされたから。
（詩篇　18・19）

苦しみのうちから、私は主を呼び求めた。主は、私に答えて、私を広い所に置かれた。
主は私の味方。私は恐れない。人は、私に何ができよう。
主は、私を助けてくださる私の味方。私は、私を憎む者をものともしない。
主に身を避けることは、人に信頼するよりもよい。
主に身を避けることは、君主たちに信頼するよりもよい。
（詩篇　118・5～9）

この入院の時を通して、おじいちゃまの実弟である辰一郎さんも、主のご臨在をはっきり確信し、吉祥寺集会へ集うようになり、救われました。そして私の主人と一緒に、洗礼を受けることができました。まことに主は生きておられます。御名を心から賛美します。

手術後、毎日が楽しくて楽しくて浮き浮きするとおっしゃり、いつお会いしても主を賛美し、いつも喜びで笑顔の絶えない入院生活でした。主が与える平安は、世の与える平安ではない、とみことばにありますけれど、本当にその通りです。小康状態を得て一度退院なさり、九月十八日に、天の御国へ勝利の凱旋をなさいました。召される四日前には、主にある兄弟となった主人と、涙で手を握り合い互いに感謝し、主のご栄光と、ご臨在をまのあたりに見せていただけました。

酸素吸入器をつけたままでしたが、本当にしっかりしたお声で、力強く握手をなさったのが、最後となりました。今、淋しさ、悲しみはありますけれど、やがて再びお会いできる希望があります。

主人の救いを一番祈っていてくださったおじいちゃまは、主人と手を握り合い、きっと、エルサレムにいたシメオンという老人の心境であったのではないかと思います。

また、主のキリストを見るまでは、決して死なないと、聖霊のお告げを受けていた。シメオンは幼子を腕に抱き、神をほめたたえて言った。

「主よ。今こそあなたは、あなたのしもべを、みことばどおり、安らかに去らせてくださいます。私の目があなたの御救いを見たからです」

（ルカ　2・26、28～30）

麻衣子も、長男浩一郎も主を信じ、主人もはっきりと救われたのを見て、おじいちゃまは本当に心から喜び安心してくださったことと思います。

召された知らせを辰一郎さんから早朝受け取った時、主人と私はすぐにその場で共に祈りました。そして、聖歌三四八番、「今さりゆくなれを」を賛美しました。

今去りゆく汝を、我ら主に委ぬ、安けくあれかし、また会う日望みて。
また会う日まで、また会う日まで、み神常に汝が身とともにあれ。
主の愛のみ旗は汝にひるがえり、死の波を打ちて安らに渡らしめん。
また会う日まで、また会う日まで、み神常に汝が身とともにあれ。

それからある姉妹の召天式のメッセージをテープで聞きました。神さまが生きて働いてくださらなければ、このようなことは不可能ですし、この世ではありえないことだと思います。主の御名を心から賛美します。

お兄さまをなくされた辰一郎さんも、天国での再会を確信しておられ、神さまの家族の一員として集会にこられています。おじいちゃまは、「集会のおじいちゃま」として、大人にも、子供にも皆に愛されていましたから、私たちは、再び、必ずお逢いできることを信じて、楽しみにしています。

聞きなさい。私はあなたがたに奥義を告げましょう。私たちはみなが眠ってしまうのではなく、みな変えられるのです。終りのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。朽ちるものが朽ちないものを着、死ぬものが不死を着るとき、「死は勝利にのまれた」としるされている、みことばが実現します。

（Ⅰコリント　15・51、52、54）

そして、神は主イエス・キリストを救い主として受け入れ、救われている者、主にあって眠った者に対して次のみことばを与えてくださっています。

眠った人々のことについては、兄弟たち、あなたがたに知らないでいてもらいたくありません。あなたがたが他の望みのない人々のように悲しみに沈むことのないためです。私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、

イエスにあって眠った人々をイエスといっしょに連れて来られるはずです。
（Ⅰテサロニケ　4・13、14）

おじいちゃまの最大の願いと祈りの一つは、残されたお子さま方が、親戚の方々が、一人も滅びることなく天で再会できるように、ということです。一粒の麦が地に落ちて死ねば豊かな実を結びます。と神さまは約束しておられます。一日も早くそのことが成就しますように、お祈りします。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。（ヨハネ　3・16）

▼力石おじいちゃま。集会所の屋上で。



主イエスを信じなさい。
そうすれば、
あなたもあなたの家族も
救われます。
（使徒　16・31）

光の中に移されて

池田　傳一

一九二八年東京浅草に生る。群馬師範付小、東京都立18中（現西高）を経て海軍兵学校77期生で終戦。日大芸術科を中退し、東宝撮影所撮影課に入社。五年後退社し、岩波映画、日本天然色映画等を経て、現在フリーのカメラマン、演出家。家族は妻康さん、長男潤太君、次男洋介君。



▲高知県　物部川にて　81年6月受洗。

▼シドニーのホテルでのタレントオーディション。左から池田さん、大林宣彦さん（映画監督）。



▼福島県ウェスタン村にてハガーウェア（米国）のTVCFのロケ。



▼家族4人で。



昭和十二年、紀元節

校門を入ってゆくと、玄関の方から校長先生の姿。「先生おはようございます」「おはよう」と、白い手袋をはめた手を振ってくださいました。校門のすぐ横に奉安殿（天皇陛下の写真を納めておく小さい神社）があります。その前に立ち止られた先生は、奉安殿に深々とお辞儀をしました。私もつられてお辞儀をしました。奉安殿の中はどうなっているのだろう……白い息を吐きながら立ち止って見ていると、小さい白木の扉を開けた中に、三方の上に紫色の風呂敷で包んだ天皇陛下のお写真が乗っかっていました。校長先生はそれに向ってうやうやしくお辞儀をしました。その日は紀元節だったのです。

昭和十六年、開戦の日

葉が落ちて、細い笞（むち）のような枝がつらなっている桑畑の中を通って、中学校から下宿に帰りました。「池田さん、日本もとうとう大変なことをやりましたね」と下宿の小父さん。今日は十二月八日、学校で、真珠湾攻撃の話しを聞いた時、やったぞと思いましたが、あまり遠い所の話なので、実感が湧きませんでした。この地方都市の県立中学の附近で下宿屋を営んでいる小父さんと小母さんは、小柄なやさしい人で、アメリカに移民して少し成功して故郷に帰り、白いペンキ塗りのしゃれた平屋建ての家を山脈（やまなみ）の見える桑畑のなかに建てて、一人息子を明治大学に通わせ、自分は小さな畑を耕している人でした。その頃（ころ）では見たこともない西洋式のお風呂に入れるのが楽しみでしたし、小父さんのベッドの枕の下には、いつもピストルが置かれてあるという噂もあ



診療を通して主に仕える

近森大志郎

聖路加国際病院内科レジデント
高知県出身／野市町立東小／土佐中／土佐高／山口大学医学部卒／25才

駆け出しの医師である私にとって、現在の医療の混迷は想像を絶するばかりです。特に医療技術の進歩のために、わずかながらも人間が人間の命を制御することが可能となったことは、混迷の度合いに拍車をかけています。

いま、医学会では、「脳死」の判定基準を確立しようとする動きが盛んですが、これほどに進歩したといわれる医学をもってしても、人間の死を正確に知り得ることは不可能なのです。ましてや、いかなる基準をもって、人間の生命的予後を判定できるでしょうか……。

けれども、このように無知なる現代人おのおのの判断によって、臨終まぎわの病める人びとのたどる道が決定されているのです。ある者は不当な苦しみを受け植物人間となって徒命だけを永らえ、他の者は苦しみを除くという名目で残りの人生を短かくされてしまう……。このような混迷は罪ある人間が過大な知識を得て、その利用法も十分わきまえずに思いのままに行動していることに起因していると考えられます。神から離れてしまった人間のたどる道の、何と悲惨なことでしょうか。

以上を考えるとき、主イエスに祈り、イエスのみ旨の具現のために働くことが至上と想い診療に励む毎日です。



強くあれ雄々しくあれ

中島　章

日通商事㈱専務取締役
群馬県出身／芝尋常高等小／伊勢崎高専／中央大学経済学部卒／63才／妻　和子／子供　長男夫婦

「わたしはあなたに命じたではないか。強くあれ。雄雄しくあれ。恐れてはならない。おののいてはならない。あなたの神、主が、あなたの行く所どこにでも、あなたとともにあるからである」(ヨシュア1・9)

いまだ肉体のこの世にある限り、日常諸悪との戦いを避けることはできませんが、み言葉に示されたように、主は常に私たちとともにいて、護り、導き、励ましを与えてくださいます。私たちは、イエス・キリストを信ずる堅い信仰に立って、「神のすべての武具を身につけ」(エペソ6・11) これらの諸悪に立ち向い、すでにすべてに勝利しておられる主イエス様の栄光を現わしていただくことを信でき、またゆるぎない平安が与えられますことは、心から喜びであり感謝であります。

「わたしは、わたしの名のために、怒りを遅らせ、わたしの栄誉のために、これを押えてあなたを断ち滅さなかった。見よ、わたしはあなたを練った。わたしは悩みの炉であなたを試みた。わたしは、わたしのためにこれを行う。どうしてわたしの名が汚されてよかろうか。わたしは、わたしの栄光を、他の者には与えない」(イザヤ48・9～11)



思い切って受けとった

竹本　隆

歯科医　桜ヶ丘歯科診療所
高知県出身／香宗小／土佐中／土佐高／日本歯科大卒／東京医科歯科大で研究／45年開業／妻裕子／子供　二女

私たちの生涯で、自分にはどうにもできないことに直面して困ってしまうことが必ず起ります。その時どのようにして事を解決するでしょうか。たいていは自分を中心にした、自分に都合のよい結果を期待しながら、その方向に物事を運んでゆくことが多いと思います。私たちは自分が一番大事だと心の奥では思っていますから、そうなってゆくのは当り前です。しかしそれでよいのでしょうか。それ以外道はない、と自分勝手に思いこんでいるだけではないでしょうか。私は、このような自分を中心とした物ごとの処理方法は、決して完全な解決方法ではない、と思います。聖書には人類の創造から現在、及び永遠の未来まで、すべてのことが克明に書かれていて昔から今までのことは100％の確率をもって実行されてきました。今後の予言も、すべて確実に現実となることでしょう。この神の言葉を書き記した聖書を指針として生きなければ、私たちは生涯を棒に振り、苦しみの中に閉じこめられてしまうのです。しかし聖書の示す神に聞き従ってゆく時、私たちは自分では望み得ないような、大きな贈り物をいただけるのです。この喜ばしい知らせを一歩踏み出して思い切って受取ろうではありませんか。



自分の家を主のために

竹本　真夫

歯科医　竹本歯科医院
高知県出身／野市小／町市中／高知高／日本歯科大卒／土佐山田町で開業／40才／妻　礼子／子供　一男二女
住所　高知県土佐山田町東本町２－２－45　電 08875—2—1794

私は、父がクリスチャンだったので、若い時からずっと教会には通っていました。それは一種の習慣みたいなもので、その中にはとりたてて心を満たしてくれるものはありませんでした。学校を出た私は、郷里である高知に帰って、開業歯科医となりましたが、この満たされぬ思いを、魚釣りに熱中することによって満たそうとしていました。東京の姉、つづいて兄が、まことの信仰を吉祥寺集会で得、生き生きした福音が、東京—高知の距離を越えてどんどん入ってきました。そしてやがて、吉祥寺キリスト集会から、ベックさんはじめ多くの兄弟姉妹がたが度々高知に福音を伝えにやってこられました。最初はただ驚いているだけでしたが、やがてイエス・キリストの十字架上の死と復活の意味を知ることができ、みなさんのすすめもあって我家を開放し集会を持つようになりました。主イエスは、私たちの思ってもみなかったみわざを成しとげられるのです。現在この土佐山田集会には、多くの方が集って、福音を語り、唯一の神をたたえ、祈っております。高知の方、ぜひお立寄りください。



思いわずらいから解放されて

石井コギク

東京都出身／深川小学校卒／86才／子供　二男二女／孫　11人／ひこ孫　5人

寒い寒い冬の日も無事にすごさせていただき、今日このごろは心より春の日和を迎えられますことを、心から感謝いたします。庭には梅の花も木々いっぱいに咲きそろい、椿の花も一輪二輪とほころびはじめ、私の心を楽しませてくださいます神様のお恵みと存じ、胸いっぱいに喜びを感じさせていただいているこのごろでございます。これも貴いイエス様のお導きのたまものと存じます。私は、自我のままに日々をすごし、また、思いわずらいの強い愚か者でございましたが、イエス・キリスト様のみもとに導かれていろいろお情深いイエス様のお話をうかがううちに、心のわずらいがだんだんと溶けてまいりましたことも、まことに感謝でございます。

私は、八十を過ぎ、何一つ持たぬ愚かな老人でございますが、現在はただただイエス様のみにおすがりして、日々をすごし、ありがたいこととお祈りをしている毎日でございます。



キリストとの生きた交わり

ジョン・コルドウェル
John　Caldwell

弘前大学医療技術短期大学講師
青森市に生る／ニュージーランド通信教育学校高等部卒／上智大学外国語学部卒／21才

私は、日本に住んでいるニュージーランド人のクリスチャン家庭に生れ育ちました。幼い時から、聖書の教えを毎日のように聞かされましたが、そのことによって私が自動的にクリスチャンになった訳ではありません。両親から教えられた通りに信仰を持つことはいやでしたしクリスチャンになるためには自分の罪深さを悔い改めなければならないので、できるだけクリスチャンになることを避けようと思っていました。それにもかかわらず、今の私にとって、イエス・キリストの存在は、他のすべての物をほとんど無に等しくするほどに大きなものになりました。神が私をご自分の栄光のために造り、生かしてくださるという事実がなければ、私は刺戟に反応する物質の固りにすぎず、私には何の価値もなく、人生には何の意味もないと分かりました。また、イエス・キリストの十字架によって罪が赦されたという個人的な体験をし毎日キリストとの生きた交わりをもつことができました。吉祥寺キリスト集会の中で、皆がこのことを経験しているという喜びがあり、共に、親しい、世にない交わりが与えられていると分かりました。今、私には、社会人としてキリストのために生きてゆく決心があります。



いのちをかけても

飯守恪太郎

飯守アート㈱代表取締役社長
東京生れ／満州順天小、白山小、目白小／暁星中、高田中／豊島高／武蔵野美大卒／電通、レマンを経て会社を自営／CI、アートディレクター／47才／妻　節子／一男二女

聖書が朗読される集会に、妻のすすめで出席した。それがキリストの言葉そのものとして私の心に聞えてきた。私の汚れ、神へのそむきが明らかにされ、主はご自身の聖さと、私に対しての主権と裁きの権限を主張された。しかし赦しのために、ご自身が身代りとなられたことを私個人にはっきりと、聖書中の明記をもって悔改めをせまられた。我ままな性格の私は、当時妻と3人の子供の精神的な柱として失格しており仕事と酒、遊びにただれた生活を送っていた。このまま死んだら、罪の報いがどうなるのかと自問自答していた。そこに、聖書の言葉がどんどん入ってきた。私は神の前に頭を下げて、「あなたに対して罪を犯しました。ほんとうに済みませんでした。御子イエスの血潮の代価とよみがえりを、みことば通り受け入れます」と口で言い表した。その時私は救われたことを知った。私にとってキリストとは、「妻を愛する夫」に変えてくださった方。親子の交りを回復し楽しませてくださる方。仕事の苦しみと悩みを共に背負ってくださる導き手。私と私の家族のいのちの恩人。私は、いのちをかけても、従ってゆきたい御方です。



すべてを神の御手に

古田　稔

インテル・ジャパン㈱営業部長
東京出身／大間窪小／荏原3中／八潮高／日本大学理工学部卒／43才／妻　康子／子供　二男

「すべて疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」(マタイ11・28)

社会に出て以来、頂点をめざし、自分の欲望を満たそうと家庭を顧みずに全精力を傾けていた私に、神は大きな転機を与えられた。それは永年積み重ねてきた罪の上に成り立っているすべての偶像を私から取り除くという形で与えられた。今まで追い求めていたすべてのものが虚しいものだと神から明示された時、人は何を頼りにその後の人生を送ればよいのか。罪に汚れ、疲れた私を愛をもって呼びとめてくださった神のみことばが、冒頭の聖句であった。イエス様のお招きに逆らってはみたものの、しょせん勝目はない。この罪をイエス様が十字架の上であがなってくださったことを示されて、私のすべてを神の御手に委ねた時、神は私にすべてのものからの全き自由と、心の平安、そして永遠の生命を与えてくださった。

この世にあって、イエス様のように「人に仕える者」でありたいと願うようになった自分の変化を驚きと喜びをもって見出す時、神に心からの感謝と愛を捧げずにはいられない。



聖書こそ真実

松見　敬三

日本IBMシステムサービスセンター
岩手県出身／桜城小／下橋中／盛岡一高／上智大外国語学部卒／安宅産業からIBMへ／34才／妻　とみえ／子供　二男二女

私達が若い時には若い時の問題があり、老いた時には老いた時の問題があります。私は21才の時に聖書を読む機会が与えられてから間もなく、イエス・キリストを人生に受け入れ、今34才です。この年月の間には就職、結婚、妻の出産などがあり、さらに会社の吸収合併・転職という憂き目にも会いました。私が安宅産業に就職した時は一生勤めるつもりでした。しかしその6年後に会社は消滅しました。転職後の困難な出来事もありましたが、「民よ。どんなときにも神に信頼せよ」という詩篇642篇のみことばに支えられて生きてきました。私は、これらすべてのことがらを通して、聖書の言葉がいかに本物であるかという確信を与えられました。特に結婚の問題、職場の問題という個人にとって重大な問題を前にした時、イエスがすべてを支配しておられるということほど、平安を与えられることはありません。これからは子どもの成長もあり、また別の問題が起こってきます。しかしすべてのことで、聖書には何と書かれているのかという態度で歩み続けたいと思います。そしてイエス様の顔と顔を合わせてお会いする日を楽しみにしています。

虚無からの脱出

蘇畑　卓郎

富士短期大学助教授
奄美大島出身／今里小／古見中／大島高／早稲田大学政経学部卒／38才／妻　美和子／子供　一男二女

クリスチャンになる前の私の生活の特徴は、第一に無目的な人生を送っていたこと、従って自分のなしていることの意味を知らないで、自己追求の道を歩いていたことです。第二に、道徳的に無感覚であったので罪を罪とも思わずに過していたことです。いわば泥の中に転げまわっていて、それを全然汚いものとも思いませんでした。救いを求めるようになった動機は、無目的、無意味な人生を歩むことに耐えきれなくなったからです。真の神を知ることなくしては、人生の虚無、混沌から逃れ出ることができないことを示されたからです。そしてこの虚無の状態、望みなき状態から逃れ出るには、永遠から永遠にいます神ご自身のところへ帰らなければならないこと、天の父のみもとに帰るには、自分の罪の人生を悔改めて主イエス・キリストを救い主として受け入れなければならないことを示されたのです。主イエスの十字架の死は、私自身の罪が神の御前にいかに恐るべきものであるかを私に示しています。

主の御救いを知って、今、私は虚無から逃れ出すことができ、平安を与えられ、主との交わりの中に生かされていることを深く感謝しています。



この命は主のもの

諸岡　梅子

東京都出身／瑞光小／瑞光高小／旧跡見女学校卒／81才／子供　一男一女／孫　三人

数年前に嫁の泰子さんに誘われて、吉祥寺キリスト集会に導かれました。目も耳も不自由になった81才の私に主イエス様は「求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます」(マタイ7・7) とのみことばをもって語りかけてくださいました。長い人生の間、私には重荷がいっぱいありました。一生けんめいに生きてきたつもりでしたが思うようにならないことばかりでした。「人は自分の愚かさによってその生活を滅ぼす」(箴言19) とあるのは、私のことのようでした。主はすべてをご存知だったのです。多くの試練を通して、恵みをもって救いの道へと導き続けてくださったのです。去年腰の骨を折って入院いたしましたが、その間すべてを主におまかせして祈り続けました。主に守られて、手術もせずに奇跡的に良くなり、予定よりずっと早く退院もできました。今では完治して再び集会へ行けますことはただただ感謝でございます。この命は主のもの、いつ主のお召しがありましょうとも、主のみ手の中にあって永遠の命あることを信じて、生かされている日々が、何より何より感謝です。



すべての問題の解決は主に

岩上　勲

東急エージェンシー営業副部長
東京都出身／荒川区第6瑞光小／目黒10中／桜町高／中央大学商学部卒／48才／妻　桂子／子供　二女

街には多くの神社、仏閣があり、家庭では神棚や仏壇、学校では「天照大神が唯一の神で不滅である」と、感受性の強い少年期を教育された私にとって、敗戦の事実と戦後の荒廃期の体験は、神仏に対する不信感となり、それ以来この世の欲と快楽にのみ目を向け、未来のことや人生の意味も救いも、そして死をも考えず、ただその時をせつな的に生き続けていた毎日でした。ところが家内がフトしたことで主イエスに出会い、続いて二人の子供が相次いで主の導きによって受洗し、私だけが家庭内で孤立し絶えず反抗と激怒の日々を過してまいりました。そしてある時に、自分が虚無感や孤独感に支配されていることに気づき、集会に通う人々の姿を見て、その理由を知りたくなり、福音テープを聞き、聖書を読むようになりました。その結果徐々に人間の大きな罪の問題を悟り、主イエス様が私に代って十字架にかかられ、そして復活された事実を信ずることによって永遠の救いが与えられ、すべての問題の解決や希望は主にかかっていることを悟り、57年に受洗することができました。主は限りない愛をもって私達を変えてくださいます。今は家族ともども、感謝の日々を送らせていただいております。



あなたこそ私の神です

重田　定義

東海大学医学部教授（衛生学）
東京都出身／番町小／都立4中／慶応大学医学部卒／56才／妻　都代子／子供　一女

初めて主を覚えたのは、50年ほど前、日曜学校の頃であった。その後学生時代に洗礼（滴礼）をうけたものの知識のみの信仰であったためにしばらくすると教会を離れ、それから30年近く主を忘れ、肉に従う生活が続いた。その後主は妻の病を通して、また私の勤務している大学の「聖書を読む会」を通して私を打ち、それによって私の罪を悔い改め、心砕かれて教会にもどることができた。しかしここでも私の信仰は、自我を第一とした誤ったものであったために、主は再び妻の病に加えて、娘の精神的苦悩という鞭で私を打たれた。愛する者の苦しみは自分自身の苦しみよりも苦しく、打ち傷は痛んだ。この時、主は恵みによって妻と娘を吉祥寺キリスト集会に導き、救ってくださった。私も続いて吉祥寺集会に導かれ、ここで初めて真のエクレシヤを、生きて働かれる主を見た。私は砕かれ目と耳が開かれて、十字架と復活の主が今まで忍耐をもって私を待っていてくださったことを心から感謝した。私は今、確信を持って言うことができる。「主よ、私はあなたに信頼しています。私は告白します。あなたこそ私の神です」(詩篇31・14)



人生を変える

江藤　善清

㈱アイ・ピー・エル代表取締役
福岡県出身／植木小／植木中／鞍手高／東京大学教養学科卒／東芝／フルブライトで米国留学／退社後スペイン政府招聘留学後会社設立／46才／妻　恵子／子供　二男一女

あなたは今、一日一日を悔いなくお過しでしょうか？私たちの人生は、確かに、たった一回限りの人生です。それは繰り返しのきかない、映画のフイルムのように巻き戻しのできない人生です。同時に、それは確実に、一日一日、死に向って進んでゆく人生です。いつまで続くか、自分でも分からない人生でもあります。

このことを私たちが真剣に考えるならば、「その日その日を悔いのないように過さなければ……」という思いが深くなるのではないでしょうか。

人生の終りにあって、「自分の人生は過す価値のある、悔いのない人生であった」と言える人が、最も幸せな人ではないでしょうか。自分の小さな経験から、クリスチャンになって初めて「いつ死んでも、自分は生れてきてよかった、悔いのない人生であった」と言えるようになりました。もしあなたがご自分の人生を大切にお考えになって、充実し満足した日々を送りたいと願われるのでしたら、それを可能にする方法はたった一つです。

イエス・キリストを信じてください。そうすれば、あなたの人生は今想像もされていないほど満たされたものになりますでしょう。



月曜病から解放されて

辻田　浩康

三菱信託銀行横浜駅西口支店
特別財務相談課長
長崎県出身／長与小／長与中／長崎西高／長崎大学経済学部卒／43才／妻　美智子／子供　二男

日本のサラリーマンの通例かもしれないが、私自身も聖書を知る以前は、会社の仕事にのみ生きがいを求め、仕事や会社の上司同僚との付き合いを生活の中心とした毎日で、日曜になると一週間の疲れのために一日中ゴロゴロしていた。昼間に充分休養をとった後の日曜の夜は、寝床に入っても寝つきが悪く、つぎつぎ仕事のことや上司同僚との付き合いのことなどが思い浮んで思い煩い、明けがた近くになってウトウトしたくらいで出社。妻は月曜病だと名付けてくれた。このような中で次の聖書のことばに出会ったことは幸せだった。「何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます」（ピリピ4・6、7）「あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります」（マタイ6・34）

現在は、日曜日は、家族中で礼拝に出かけ、魂の糧を神よりいただき、思い煩いは一切神にゆだねて、月曜病から解放されている。



神とともに生きる力

宮田矢八郎

中小企業金融公庫高松支店
長崎県出身／伊良林小／片淵中／長崎南高／早稲田大学政経学部卒／34才／妻　陽子／子供　二男一女
住所　高松市宮脇町1―11―20　電 0878―61―7017

主の救いにあずかって、早や12年がたちました。30才も半ば近くになって、自分というもの、世の中というものがわかり始めるにつれ、信仰によって歩むということの安らぎと闘いの厳しさを味わっております。心中のうめき、痛みは誰もが経験することでしょうがこれを神の前に言い表わして安きを得るという体験は、祈りを知っている者にして初めて味わい得ることではないでしょうか。また、祈りに答えて、神が人の心を変え、事態を変えてくださるのを知ることは、祈る者の喜びです。主がご自身の勝利にあずからせようとして、私を召してくださったのは、大学3年の秋でした。若い時の求道には限界があります。自分を知らない、人間を知らないということは、致命的な限界です。にもかかわらず、主が十字架上のご自身を現わしてくださった時、下宿のたたみに頭をすりつけて「神様、すみませんでした」と涙ながらに祈りました。以来12年の月日がたちましたが、神と共に生きるということの力を教えられ、喜んでおります。主を心から賛美いたします。

りました。バラの蔓をからませた白ペンキ塗りのアーチの横で、「池田さん、日本は負けますよ」と小父さんは小声で言いました。私はこの人はひょっとするとアメリカのスパイではないかと思いました。同じ下宿にいる英語が外国人みたいに上手な立教大学出身の笠原先生も、アメリカのスパイかも知れないと思えてきました。ご自分の英語の辞典に保険をかけている先生でした。

米軍の本土空襲によって除々に戦力を失ってゆき、勝てる希望のない戦況の中で神風の吹くこと（奇跡的な何かが起ること）を信じ、学校のすすめるままに自分も希望して海軍兵学校七十七期生として、昭和二十年三月に入校しました。近い将来には確実に死があり、その死が自分の死と完全に結びついているということを深く考えようとはしませんでした。当時のスローガン「一億総決起」に表現されているように、戦前、戦中を支配していた空気は、お国のために、天皇陛下のために、という大義名分を作り、すべてを統制し抑制力の強い集団をつくり、人間を個人としては認めない状況を作り出しました。

昭和二十年　八月、敗戦

突然、あたりが、教室の中すべてが蒼い深いブルー一色になったのです。そしてしばらくすると、遠くで地響きのような爆発音がしました。海軍兵学校大原分校で、午前中の座学（教室での授業）をやっている最中のことでした。一瞬、静寂のあと外を見ると、広島方向で積乱雲が発達するように、青空の中に灰色の雲が天空に駆け上って行くのです。その夜、ウラニウム爆弾（原爆）が落された、と知らされました。

そして敗戦。その敗戦を終戦という言葉にすり替え、占領軍を進駐軍と呼び、天皇制帝国主義国家は解体され、象徴天皇と民主主義国家の看板に直し、途中から民主主義は消え自由主義と替え、一億総懺悔を合言葉にして、悪夢はすべて解消したかのように個々の想いを取り込んで、代って人間の自由、尊厳、基本的人権の尊重の言葉が新しい響で迎えられました。年配の人に、あなたはなぜ戦争に行ったのですか?と聞くと、ほとんどの人が「仕方がなかったから……」と答えるでしょう。多くの人は自分の人生でありながら、自らの生存理由をはっきりと持たないままに、自らの責任で生きるのではなく他者まかせで生活に終始して生きてきたようです。

戦後、民主主義を体験したのは、東宝撮影所に撮影助手として入社し、組合運動をするようになってからでした。その頃はテレビはまだ影も形もなく、映画が全盛期のときで、解禁されたアメリカ映画、表現の自由を得た日本映画を見ようと、映画館は娯楽に餓えた観客で満員でした。プールのある広い家、自家用車、白い電気冷蔵庫、美しい衣裳など、そこには夢の世界があり、醜い現実の世界からの逃避、新しい知識、欲望への満足がありました。また喜び、悲しみ、希望、絶望などの人間模様を通して、生きるとはどういうことなのかを教えてくれた映画も数多くありました。世界中が第二次世界大戦から解放され、破壊と廃墟の中で、平和と生きる望みを与えられ、世界中の人びとが明日を信じた頃でした。

一人前の助手になってきますと、煙草を吸い、お酒を飲みだし、戦後解禁された資本論、唯物論、マルクスレーニン関係の本を読み漁り、自由は自分で獲得し、自分で守らなければならぬと心に決して、労働争議をきっかけに組合運動に入って行きました。そこには上下の隔てがなく、

気持の良いインテリが多く集っていました。楽しい仲間が大勢ふえてきました。映画がクランクインしてスタッフに加えられ、ロケにセットに日々追われて忙しい思いをしている時は、健康に恵まれ体力に自信があり、仕事も油に乗ってきた自分がそこにいることが誇らしく思えました。再び労働争議になり、たいした理由もなく首切られる人々を見て義憤を感じ、組合運動にのめり込んで行くのですが、その組織が軍隊によく似ていて、自由な雰囲気はあるのですが、閉されたなかでの自由かも知れないと考えたりしている内に、仲間と共に首になってしまいました。

無神論は精神の力のしるしである。しかしある程度までだけである。

パスカル

昭和二十八年、検挙

米軍の幌付きトラックの幌の隙間からチラリと夜の新宿の伊勢丹の角が見えました。府中の刑務所に行くのか、あるいは立川基地から沖縄へやられるか。闇の中トラックを降りるとMPの持つカービン銃の間を通って門の中へ入れられました。いくつも鉄の扉を通り、裸にされ、米軍支給の衣服を着て写真を撮られ、三畳余りの独房に入れられました。まるで映画そのものです。そして、襲ってくる激しい空腹。その日の昼、撮影機材を受取りに丸ビルの中にある機材屋さんのドアを開けたとたんに、拳銃をつきつけられ、そのまま逮捕投獄されてしまったのです。これからどうなるのだろう、なんの容疑か分らないままに、二十名位の人達と一緒に警戒厳重を極めた所につれてこられたのです。このまま沖縄につれて行かれ、韓国の戦線に送られ、消されても、誰れにも知られないで終るでしょう。そこはアメリカ映画で見るような獄舎で向い側の扉は閉っ

ていましたが、間の廊下が吹き抜けていて下の階がよく見える。斜め前下の房から金網の向うから男が手を振っている。よく見ると片仮名でどこから来たかといっているのです。どうして捕ったかと書いている。彼によると、ここにいるのは北朝鮮のスパイ容疑者が多く、自分は済州島で捕った韓国人だというのです。これからどうなるかを聞くと、調書にサインをするな、そうすれば時間はかかっても命は助かる。と教えてくれました。それなら自分は大丈夫だ。何もしないのだからいづれは出されると思うと、急にほっとしました。そして十一ヵ月後にこの巣鴨の刑務所から突然に釈放されたのです。生命に危険がないとき、つまり死が具体的に迫ってこない時は、人間はなんと日常的になってしまうことでしょう。

気を紛らすこと。人間は、死と不幸と無知とを癒すことができなかったので、幸福になるために、それらのことについて考えないことにした。

パスカル

昭和三十一年、結婚

その頃、今迄自分の中でこだわっていたもの、自分を縛っていたものが何かあり、予定調和的に敷いてしまったレールが見えてくる気がしました。自分の思考の中が疑問だらけになり、今まで生きてきた世界が矮小に見えてきました。もっと広い世界が、もっと自由な世界がある。その自由とは、しかし、自分の主観に従った自由の枠から一歩も出ていなかったのです。そして映画作りの中に没頭しました。

この頃に妻と出逢い、(普通偶然に出逢ったといわれますが、この頃未信仰の私ですら偶然とはいえない偶然が重って、誰かが糸で操っているとしか思えない偶然が重って)二年ほど付き合った後に結婚することになりました。妻は杉並区のS教会の一室を借りて住んでいたので、クリスチャンであるらしいことは知っていましたが、別に気にもならず気にもしませんでした。結婚式はそのS教会でささやかにあげましたが、別に私の信仰を問われることもなく、私は無神論のまま牧師さんの指示通りに式を挙げました。今流行の教会式結婚とは違って、素朴な教会での結婚式は、未信者である私にとっても感激的なものでした。その日は昭和三十一年二月十九日、夫二十七才妻二十五才でした。

二年後、長男が生まれました。妻はその子の名前を、聖書からいただきたいと考え、私は坪田譲治氏の小説「善太と三平」のような子であってほしいと思い、その折衷案で「潤太」と名付けました。

日本の戦後史の一つのエポックである六十年安保斗争を通して、左翼運動が多極化され、矮小化されてゆくなかで、私の持っていた運動に対する希望は幻想に変り、一つ一つ解体され、それぞれの関係は不安なものとなり、不信から不和、憎しみへと変る生々しい人間関係に絶望しはじめました。

昭和三十七年、ヨルダンにて

以外と豊富な水が滔々と流れるヨルダン川。四米くらいの川巾、そのほとりにヨルダン川の水を詰めた小瓶、ロザリオなどをテーブルの上に並べた露店。ここはイエス・キリストがバプテス

マのヨハネから水のバプテスマをお受けになったといわれる場所です。この年の六月、A航空会社のPR映画を制作するためにエルサレムの街に約一週間滞在しました。白い道、白い石造り、青い屋根の印象が強烈なベツレヘムの街、ゆるい登り坂の角に建っている長方形の教会、イエスさまが誕生なされた馬小屋の跡に建てられた教会。エルサレムに帰る途中ヨルダン軍が休憩しているのに出逢います。何人かの兵士たちが白と黒の縞模様の頭巾をひらひらさせながら円陣を作って踊っているのです。ゲッセマネの園、ゴルゴダの丘の教会、いたるところにイエスさまの足跡を示す遺跡があり、その一つ一つを護るためか、記念して会堂が建てられています。それに加えてユダヤ教、イスラム教の遺跡が混り合って、旧市街のバザールに入ってゆくと、二千年前そのままが現われ、迷路に迷いこんだ羊のようにあちらの店こちらの店と酔ったように徘徊し、二千年前の人と今の人とが少しも変化することなくそこにいて、ヘロデ門の附近では小さなロバに乗ってきた小父さんが、カメラに向って手を振ってくれました。

その当時の私を振り返ってみますと、自分を満足させるように何事も自分を中心に考え行動していました。自分だけの自由を守るために、自身の考えの枠内での基準ですべてを判断して、真の自分はどういう自分なのか解らぬままに、また解ろうともせずに、勝手に自分の経験だけをよりどころにして、人間の自由、個人の自由は何かと追い求めていました。仕事の方は忙しく、仕事中心の毎日ですから、仕事が思うようにゆけばその日は素晴らしい一日で、一緒にお酒を飲む仲間も楽しく見えたものです。仕事優先の日々ですから、家族のことは顧みることなく、子供の

こと、家のことはすべて家内まかせでした。移り変りゆく世の中の情報をとらえて、その中から必要なものを選択し自分を通して置き替え、無意味なものにも必要とあらば意味をつけていつも話題性のある場に身を置きます。自分の存在を明らかにする毎日ですから、自我も一層強くなければ勤まりません。常に先を読んでいつでも対応できる状況を作っておき、どんな事でも知らぬことはなく、人前では話題にこと欠かないで、朝から夜まで、時としては朝まで仕事に遊びに精を出して、それが生きている証しであり、忙しいことがいいことだと思っていました。ですから仕事が空いた時、時間が余った時、仕事以外に自分のために使うべく、スポーツに読書に、また映画鑑賞に、そして仕事の仲間や地域の仲間といろいろなコミュニティーを作り、人間的なつながりをもち自己燃焼することによって生きがいを見つけていました。自我と放慢さで固められた私には、空しい自分がそこにいる、とは露ほども理解できずにいました。

私と妻は結婚して二十七年になりますが、昭和五十六年の夏に私は主イエスに従う者として、バプテスマを受けました。ここに至るまで私に一番大きな力となってくれたのは、妻でした。私と妻と子供たち四人の生活の中で、妻の日々の生きる証しを通して聖霊が私に働かれたのだと思えます。自己弁護ではなく、私の過去をふり返ってみたとき、その過去が自我と高慢で満ち間違いだらけの過去であったにもかかわらず、私の心はむしろその経験を喜んでいます。かつてのそのような私であっただけに、そこから救いだし、変えてくださった生けるまことの神、今のこの落着いた平安な時を与えてくださった主イエス様に、感謝が深まるのです。

さて、その頃、私は自由を求める無神論者であり、妻は子供たちと共に日曜には教会に行く真面目なクリスチャンでした。この二人が一つ屋根の下に夫婦として生活することに、当時はまったく矛盾を感じませんでした。私の自由を誰からも束縛されない代りに、妻の自由も認め、新興宗教を信じるよりはキリスト教の方がまだ良いと自分に都合のよい解釈をしていたのです。

現在、私の住んでいる家の一軒置いた隣りに、ある教会があります。昔、妻はその教会の教会員で、毎日曜日には必ず礼拝に出席し、前夜の土曜日の夜には、日曜の礼拝を飾る生け花が家の玄関に用意してありました。私は土曜の夜は友人たちと付合いでお酒を飲んで遅く帰宅することが多く、その玄関に置かれてある生け花を見ると、何かしら気持が和らぎました。そして次の日曜日は二日酔で午前中はダウンしているのが常でした。

長男の潤太は、高一の頃に吉祥寺のキリスト集会に集うようになりました。妻と次男の洋介は、お隣りの教会へ行きます。日曜日の朝、家族の者が出かける姿を見るのは、私にとっては落着いた気持の良いことでした。その頃の私は、聖書は知らず、信仰のことも知りません。ただ家族が集会や教会に行き、聖書の話を聞いて気持が落着くのなら大変に結構なことだと思っている程度でした。今の世の中は悪いことばかりで、特に子供たちにとっては、若い時に教会のような清潔な所に身を置くことは大賛成、という気持で、日曜日の夜の食事は私が念入りに作ってご馳走をしたりしたものでした。

妻の顔つきが、何かを考えるような、思いつめるような顔つきになり、元気がなくなってきた

かと思えた頃に、吉祥寺キリスト集会の話が家の中でよく話題に出るようになってきました。吉祥寺キリスト集会の話になると、妻の顔も明るくなり、それ以外の時は何か思いつめている様子でした。お世話になった隣りの教会と吉祥寺キリスト集会の間にはさまって、彼女は移って行きたいけれどもおいそれとは移って行けない想いに悩んでいた頃だったのでしょう。

ある日、妻との間でその話が出た時に、私は言いました。その頃は教会と集会の違いも解らない時でした。この世でいう、A社の社員がB社の魅力に感じてB社に移りたいと思うのだけれど、長年世話になり住みなれているA社を自分の都合で止めるのは悪いし、といって将来のことを考えると……というように、AB両社の間に入って悩んでいる社員のようだね、お前は、と言いました。そして私は自分が行きたいと思ったら、多少恨まれても仕方がない、双方うまくゆこうといっても無理なのではないか、有能な社員はつらいね、などと話ししたことがありました。

昭和五十四年、妻の受洗

妻と年老いた私の両親が（現在八十四才と七十七才で健在です）吉祥寺集会でバプテスマを受けることになり、その写真を撮りに初めて吉祥寺集会に行きました。私と信仰とはまったく何の関係もないことであり、集会の人びとが儀式を行い、私は外からそれを写真に撮るといった単純な図式で割り切っていましたから、あまり深い印象は残りませんでした。

妻の姿勢が吉祥寺キリスト集会にはっきりと向きだし、日曜の礼拝、火曜の婦人会、水曜の学び会、木曜の祈り会と頻繁に行くようになってきますと、私の心が不安定になり、嫌な気持にな

り、いつか腹立たしい大人気ない怒りが襲ってくるのでした。

それまでは私の家庭も世間並みの家庭で、父親は亭主関白、多少暴君ではあるが妻には優しく理解ある態度を示し、子供たちには厳しいけれども良き友人たりえる姿を見せ、この家は私を中心にして廻っているのだと大きな思い違いをしている、稼ぎの良い普通の亭主でした。子供たちには気を配ったつもりでした。私の子供の頃からの経験で、自分が楽しかった思い出のあることを子供たちにすすめ、つらかった意味ないことはさせないように、スポーツに音楽に子供の頃から親しめるように妻を指導し、しかし日常生活では家庭は寝に帰るだけの仕事魔でしたから、実際面は妻にまかせっぱなしでした。そして気が付いた時には、妻と子供たちの三人の心は仲よく吉祥寺集会に向いており、私一人が取り残されたような形となっていました。「私たちは集会に行きます。お昼は作ってありますからどうぞ（お好きなように）」と家事はすべてきちんと片付けて吉祥寺に向う様子に、段々と許せなくなってきました。怒りを表わすのも大人気なく、心の中では憤り、顔は仏頂面をしていたようです。自分と宗教はどんな宗教でも相容れぬものと考え、キリスト教そのものは否定はしないけれども肯定もしない、ということはつまり、自分は圏外にあって無関係でいたいのでした。宗教は、弱い人たちが集れば良いのであって、自分は今まで自分の力で人並み以上に生きてきたのだから、これからも生きる自信を持っているのだから、私には必要ないという態度でした。カメラマンという職業の関係でいろいろな職業の人、あらゆる階層の人、また世にいう文化人、芸術家と称せられる人びとと出逢い、知り合う機会が多く、信頼できる素晴らしい多くの人と出逢え、特に一緒に作品にかかわった演出家の中には、優れた人が

多くいました。それらの素晴しい友人たちから私にはないものを学びましたが、自我だけはとり去ることはできません。むしろ自我をもって、他者の自我を許すことでした。自分から仕事をとったら、残るのは酒に漬け込んだ肉体と空虚な心しかない、空しい自分がそこにいる……ということが、自我と傲慢で固まっていた私には理解することもできなかったのです。

思い上がりは、あらゆる惨めさの重みと釣合いを保っている。思い上がりは自分の惨めさを隠すか、あるいはまた、もしこれを現わす場合は、それを知っているということで得意になるかのどちらかである。

パスカル

毎週日曜日に、相変らず妻と子供たちは吉祥寺集会に行き、私は草野球チームの監督をしていたので朝から野球に、テニスにと遊び仲間の間を歩いて時間を稼いでいました。「池田さんは自由でいいですね」といわれても心中面白いはずはありません。「行くなといっているのではない。あまりにも狂信的に行き過ぎるのがいけないのだ」「子供たちにしてもそうだ」「若い内から生き方を決めてしまうのは良くない」「もっとほかの世界もあることを知らなければいけない」「選択の自由が大切なのだ」「お前たちはそんなに早く方向を決めなくても良いのだ」などと。それに対する子供たちからの反論はありませんでした。私も子供たちよりは妻に腹が立っているのですから、事々に文句をつけて集会に行かせぬように邪魔をしました。直接暴力こそ振いませんでしたが、それ以外の暴力的反対、反抗をしました。どうしてこうなってしまったのかが分りません。この混乱した私の症状をカルテ風に記しますと、

1　許容期（妻が形式的な、いわゆる宗教団体に属しているとき。妻が生きた信仰に出逢わない限り、夫は黙認し続ける）

憲法にある思想、信条、信仰の自由を、我が家でも保障いたします。

どうぞ行っていらっしゃい。私は関係ありませんから。

その程度のことで救われるのなら、この世でこんなに苦労はしません。

皆さんで集って慰めあえばよろしいでしょう。

2　独善期　自己顕示期（妻が生きた信仰を持つようになると）

家族の顔が吉祥寺集会に向きがちになるのを、自分の方に向かせるために、家長は自分である、信じるなら俺を信じろと言い、経済封鎖をやることもある。つまり稼いでくるのは主人であることを改めて知らしめる。吉祥寺のキ、ベックのベといわれるとすぐに怒りだすのもこの頃。これだけ家庭のためにつくしてやっているのに何が不満なのだ。宗教と信仰の論争をするのもこの頃、心の底に不安が宿り始めるのもこの頃。

3　無視期（信仰を持った人と接することによって崩された精神的バランスを立て直そうとする期間）

自己の再確認、再構築をするために仕事に精をだし、趣味、嗜好を大切にして拡げてゆく。あせって子供とのコミュニケーションの密度を急に高めようとする。子供はあまり良い顔をしないが、付き合ってくれる。妻とは無言の関係に入り、この頃から聖書以外の宗教書をあれこれと読むようになる。

4　反抗期（心の中に揺り返しがくる。反抗する相手が誰だか分らなくなってくる）

生活が不規則になり、リズムが狂ってくる。自我が丸出しになってきて、普通では考えられない行動をする。私は家内が作った食事は一切食べないことにした。自身の中にある子供っぽい反抗のスタイルがすべて出てくる。

5　終末期（善きにつけ悪きにつけ自分というものが少し見え始めてくる）

今までの自分に絶望し、死の問題を考えるようになる。死によって今までの生が消え去るのか、解決するのか？　別居か離婚して別の生きる道を歩むのか？　絶望して生きるか、希望の中で生きるか。

と今から考えるとお恥かしい次第ですが、以上のような心理状態を通過してきたようです。そして二者択一の問題に直面しました。自分の力で今までのように生きていくのか、それとも家族とともに新しい道を歩むのか、どちらかです。この問題が我が家で噴出したのは、家族が吉祥寺集会に行くようになってからであり、それを考え始めるとまた堂々めぐりになって出口のない思考に閉じ込められてゆきます。いつか自分が惨めになってきて、私の最も忌むべき矮小な心を持った自分が見えてきました。自分が今まで正しいと思い、逆の逆まで考えていた生き方が、まったく始めから掛け違っていたボタンのようであったならどうなのでしょう。絶対的に正しいとされた日中戦争、太平洋戦争でさえ敗戦によってすべてが崩れ去ると、私たちの存在は虚偽の世界にいたことになってすべては足元から崩れ去ってしまいました。二度と再びそんなことがあってはならないと自分の足で稼ぎ、自分の心で測り、自分の思考を正しい方向に向けるべく自分を検

証し、人間の自由、人間の解放と思想的基盤となすべき真理を求めて生きてきましたが、そこには不確実という答があり、その不確実性が人間を成長させると強いて考えざるをえないのです。私たちは真理と幸福をいつも追い求めています。しかし確実さにも幸福にも、ついに達することができずに死んでいくのが人間であると考えるのは良いのですが、それが自分にもあてはまると思うと、惨めな自分が残るばかりでした。

魂が死すべきものであるか、死なないものであるかを知るのは全生活にかかわることである。

パスカル

大学生に、そして高校生に成長した息子たち、その子供たちの心に今まで私はどれだけ迫りえたか、どれだけの時間を子供たちのために作ってやったか、具体的に何をしてその心を満してやったか。今まで自分は勝手なことをやっていました。むしろ、精神的に、肉体的に成長した子供たちの方が、袋小路に入っている私にいつも優しく接してくれました。親よりも大きな広い心を持っていることがうかがえました。この成長ぶりは二人とも集会に行くようになってから目に見えてはっきりしてきたことです。それは認めざるをえませんでした。

家族と共に生きるのか、自分一人で生きるのか、二者択一です。私が自分だけを守り、自我を通すことによって、今、この家庭は空虚な穴があいています。この穴が大きくなれば家族の者はその空洞を背負って生きてゆくことでしょう。妻と出逢ってから二十年、妻が私に尽してくれたことはあっても、私が一体妻に、何をしてやったのでしょう。

昭和五十六年、集会に出席

この年の正月に、早朝の礼拝に始めて家族とともに参加しました。素直な気持で集会にきました。妻や子供たちが対象としているものが何なのかを知るためにきました。集会の中ではそのルールを守り、静かにしていようと思いました。その爽やかな緊張感は、まるで四十数年前の小学校の入学式の時以来でした。私の予期しなかった清潔な心情の世界が、そこにはありました。

信仰にはいるのに、苦痛が伴うのは事実である。しかし、この苦痛は、われわれのうちに生じはじめた信仰から出るのではなく、そこにまだ残っている不信仰から出るのである。もしわれわれの感性が悔悛に反対せず、われわれの腐敗が神の清さに反対しなかったならば、入信にはわれわれの苦痛になる何ものも存在しなかったであろう。われわれは、生来の悪徳が、超自然の恩恵に抵抗する程度に応じてのみ、苦しむ。

パスカル

そして私は聖書を読み始めました。人間がこの地上にどのようにして生まれてきたかという疑問は、誰れでも一度は持ったことがあると思います。そして学校でも家庭でも、はっきりした答えは見つけられませんでした。人類の始まり、その根元は曖昧であっても、その過程を考古学的、人類学的、歴史学的に知識として学問として理解されてさえいればよい、という教育の中で私たちは育ってきました。多くの日本人にとって神は人であっても差し支えがありませんでした。大勢の神々がいてもかまいませんでした。現在でも日常的には子供が生まれれば、お宮参りをして

その子の幸せを祈り、成長して結婚するときは神主さんにお祓いをしてもらい、お葬式にはお坊さんにお経を読んでもらい、残された人々は、お墓参りをして先祖をあがめれば気持が落着くといった心情で、神とか仏とか、つまり信仰の問題を深く考えずにすごして来たと思います。私もまったく同じでした。神と人との関係、人と人との関係は不確実であり、曖昧である中で日常が生きており、その中に張りつめた自我を持って生きている自分をおいていました。そこには自分の心を支える確固としたものは何もありませんでした。

「空の空」で始まる伝導者の書でまず心を刺されました。ソロモン王といわれるこの著者である伝道者が、人生の意味を知るために、知恵を追求し、快楽を追求し、富を追求し、地位も名誉も富も時間も才能もありあまるほどに持った著者が、さらにありとあらゆる方法で人生の意味を知るために試みたことに就いて述べられていました。その結果、人生は不可解であり、不確かであり、不条理であり、また人は人生の苦しみ、空虚と矛盾に会って自分だけではどうなるのか分からないとも書かれています。またすべてのことにおいてあなたは神のさばきを受けることを知っておきなさいともあります。そして最後に、人生で最も良いことは、神を恐れ、神の命令を守ることで、これが人間にとってすべてであると結論されていました。恐ろしいことです。このようにして、聖書は私の今までの人生の中で見たことも聞いたこともない世界に少しずつ目を開かせ、足を踏み入れさせてくれました。集会にも何回か出席してみまして、私が先入観として持っていた教会の様子とはまったく違っているように思えました。集会の中の雰囲気が自由なことでした。上に立って命令している人がいるとは思えませんでした。偉い人はイエスさまだけであって、先生と称せられる人がいませんでした。ベックさんも先生ではありませんでした。集っている皆さんの笑顔が生き生きとしていました。

神さまのことはまだよく解りませんでした。イエス・キリストのこともよく解りませんでした。ただ自分が小さく見えてきました。私から仕事を取り除いたら、私から技術を取り去ったら、私から想像力をなくしたら……家族、友人と共に生活してきて、この世のことのみに頭が一杯の自分がそこにいました。本当の自分自身を知るために一生懸命に生きてきた私の今までの人生は、それを知りたくないために気を紛らわすことのみに努力してきたのではないか、と考えますと、愕然としてきました。考えることを止めた自分はどうなるのだろう、もう何をするにも遅いのか。

この世の知恵は神の御前では愚かだからです。こう書いてあります。「神は、知者どもを彼らの悪賢さの中で捕える」

（Ⅰコリント　3・19）

「あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません」

（マタイ　18・3）

昭和五十六年、私の受洗

そしてその年の六月二十一日、ついに私はバプテスマを受けました。考えていてもまったく理解できない世界でした。神は、まず私の心の奥の深い所にある不安を取り除いてくださいました。傲慢、偽善、物欲、私達を虜にしていた様々の罪から救ってくださり、解放してくださいました。

人間の自由、人間の解放というものが、自分の力では決して解決できないことを教えてくださいました。そして心の中にやすらかな平安を与えてくださり、真の喜びとはどういうものかを教えてくださいました。家の中が明るくなり、コミュニケーションが良くなって、妻の心、子供たちの心がよく伝わってきます。気持良く子供たちを叱り、素直な心がお互いを支えるようになりました。家の中、家族の間、自分以外の人との間、すべてが変えられてゆきました。そして新しいエネルギーが注入され、かつての私を魅惑した事物が、はかないむなしいものにと変化してゆくことを教えてくれます。一日に六十本も煙草を吸った私ですが自然に止めることができました。私のために祈ってくださった多くの兄弟、姉妹の交りの中に加えられました。主によっての兄弟姉妹のつながりが、交りが、どんなに美しく私たちの心を慰めてくれたか解りません。主イエスは私たちに、祈ることを教えてくださいました。私たち家族の間で祈ることによって全ての困難に解決を与えてくださり、いつも心に安らぎを与えられ、大いなる恵みを与えてくださるのでした。そして私たち家族の一人一人にすべての真理である神のみ言葉、聖書を与えてくださいました。その啓示は時としては優しく、時としては厳しく、疲れた私たちの心を奮い立たせ、優しく慰めてくださいます。私たちの生来の弱さと、その中で生きてきた罪にまつわる習慣とが、ともすれば弱い歩みとなって現われがちですが、神のあわれみの中で、その恩恵の光に助けられて生を受けることに永久に感謝し、永久に讃美し、礼拝したいと思っております。最後に私の好きなみ言葉を、感謝をもって捧げます。

初めに、神が天と地を創造した。地は形がなく、何もなかった。やみが大いなる水の上にあり、神の霊は水の上を動いていた。そのとき、神が「光よ。あれ。」と仰せられた。すると光ができた。

（創世記　1・1～3）

「光が、やみの中から輝き出よ」と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです。

（Ⅱコリント　4・6）

たちかえりの記

加納　久美

東京都吉祥寺に生る。立教女学院から立教大学法学部へ。在学中TBSでアルバイト時、御主人と知り合う。大のネコ好き。家族は夫孝夫さん、長男真君、次男基君。



▲集会所の屋上で。'83年2月。



▼母の墓掃除。一家4人と妹一家。多摩墓地。

▲初めて福音を聞きに来た日の私(右)と鈴木さん(左)金沢さん(中)。



昭和五一年八月。私は軽井沢の駅で初めてドイツ人宣教師、ゴットホルド・ベックさんにお会いした。別に聖書に関心があるわけではなかったが、ただ自分の抱えている大きな重荷に耐えきれず、中学時代の友達に誘われるままに参加したバイブルキャンプだった。「あなたが生けるまことの神さまを求めないのなら、来ることがないようにと祈っていたのだよ」ベック兄弟は、私の個人的な問題より、はるか遠くの存在を見つめるような目で私に語りかけた。当時私は主人と離婚し、下の男の子を引き取り、他の人と再婚するべく、すでに新しい生活を始めていた。

仕事が忙しく、ほとんど会話すらない主人との生活。たまに早く十時頃帰ってきても、酔って何を言っても受けつけない。私達の間はしだいに、とげとげしいものになっていった。自分は何のために生きているのだろう。このまま年を取って、私の人生は終わってしまうのだろうか。子供はやがて大きくなり、私の手を離れていってしまう。その時一人ぼっちになってどうやって生きていくのだろうか。焦りと不安を感じ、何かしなくてはならないと思うようになった。どう生せ生きるのなら、私も生きているという精一杯の実感が欲しい。私は家庭を離れて仕事をし、自分だけの世界を作ってゆこうと思った。

大学時代、法学部に学んだ私は、少しでも関連のある仕事をと思い、税理士試験の勉強を始めた。けれどもそれは、私が思っていたほどやさしくはなく、税法の本を読んでもさっぱり分らず、簿記となるとまるでちんぷんかんぷんだった。上の子が小学生、下の子が幼稚園に行き始め、ちょうど時間的にも余裕ができてきた頃、専門の学校に通うようになった。主婦と学生のふたまた生活が始まった。

それは、大学時代にも味わえなかった、真剣勝負の世界だった。何年もかかって浪人しながら勉強している人、事務所に勤めながら、家族を抱えてなおも試験に挑んでいる人。私もいつか、その渦の中にまきこまれていった。個人的に勉強する友達も何人かできた。互いに情報を交換し合い、一緒に勉強をした。やがて主人との生活がますます形式的なものになってゆくのに従って、そうした友情が恋愛的な感情にすり替わっていった。酔って帰ってくる主人の顔を見るたびに、「ああ新しくやり直したい」と思った。

そんなある晩、主人がひどく酔って帰ってきて、いつもの通り私達の間にいさかいが起こった。ちょうど虫の居所が悪かった主人は、「離婚だ、離婚だ」とわめきちらした。初めはお酒の上での離婚話であったが、いつしかそれが現実になってしまった。

私達は憎み合い、子供の取り合いを始めた。上の子を主人が、下の子を私が引き取り、主人はマンションを借りて出て行った。私もまた、下の子を連れて新しい生活に踏み出して行った。けれども私にとっても主人にとっても、子供の存在は大きく、それは夫婦としてのお互いの感情をこえた、大きな問題として残っていた。

私自身の心の中でも、子供のために別れた主人とやり直すべきだという思いと、私の人生は私のものだ。子供のために自分の感情を無視して、犠牲になるのはどうしてもできないという思いとが戦った。「神さま、もしあなたがいるのなら、どうかこの泥沼の中から私を助けてください」私が軽井沢のキャンプに行ったのは、ちょうどそんな時だった。そして私は友達から、一冊の聖書を手渡された。

剣で殺される者は、飢え死にする者よりも、しあわせであった。彼らは、畑の実りがないので、やせ衰えて死んで行く。私の民の娘の破滅のとき、あわれみ深い女たちさえ、自分の手で自分の子どもを煮て、自分たちの食物とした。（哀歌　4・9、10）

まるで私の事を言っているみたいだった。ぞっとした。自分ではもう少しまともな人間だと思い、私にだって言い分はあると思っていたのに、神さまは、私の真実の姿をあばき出された。私は夢中になって聖書を読みだした。聖書の世界を通して、現実の私の生活を見てゆくようになった。光と暗黒。清さと汚れ。聖書の世界にひかれ、生けるまことの神に従って生きていけたら、どんなにいいかと思った。でも神さまに従うことはみことばに従っていくことである。私にはどうしても、できなかった。

――もし別れたのだったら、結婚せずにいるか、それとも夫と和解するか、どちらかにしなさい。――また夫は妻を離別してはいけません。（Ⅰコリント　7・11）

神さまは再婚を許してくださらない。主人と和解するようにとおっしゃっている。しかし実際には再婚することも、さりとて主人のところに戻ることもできず、悶々とした日々を送っていた。

「神さま助けてください。だめな私をあなたなら助けられます」

友達に誘われて、何回か家庭集会にも行くようになった。ある日、二人の姉妹の証しの中で、二つのみことばが私の心をとらえた。

さあ、主に立ち返ろう。主は私たちを引き裂いたが、また、いやし、
私たちを打ったが、また包んでくださるからだ。
（ホセア　6・1）

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。
（ガラテヤ　2・20）

彼が読んでいた聖書の箇所には、こう書いてあった。「ほふり場に連れて行かれる羊のように、また、黙々として、毛を刈る者の前に立つ小羊のように、彼は口を開かなかった」
（使徒　8・32）

その頃、子供のことで、私と主人は時々会っていた。会えば口論になり、その時も私は激しい言葉を主人に浴びせていた。いつもなら、何かを言い返してくる主人が何も言わず、ただ黙ってうつむいていた。じいっと下を向いている主人の顔を見ているうちに、「ほふり場に連れて行かれる羊のように、また黙々として毛を刈る者の前に立つ小羊のように、彼は口を開かなかった」という聖書のみことばが、私の頭をよぎった。私は、はっとした。主人の後ろにイエスさまが立っている、そんな気がした。私が罵っているのは主人ではない、イエスさまだ。イエスさまは十字架にかかった時、何を言われても、こうしてじいっと下を向いて黙っていた。イエスさまを罵り、十字架につけたのは、この私なのだ。人を傷つけ、自己主張をし、我がままの限りを尽くして生きていこうとしているこの私が、イエスさまを十字架につけたのだ。

その翌日、私は聖書を開いて祈った。「私のために十字架についてくださって、ごめんなさい。御子イエスの血は、すべての罪から私たちを清めます、とみことばにあります。私を清めてください」私は更に祈った。「私は自分の力に頼り、自分の尺度で生きようとして失敗しました。神さま、あなたがこれからは、私の人生の主人として、私の人生を支配してください。主人のところに戻るのが、あなたのみこころならどうかそのようにしてください」

神さまはこの祈りの後、私達の生活に具体的に介入してくださり、私は主人のもとに戻ることになった。

一粒の麦がもし地に落ちて死ななければ、それは一つのままです。しかしもし死ねば豊かな実を結びます。自分のいのちを愛する者はそれを失い、この世でそのいのちを憎む者はそれを保って永遠のいのちに至るのです。
（ヨハネ　12・24、25）

人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。
（ヨハネ　15・13）

神さまは再婚しようとしていた人との問題においても働いてくださった。本当に人を愛するのなら、その人が神さまと出会えるように配慮してあげるべきだ。意識して罪を犯しつづけるならば、私も、その人も、神さまから離れてゆくしかないのだと思った。小さな人間の一時的な感情ではない、永遠の神の配慮のもとに彼を委ねた。

昭和五二年一二月、私と主人は、集会の二人の兄弟の証人のもとに再婚した。私がキリストに従うと同時に長男が、それから半年後に次男が、そして二年後主人が、それぞれ信仰に導かれた。

さあ、主に立ち返ろう。主は私たちを引き裂いたが、また、いやし、
私たちを打ったが、また包んでくださるからだ。

（ホセア　6・1）

視聴率競争の果てに

加納　孝夫

一九三四年名古屋に生る。高井戸第2小、都立10中、都立西高を経て早稲田大学理工学部卒業後、TBSに入社。文部大臣賞受賞作品「私は貝になりたい」の調整を担当。「奥様8時半です」ではプロデューサーを。以降主に技術部門を担当し現在に至る。趣味はアマチュア無線。家族は妻久美さん。長男真君、次男墨君。



▲TBSで同僚と。'82年。

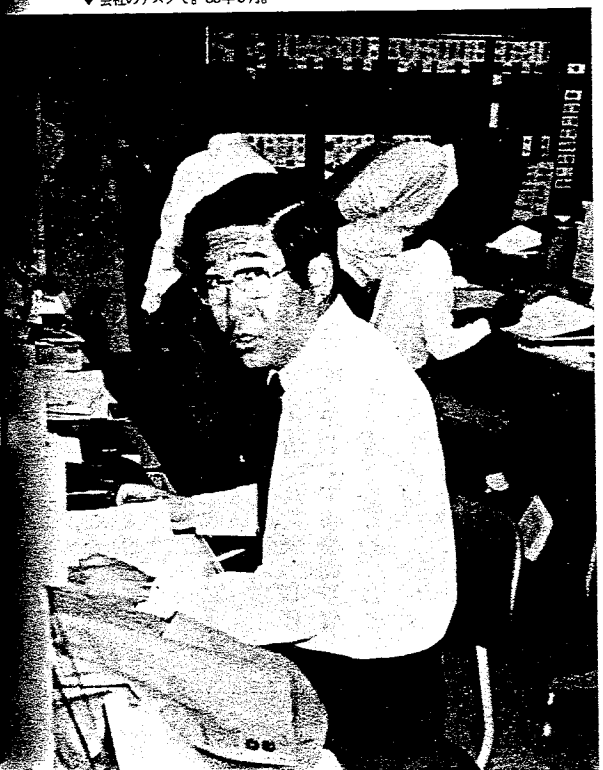


▼'83年2月。



▼パリコレクション'80のVTR中。パリにて。

▼会社のデスクで。'83年3月。



私は昭和九年生まれ、四十九歳の男性です。これまでの人生を振り返ってみますと、それなりに結構波乱に満ちた人生だといえるのではないでしょうか。ことに少年期に経験した太平洋戦争、そして戦後の食糧難。これらの時期に得た多くの経験は、現代の若者がいかに万金を投じても得ることのできないものでありましょう。したがってこの時代に生を得ましたことを、大いに感謝している次第です。

とにかく、戦後の混乱期も過ぎ去った昭和二八年に大学に入り、三二年に当時始まったばかりの民間放送テレビ局に入社しました。以後十数年間は、テレビ技術屋として夢中で仕事をしました。その間テレビ産業は目覚ましい発展を遂げ、モノクロームからカラーへと変遷してゆきました。それとともに、いわゆる視聴率競争も激化の一途をたどり、常に視聴率のトップ街道を驀進していた私の会社も、安閑とはしていられなくなってきたのです。

入社後九年目に職場結婚をした私たち夫婦には、すぐに長男が、そして次男が生まれました。

このまま平穏無事なサラリーマン生活が続けば、また違った人生が展開していたかとも思われますが、周囲の情勢はそうはさせてくれませんでした。突然の人事移動が発令され、技術屋からディレクターへと転身させられてしまったのです。

当時はテレビ各社ともに、朝の時間帯での視聴率競争が一段と激しさを増してきた時期であり、遅ればせながら私の社も、朝のワイドショー合戦に参加することになったのです。各職場から多くの人材が集められました。私も以上のようなわけで即席ディレクターと相なった次第です。

今、当時のことをふり返ってみますと、主のご計画はこの頃から実行に移されていたような気がいたします。もちろん私ども夫婦は、まったく主とは無関係な、自己中心的な生活を送っていたのですが。

私の少年時代は、冒頭にも触れましたように、太平洋戦争に大きく彩られています。

私は小学校五年生の夏に、岐阜県大垣市に住んでいました祖母の家に、単身疎開をさせられました。いわゆる縁故疎開です。家の向いには親類の小母さんが住んでいて、毎夕その家の仏壇に向って座らされ、お経を小一時間ほど読ませられるのでした。当時の大垣は、湧き水が街のいたる所を流れ、水の都といわれる人口五万人ほどの商業都市でした。一人ぼっちの疎開生活にもようやく慣れてきた頃、東京から長兄重態の電報が届きました。当時麻生中学の生徒であった兄は、蒲田の工場へ学徒動員で徹夜が続いておりました。ところが工場の帰りに列車から落ちて、両足切断の重症を負ってしまったのです。もちろん祖母も私もどうすることもできません。毎夕のお経を熱心にあげ、学校の行き帰りに、お寺の屋根が見える所で必ず立ちどまって、兄の回復を一心に祈りました。「どうぞ仏様、兄を護ってください」と。

二十日くらいして兄は死にました。私はくやしくてなりませんでした。「どうして願いを聞いてくれなかったのですか、仏様……」。毎夕のお経も急に熱がさめてしまいました。

そのうち東京の家が焼け、大垣の祖母の家も焼けてしまいました。終戦の年の十二月、一家は

再び東京にもどりました。予科練に行っていた次兄も復員しましたが、戦争は一番の頼りになっていた長兄を一家から奪い取ってしまいました。

戦後の食糧難もまた深刻でした。二度の戦災で何もなくなってしまった我々は、竹の子生活さえできませんでした。六年生の私さえも重いリュックサックを背負って買い出しに出かけました。恥を忍んで同級生の家へ芋を分けてもらいに行ったとき、農家の門から出て来た友人のびっくりした顔は、今でもありありと思い出されます。しかしながらこのような経験は、当時日本人であればほとんどの人々が味わったものですから、当たり前のことだったので、今思い出しても、ちっとも悲しくはありません。かえって、苦難の時代を子どもなりに打ち勝ってきたという自信を持ち得たことを、またそのような時代に生を得たことを感謝している次第です。

話がちょっとわき道へそれてしまいましたが、テレビディレクターとしての仕事も、それはそれなりになかなか大変でした。後発のワイドショー番組で視聴率を上げることは至難の業といってよいでしょう。毎日毎日企画会議が開かれました。本番は朝の六時台から九時台まで。各人が与えられた時間枠をどのような形でうめてゆくか。私は朝の四時台に出勤し、夜の十時頃まで作業が続きました。夜になると、片手にビールのコップを持って、果てしなく企画の可否について議論しました。当然のことながら、妻のことを顧みる時間はなくなってしまいました。「あなたは何も聞いてくれない」と毎夜のごとく妻は訴えますが、私から出る言葉はただ「うるさい、うるさい」だけでした。

その頃、妻は、息子たちの世話にも一段落し、「このまま年をとるのでは、何のために生きているのかわからない」と真剣に考え出したようでした。前述したように、私はただ自己本位の生活を追い続けている時期でしたから、妻がそのように考えたとしても、それは無理からぬことに違いありませんでした。

私の仕事はやがて、ディレクターからプロデューサーに変わりました。それでも仕事の忙しさは変わりません。より高い視聴率を獲得するために、企画変更することもプロデューサーの任務の一つです。我々スタッフは、人生相談企画を案出しました。第一回の出演者は、新幹線に自分の赤ちゃんを一人で乗せて、別れた夫のもとへ送り返そうとした女性でした。それからは全国から寄せられる手紙や電話やらに、てんてこまいの毎日でした。世の中、かくも悩み多き人々で満ちているのかと思いました。

そんな忙しさに毎日明け暮れている頃、突然、妻がいなくなってしまったのです。呆然自失とはこういう状態をいうのでしょうか。職場結婚をし、テレビの仕事を理解してくれているとばかり思っていた妻が。また理解できなくても、妻は忍耐してくれると、そう思っていたのは自分だけの思い込みにすぎなかったのでした。人生相談の企画をかかえながら、私自身もまた、人生相談のために弁護士の門をたたかねばならないというこの皮肉な現実は、他のスタッフの眼にはいかに映じたことでしょうか。

不和の原因として、妻の実家で一緒に暮らしていたことが考えられましたので、急拠、庭先に

一軒家を建ててみましたが、何の足しにもなりませんでした。妻とは何回も会って話をしましたが、無駄に終わりました。ついに私は再出発を考え、新たに建てた家も捨て、小さなアパートに移り住みました。そして八王子の丘の上に新たに家を造りました。妻には何とか帰ってきてほしいと頼みましたが、自己中心的な考え方を捨て切れずにいた我々を、再び結びつけるきずなはどこにも見当たりませんでした。

もちろん妻の方も、大いに悩んでいたに違いありません。妻の立教大学の先輩や友人がたが大勢心配してくださいました。人間的な方法での解決ではなく、主に委ねるように勧めてくださる方もいました。その結果、妻は、吉祥寺キリスト集会とベックさん夫妻を知りました。私もまたベックさんを知るようになりました。ここで初めて、私たち夫婦は共通の言語を持つことができたのです。

以前は相手に向っていくら一生懸命にしゃべっても「言葉」が違うのですから、何も通じなかったのです。

初めに、ことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。

（ヨハネ　1・1）

しばらく時間が経過した後、妻はこの問題を主イエスに委ねる決心をしました。そして主の愛がサタンに打ち勝ちました。妻は帰り、家庭は保たれました。

こうして、私たちにとって二度めの人生が始まりました。しかし私にはまだ主イエスの御愛がはっきりとはわかってはいませんでした。一方妻はまったく純粋なクリスチャンになりました。以前とはうって変わっておだやかになり、私の一方的な身勝手に対しても、常に「私が悪かったわ」と言うようになりました。このように変わった妻の態度にすっかり安心した私は、「妻が主イエスを知ったのは良いことだ。でもそれは妻の個人的な問題であり、自分の生きざまにはかかわりがないことだ」と思い込むようになりました。しかし、主はそんな片手落ちなことは絶対になさいません。ベックさんを通じ、吉祥寺集会の兄弟姉妹がたを通じ、主は愛をもって常に私に語りかけてくださったのです。

最初に参加した軽井沢キャンプで、ふと、壁に貼られた次の聖句が目にとまりました。

主イエスを信じなさい。そうすればあなたもあなたの家族も救われます。

（使徒　16・31）

この一言は、鋭く私の心に焼き付いたのです。かたくなに反発する心に、徐々にではありましたが、主の愛が浸み込んできました。

そして昭和五五年三月二七日に、吉祥寺集会で、洗礼を受けました。すでに長男は受洗していました。

その後、福音集会の司会も務めさせていただきました。その時のメッセンジャーが語られた話のテーマは、ヨハネ第一の手紙からとったものでした。私は次の聖句を引用して祈らせていただ

きました。

わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。

（ヨハネ　8・12）

以後この聖句を、しばしば引用してお祈りしています。

さて人生相談の企画は、私が再び技術屋にもどってからも、姿を変えて約一年間続きましたが、「崩壊結婚」という一冊の本を世に出した後、終了してしまいました。テレビの番組としては一応成立したかに見えたこの企画も、相談を持ち込んできた当事者の方がたにとってみると、ほとんど何の解決も与えられなかったのではないでしょうか。すべてのことは主に委ねることによってのみ解決されるものであると、私の担当した番組を通じ、私自身の体験を通して、今では確信をもって言うことができます。

とはいっても、私自身ある日突然身も心も生まれ変わり、深い信仰心をもって人生を歩み始めたわけではありません。少しずつの変化が積み重なってはいきましたが、私の心の大部分はあまり以前と変わらないものでした。良心のうずきを感じながら、同僚と酒を飲みました。麻雀も引き続き誘われるままにやっていました。妻からも、「またお酒を飲んできたのね」と言われるようになりました。しばらくの間中断していた夫婦げんかも、また復活してきました。そんな生活を性懲りもなく繰り返していたある時、私はベッグさんからの電話に、大いにあわてさせられました。それは交わり会に夫婦で証しをしてほしいという内容でした。その時私はベックさんに、「準

備期間も少ないし、その日の初めには、五日ほど九州へ出張しなければならないから、ちょっと無理です」と、頑強に断わりました。ベックさんも大いに困られたご様子でしたが、結局了解されました。しかしそのかわりに、その次の会にはぜひお願いします、と言われました。私にはお断わりするよい理由が見当たりませんでしたので、承知せざるを得ませんでした。

私がお断わりした交わり会での、他の人々の証しは、非常に後ろめたい気持ちで聞く羽目になりました。なぜ証しができなかったのか。その本当の理由は一つ、皆の前で自分を偽った証しをする気持ちになれなかったからです。主は私のすべてをご存知だからです。

交わり会からの帰途、まず酒と麻雀を一切やめてみようと決心しました。証しへの第一歩は、まずここからだと思ったからです。その結果、主の御心であれば、次の交わり会の証しの場に立つことができるはずだという思いがしました。

ところが次の週が始まると、早くも上司から「明日、他部のデスク連中と会合を持つから、出席するように」と言われてしまいました。驚いたことに、その週は同様な酒席が三日も続いてスケジュールされていたのです。今までも、朝には「酒は飲むまい」と決心をして家を出ても、夕刻になり、気がついてみるとすでにビールのコップを手にしている、といったことを繰り返していた私には、本当に酒を絶つことができるだろうかと半ば絶望的な気持ちでした。しかし窮すれば通ず、ジュースを腹いっぱいになるまで飲むことにより、苦難の三日間を何とか通過することができたのです。今まで通りの私では、これは絶対に不可能なことでしたが。

以来証しの日まで、何とか酒を飲まずに過ごしました。また雀友も、不思議に私を誘わなくな

りました。

どうもアル中の告白めいているのですが、実際テレビの職場にはいつも酒がつきものなのです。生本番のある日など、私は朝五時に起き、六時に会社に入り、七時と十二時の番組を担当したりします。生本番ですから、本当に神経が緊張します。もう二十年以上続けている仕事ですが、切換ボタンに触れている指が、小刻みに震えているのがわかるほどです。そんな一日の緊張感から解放された時、つい杯に手が出てしまうのです。それが一、二杯ならよいのですが、若い人たちと仕事のことなど話し出すと、ついつい十二時を過ぎて帰宅、というざまになってしまいます。しかし酒をやめたことで、夜の時間が自分のものとして返ってきました。その結果、夫婦げんかも無くなりました。水曜日夜の学び会にも、以前よりは出席できるようになりました。良い学びができるようになったことは、すばらしいことです。

ただキリストの福音にふさわしく生活しなさい。

（ピリピ　1・27）

私はまことに意志の弱い人間です。その私に対して、主は愛をもって語りかけてくださいました。また力をかしてくださいました。そして今日、私自身の貧しい体験を、私たち夫婦に主がなしてくださったみわざを、偽りのない気持ちで皆さまにお伝えできたことを大変嬉しく思っています。

終わりにあたって、聖句を一ヵ所引用させていただきます。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者はさばかれない。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかったので、すでにさばかれている。そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した。その行ないが悪かったからである。悪いことをする者は光を憎み、その行ないが明るみに出されることを恐れて、光のほうに来ない。しかし、真理を行なう者は、光のほうに来る。その行ないが神にあってなされたことが明らかにされるためである。

（ヨハネ　3・16～21）

klein aber meinから klein aber Deinへ

野口 広

一九二五年東京に生る。小松川小、墨田工業学校、物理学校（中退）。東北大学理学部数学教室卒業。理学博士。イリノイ大学客員教授等を経て現在早稲田大学理工学部教授。「カタストロフィー理論」等著作多数。日本あやとり協会世話人としても多くの本を出版。家族は妻とも子さん、長男透君、次男修君、長女香さん。



▲カタストロフィー理論の講義。

▼「徹子の部屋」にて。



▲母クリのバプテスマの日に。

私は今より約三十五年前、二十歳になる前後に、絶対に他の者によらず、ただ自分の力のみで生きようと決心しました。この決心はこの時代に父を失い、母と弟の三人だけで生きてゆかねばならないという経済的環境も一因ではありますが、よろずのものへの幻滅、特に単純に信じていた神国日本の哀れな連合国への無条件降伏というショックがその原因かと思います。自分以外のものを信じ、裏切られたときの悔しさとばからしさが、身にしみたものと思います。こうした哀れさに比べれば、どにかくその存在が確信できる自分（コギト・エルゴ・スム＝我思う故に我在り）を頼んで努力する方が——それで満足が得られなかったとしても——よほどましだと思ったのです。この頃、母と弟がクリスチャンになりました。思えば彼らと全く逆の道を私はただただ、あつものにこりたが故に選択してしまったのです。

その頃また、自分の仕事として数学の研究を選びましたが、これも数学は紙と鉛筆さえあれば、金も力も地位も何もなくても自分一人でやれるようだと考えたからです。そして有史以来の世界最大の数学者といわれるドイツのK・F・ガウスのモットーが klein aber mein （小さくとも、私自身のもの）であると聞いて、我が意を得たりと、数学の研究へとまっしぐらに進みました。

それから約二十年間、この間に結婚したり、子供たちが生まれたり、妻がイエス・キリストへ導かれたりの事件もありましたが、私が四十歳までの間は、この調子で一目散の生活をしました。しかし数学を研究すればするほど、自分の非力なこと、それに比べて目に見えない高次元な世界をも美しい調和のもとに創り出された創造主の存在とその力とに圧倒されました。否応なしに次

の聖句が真実なものとして示されるのです。

初めに、神が天と地を創造した。

（創世記　1・1）

すなわち、創造主が創造された世界を私たちはその乏しい知力で発見する。これが数学の研究だと分かりました。しかしここで主の力を借りるのは、今さら情けない、第一骨折り苦心して得た結果が、何かカンニングでもしたように、私のもの（mein）ではなくなると思ったからです。四十歳頃より、私の心はイライラとした感情の中に、何か氷に閉ざされたような、いつも不満な状態になりました。

五十歳台に入って、この頃の私の仕事は、できてしまうと満足はほんの一瞬であるのに、そのために払った家庭生活の犠牲は、とてもこうしたあわのような仕事では償われないくらい大きいことが分かってきました。この頃、立派な学者へと成長した教え子の一人が他大学へ就職してゆく晴れの日に「先生は首から上が無いかと思いました。いつも怖くて先生の顔を見たことがありませんでした」と冗談を言いました。振り返ってみると、もうこの頃には、私は親も、妻も、子供たちも、愛しているとはいえませんでした。そしてさらに、あれだけ大切にしていた自分自身すらも愛していないことに気がつきました。高ぶり、怒り、ねたみ等々、あらゆる悪魔の属性が我が身にまつわりついていました。そして周囲の全ての人々を踏み倒し、行き先など定まってもいないのに、ただ四六時中、原稿用紙をイライラと書きまくっているというのが私の生活でした。これが自分にのみ頼んだ生活の結論なのです。

自分の力を自分の神とする者は罰せられる。

（ハバクク　1・11）

加えて長男が高校は出たものの、普通人の生活を拒否して、自分のからに閉じこもるというトラブルが発生し、これを手始めとして、我が家から歌声が消えて、私の家庭は破滅への道を歩き始めたかに思えました。

このトラブルは、私たちの家庭にとっては、その上にのしかかって私たちを押しつぶしている恐ろしい巨大な悪魔のようであり、いろいろなほかの理由はともかく、私の回心の最も決定的な動機となったことは間違いありません。

このように私のこれまでの生活の公理（自己にのみ頼るという公理）は誤りであることが明確に証明された以上、数学的にも、私は別の公理の上に立たなければなりません。しかしどんな公理の上に立つべきでしょうか。物でしょうか、人でしょうか、いわゆる神々でしょうか、仏でしょうか？

昨年（昭和五七年）の初夏に、ベックさんの書かれた「実を結ぶ命」を読みましたが、この本に、別の公理に立って二十歳でがんで死んだ若い魂の喜びの記録が示されていました。がんによる死という試練の中で、彼女リンデは次のように記しています（同書一一四頁より引用）。

人間に理解できない試練は、神がご自身の目標を達成するために取られた手段です。しかしそのために主は、いつでも私たちの信頼を必要としておられるのです。従って私たちは次のことを覚えましょう。私たちの完成のための手段がどのようなものであれ、その背後には必ず主

が立っておられるということです。これこそ喜びの源であり「喜びなさい」という主のご命令の根拠なのです。

これが主イエス・キリストにより頼み立つ人の生活の結論なのです。もし私だったらどうでしょうか。「何で私がこうならなければならないのか。神さまは何をしてる、医者はいったい何を研究している…」等々と悪口雑言を繰り返し、痛い、痛いと悔し涙を流しつつ、呪い死ぬでしょう。リンデの主、イエス・キリストは人として世に来られ、死してよみがえった、復活の力を持つ世界最強の力を持つ神であり、よって宇宙の創造主でもあります。その力の故に、リンデは死の淵でさえ喜んでいられたのです。リンデの生活の公理は最高の選択であるのです。

ところでこの「実を結ぶ命」の発行所でもあり、ベック兄が責任を持たれている吉祥寺キリスト集会へ、私は毎週集うように導かれました。それまで私につきまとっていたある種の教会観念は、そこでことごとく払しょくされました。具体的には、まずそこは教会ではなく集会という呼称を用いていること。次にこの集会には、会員制がないということ。また献金制度がないこと。そして役員会等の意志決定機関がないということでした。やがて集会の様子が分かってくるにつれて、それらの特徴は、人間的なものに頼るのではなく、集会の中心である生けるまことの神にのみ頼ってゆくという公理の実践にほかならないということに気がつきました。

その吉祥寺キリスト集会において、昨年七月十一日に私はバプテスマを授けていただき、これまでイエス・キリストを離れていた罪を悔い改め、古い自我を十字架上で滅ぼしていただき、イ

エス・キリストを主として迎え入れ、生活の公理を「主イエス・キリストにより頼むこと」としました。つまり私は白旗をかかげて、再び無条件降伏したのです。前には天皇に代わってマッカーサーが日本へ来て支配しましたが、今度は自我に代わって主イエスが私の全てを支配されることになったのです。

この直後にK・F・ガウスのモットーは実は pauca sed matura（数は少なくとも、完成したもの）であったことを発見しましたのは、まことに皮肉なことでした。またこのことを東久留米市滝山の今川邸にてお証ししたとおり、新見兄が以後は klein aber Dein（小さな者ながら、主のもの）として励まれるようにとの導きを受けましたことは感謝の至りです。

これより私、信仰一年生の個人的な体験をお証しします。私はベック兄に言われたように、聖句を一つ覚えて、今日一日はこの聖句に背くまいと努力してみました。たとえばある日、

さばいてはいけません。

（マタイ　7・1）

この聖句を一日中、心で叫びつづけていましたが、その日は成績の採点をすることになり、つい甘い点をつけてしまったり、

自分の敵を愛し、

（マタイ　5・44）

これには本当に困ってしまいました。こうして失敗と成功を繰り返しているうちに、不思議にも、氷のように閉ざされていた私のイライラの心が次第に溶けて、心に平安が訪れてきたのには

驚きました。

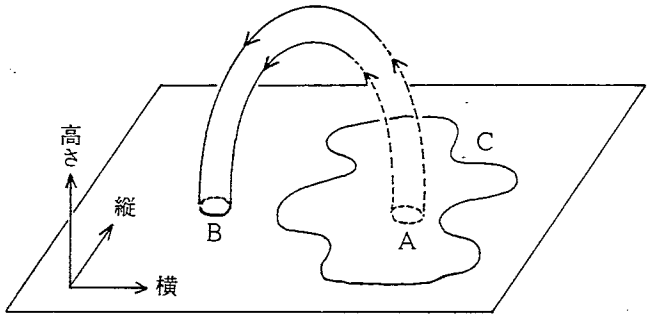
これは私にとって生まれて初めての体験です。何か未知の新しい力が私に働いたのです。そうだ、聖霊が私に働いている。約二千年前にイエス・キリストがなさった御わざが今この私に働いている。宇宙を創られた主は、今も生きておられ、その御手を私のために動かされたのです。私は飛びあがって喜びました。

何も思い煩わないで、あらゆるばあいに、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。

（ピリピ　4・6、7）

私はこれまで、私たちの住んでいた空間と時間を加えた四次元の世界に完全に捕われて生活していましたが、これと異なる、神の御手が人々の心に働く、新しい次元を持つイエス・キリストの世界を体験したのです。この新世界は次元がいくつか分かりません（無限次元かも知れません）。しかしこの新次元が少なくとも一つ、私にとって実在となった以上、数学的にも、祈りに応えるイエス・キリストの行うわざ――すなわち奇蹟――は私にとって不可解なものではありません。これを次に説明しましょう。

分かりやすくするために、次元を下げて、私たち人間は縦と横の二次元しかない平面国人であるとし、主はそれに高さの加わった三次元の立体国に住まわれているとしましょう。さて次の図



のCで示した平面内の曲線によって、平面は内と外の二つの領域に分かたれます。つまり図でAにある物を平面国内でBへ移そうとすると、どうしても曲線Cと交わります。つまり、平面国では曲線Cのどこかを横切らなければ、Aにあるものは決してBへは移せません（ジョルダン曲線定理）。

しかし、平面国人には全く想像もつかない第三の次元である高さの方向に、Aにある物を図のように持ち上げて運べば、曲線Cを横切らずに物はAからBへと移せることは全く当たり前のことです。しかし平面国の人々には高さが感じられないのですから、この現象は奇蹟としか考えようがないでしょう。主はこのように私たちには見えない新しい次元を通して、私たちの心の中に奇蹟を起こしてくださるのです。

信仰は望んでいる事がらを保証し、目には見えないものを確信させるものです。

（ヘブル　11・1）

主イエス・キリストは、多くの兄弟姉妹らと私たち夫婦の祈りに応えてくださり、九月十九日三人の私たちの子供たちにバプテスマをお授けくださいました。私の回心のためには、母と妻と合わせて五十八年におよぶ祈りがありました。それが私たちの受洗から数えても約二ヵ月の間に三人の子供たちの回心がなされるとは！　この子供たちに行われたイエス・キリストの御わざは、私たち夫婦にとってはまさに奇蹟としか言いようがありません。

以上お証ししましたように、最近は家族そろって心を合わせ、イエス・キリストに祈ることができ、その結果創造主の御手が我が家の立ち直りに働いていてくださることを知ることができるのは、本当に感謝の限りです。

五人の子供が与えられて

小林多津子

東京都中野区に生る。橘小学校、区立尾山台中学校、法政大学文学部附属女子高等学校、法政大学文学部卒業後、心身障害児通園施設みどり育成園勤務後、宮島法律事務所に勤務していた一元さんとご結婚。長女泉ちゃん、長男一主君、二男伸主君、二女主美ちゃん、三女賛美ちゃんのお母さん。趣味は手芸とレコード鑑賞。



▼軽井沢バイブルキャンプの二女と三女。

▲一家7人そろって。



▼交わり会での証し。



▼ワンボックスカーは集会へのフットワーク。

「わたしの恵みはあなたに十分である。というのは、わたしの力は弱さのうちに完全に現われるからである」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ、大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。

ですから、私はキリストのために、弱さ、侮辱、苦痛、迫害、困難に甘んじています。なぜなら、私が弱いときにこそ、私は強いからです。

（Ⅱコリント　12・9、10）

主の御名を崇めて心から賛美申し上げます。

私の未熟な信仰生活ではありますが、その歩みの中で救い主なる主イエス・キリストが、どのように私を支え、導き、どれほど深い恵みを持って私と私の家族を祝福してくださったかを、ごく身近な経験を通して、お証しさせていただきます。特に喘息という持病を負いながら、五人の子供の出産と育児に私を力づけ、お守りくださった、主イエスの恵みをお伝えしたいと思っております。

私達は、つい先日結婚十二年目を迎えました。その間に五人の子供が与えられ、現在、小学校五年の長女を頭に、四年の長男、二年の二男、五才の二女、そして、一才九ヶ月の三女とまことにただ今、子育ての真っ最中の多忙な毎日を過しております。

主イエスへの信頼

私にとりまして、この五人の子供にまつわる様々な出来事は、主イエス御自身に対する私の百

パーセントの愛と信頼とを体験させていただき、また、服従と忍耐を学ぶことにより、主イエスにある喜びを味わい知るための通るべき道でした。しかし、私の自己中心から出る我がまま、甘え、高慢、安易な妥協といった不信仰は、主イエスの愛からしばしば私を遠ざけ、心の平安を失なわせるものでした。

見よ、主の御手が短くて救えないのではない。その耳が遠くて、聞こえないのではない。あなたがたの咎が、あなたがたと、あなたがたの神との仕切りとなり、あなたがたの罪が、御顔を隠させ、聞いてくださらないようにしたのだ。

（イザヤ　59・1、2）

神さまは人間の罪深さを厳しく指摘されます。また祈っても、祈っても何の響きもなく、心に何の変化も起きない。私は見捨てられたのかと思うほど、主イエスのいじわるな沈黙が続くことがありましたが、実は、それが祈りの答の一つであったのです。その答の中から、静かな力強い声が私の魂によみがえってきます。

「私が道であり、真理であり、いのちなのです」

（ヨハネ　14・6）

主イエスと共にあり、主イエスは、私と共に歩んでくださるという確信のもとに、現実に起こる様々な事柄に対して、私はいつも積極的に理解し、行動できる力が与えられました。同時に、主イエスご自身の中にこそ、本当の希望と、喜びと、満足があったのです。

さて、私は先にもふれましたように、小児喘息が私の持病となり、三十余年間、毎年季節の変

わり目に襲ってくる発作に悩まされてきました。両親は、何とかして根治させたいとの思いから、専門の病院を転々と回り、よく効くといわれる薬や治療を試みてはくれましたが、しかしどれもみな一時的な気休めで、また時季が来ますと同じことの繰り返しでした。両親もたいへん苦労し、私のために一つの重荷を負ってゆかなければなりませんでした。

結　婚

私は中学の二年頃から、賛美歌が好きなこともあって、姉を通して教会に導かれ、心ひかれるままに何の抵抗もなく、素直な心で信仰を持つことができました。学生時代に、聖書研究会で今の主人と出会い、一九七〇年九月一二日に吉祥寺キリスト集会で結婚式を挙げました。主イエスの深い恵みと、周囲の方々の暖かな祝福に包まれ、私たち二人の心は感謝と喜びに満ちていました。

しかし、私の肉体は弱く、式の直前から様子がおかしくなり、喘息の対症薬の一つであるメジヘラーという吸入薬を吸いながら、結婚式は始められました。式の途中から発作が強くなり、ついに耐えられず、披露宴を中座して病院にかけ込むというハプニングが起りました。一人残された主人は冷汗をかきながら、御来賓の方々の祝辞に応対しなければなりませんでした。それでも少し落ち着いたところで病院から戻り、なんとか最後のご挨拶を主人と共にさせていただいて、一件落着とはなりましたが、周囲の者をハラハラさせてしまいました。

そんなわけで楽しかるべき新婚旅行も、とうとう出発できず、式が終るや否や私は、新居であるアパートの寝床へ臥すことになり、当初の計画からだいぶ予定が狂ってしまいました。まさに

人のはかりごとは、その通りには実現実行できないものだという教訓を、私達は否応なしに新家庭の営みの初めから与えられたものでした。

このように喘息の発作と共にスタートした私達の歩みですが、主イエスの力は、弱いところに完全に働いてくださるという聖書のみことばに支えられ、どのような不安にもまったく押しつぶされることはなく、弱さのゆえに、イエスさまに甘えすがってきました。

私は以前より、心身障害児の通園施設に勤めていましたので、結婚後もそれを続けました。しかししばらくしてから、再び喘息が起こり始め、最初のうちは薬を飲み、吸入をしながら通勤しておりました。おさまらず、ある日園を早退して帰宅途中、強い発作に見舞われました。吉祥寺の駅まではやっとたどり着いたもののどうしても自宅まで歩いて行けずに、近くの旅行センターのベンチに坐わっておりました。その状態を見兼ねた人が、救急車を呼んでくれましたので、通院しておりました診療所に、そのまま入院することになりました。

長女誕生

発作はまもなくおさまり、約二週間後には退院しました。健康の方も落ち着いたところで再び勤めましたが、しばらくして懐妊という出来事が起こり、そのことに伴って体にいろいろな変調を来たしあまり無理ができなくなりましたので、体の養生と、出産準備のためにも仕事をやめることにしました。

この時医師から、喘息の特効薬であるプレドニンという副腎皮質ホルモン剤は、妊娠初期に大

量使用することにより、みつ口などの奇型や、脳の障害、また女の子の場合、大人になっても子供を生めない体質になることがあると聞かされました。初めて子供が与えられようとする私達にとって、この医師の話は、私達二人の心を冷たく、痛く刺しました。事細かく聞かされた主人は、私以上にショックなことでした。

私達が、胎児に薬の影響がないことを真剣に祈ったことは言うまでもありません。しかし、たとえ最悪な状態が考えられても、この命は神が私達に与えられたものである、という信念と責任において、生んで育てていきたいという気持が、祈りを通して与えられていました。

私達の不安と緊張の中に、一九七一年八月一八日、無事健康な女の子が誕生し、大勢の方々から祝福をいただきました。私たちも、イエスさまの豊かな憐れみと恵みを感謝いたしました。

名前を泉（いずみ）と名付けました。主人が、黙示録21・1～7節を読んでいた時、特に6節「わたしは渇く者には、いのちの水の泉から、価なしに飲ませる」とのみことばから、主はいのちの泉であるという新たな確信が与えられ、この子が渇いている者に、いのちの泉なる主を示すことができるようにとの思いを託してつけられました。

発作による危機

しかし、その喜びもつかの間で、私の体のバランスは崩れ始めました。またもや強い発作を起こし、今度は心臓衰弱に陥り、九月二六日に入院先で意識がなくなりました。医師は「やるだけのことはやりました。ご主人、諦めてください」と重苦しい口調で主人に伝えたそうです。主人

は大変ショックでした。しかし、その場で主イエスの前に「主よ、私はあなたのみこころに従いたいと思います。でも今あなたは、生まれて一ヶ月余りの乳飲み児を残して、家内をみもとに取り上げようとなさるのでしょうか、願えるならば、この乳飲み児のために、そして私のために、また家内のまわりの多くの人々のために、そしてあなたの御栄えのために、今絶望的な状態にある家内を癒してください」と祈り続けたそうです。

同じ日、私の容態を知った吉祥寺集会の兄弟姉妹は夜の集いの後も帰宅せず、徹夜の祈り会をもち、この小さき者のために熱心な祈りが捧げられたことを後から聞かされました。

もし、あなたがたのうちふたりが、どんな事でも、地上で心を一つにして祈るなら、天におられるわたしの父は、それをかなえてくださいます。ふたりでも三人でも、わたしの名において集まる所には、わたしもその中にいるからです。（マタイ 18・19、20）

信仰による祈りは、病む人を回復させます。主はその人を立たせてくださいます。（ヤコブ 5・15）

私はこのように励まされ、入院以来、約三週間後には退院するまでに回復されましたが、その時はもはや、薬害のこともあって、乳飲み児に母乳は飲ませられなくなっていました。しかし、主イエスは、私をまだこの地上に必要なものとして、残すべく癒してくださったことを悟り、主イエスにあって、この御方のために生きていきたいと新たな信仰が与えられました。

私の体の状態がほぼ安定した頃、医師より、以後子供を産むことは、私の体に危険であるとの警告を受けていましたし、またこのように弱い私でしたので、誰もが、今日の私達の家族を想像することは不可能だったでしょう。今は召天され、主のもとにいらっしゃる納富政子姉（当時七十六才位）が、心臓の弱い人によく効くと、たくさんの卵黄からたいへんな手間と隙をかけて作ってくださった薬を、持ってきては私を霊肉ともに力づけてくださいました当時のことを、今はとても懐かしく思い出します。

それからしばらくの間、泉の世話や家事は、母に手伝ってもらいましたので、おかげで泉も健やかに成長し、私も健康を取り戻し、安定した毎日を過しました。

長男と次男誕生

その後、一九七二年十一月二九日、男の子が誕生しました。名前は「神の国とその義とをまず第一に求めなさい」（マタイ6・33）の聖書のみことばと、「主はお一人です」とのメッセージから、一主（かずゆき）と名づけました。体重四、三五〇gと私たちにとっては、想像を越えたジャンボベビーでした。

そして一九七四年六月七日には、次男伸主（のぶゆき）が生まれました。漢和辞典によりますと、「伸」は屈する者を直からしむ、との意味があり、聖書により「主」は罪やもろもろのことによって歪められ、屈せられた人の魂を直からしむお方との教えから名づけました。

長男、次男の出産とその前後は、不思議なほど私の体は守られ、喘息によって、いろいろ試みられるということはありませんでしたが、間隔を短くして生まれた二人の子供の相手は、私にとって容易なことではありませんでした。そして主イエスは、三人目の妊娠を通して、私の心の中を調べられ、また試みられました。

信仰へのゆさぶり

この事実を知った時、自分の能力と肉体の限界を理由に「私にはできません」というより「私はやりたくない」という我がままな思いが、私を不信仰に陥れました。

次に経済的な面での不安がつのり、主は力のない私達を知りながら、どうしてこのような目に会わせられるのかと、常に消極的な態度で「どうして、どうしてなのですか」とつぶやき、主人とも、心の通わない平行線をたどる毎日が続きました。

初診の時にお会いした医師の態度が、三人など今時多すぎると言わんばかりに、あまりにも冷やかで、この病院に来たのが迷惑な様子でした。これが命を扱う医師の応対なのだろうかと腹立たしさを通り越して、やりきれない気持で、病院を出て来たことを思い出します。この時、特に医師という職業は、絶対者なる神を畏れ、命の尊厳さを知っているクリスチャンでなければならないと、つくづく感じました。

聖書の中に、九十九匹を残して、さまよえる一匹を探し求める羊飼いのたとえ話がありますが、この時、私は、どんなに小さな命さえも、価値あるものとして大切にお守りくださる、主イエスの深い御愛に目覚め、一時乱れていた不信仰を悔い改めて、すべてを委ねる信仰に、立たせてい

ただきました。「主よ、私は諸手を挙げて降参します。私の我がままを許してください。私は無力なものです。どうぞ力を与え、恵みをもって今後も私の心が動揺しないようお守りください」と祈りました。

現在四国の高松で、ご自分の家庭を開放して、聖書の集いを持たれている、宮田矢八郎、陽子兄姉が練馬区関町においでの頃、陽子姉が時おり我が家を尋ねてくださり、「多津子さん、頑張ってね。この子が大きくなったら、必ず主のために役立つ人間になるわよ。一時私達の手に託されている間、愛と責任をもって育てなくては」と体が疲れ、心のめいる私を力づけてくださいました。その後も、宮田兄姉には、物心両面でいかに支えられ、励ましをいただいたことでしょう。本当に主にある兄弟姉妹の多くの愛の支えは、弱く力のないものを、回復させ、歩ませてくださるものです。

住まいは二間という狭い家でしたが、吉祥寺集会の近くにあることが、何よりの支えでしたし、おかげで集会には欠かさず出席できました。また集会の近くにおいでになる兄弟姉妹方には、いつでも助けていただき、守られてきました。

魂の平安

次男が生まれて二年が過ぎた頃、四人目を懐妊したことを知りました。

この時は、すべてを主イエスにお委ねするという信仰が守られて、この事実を感謝をもって受け止めました。私の心のどこかで、女の子がもう一人欲しい、女の子であったらいいなあと思っていたからかも知れません。

しかし、また喘息との戦いが始まりました。妊娠三ヶ月目に入るか否かという頃から発作が続きました。通院ではおさまらず、入院しなければなりませんでした。でも使用できる薬は限られていましたから、発作はおさまるどころか、強くなる一方でした。入院当初五日間は、ほとんど眠れませんでした。体は衰弱し、胎児への酸素と栄養の供給が心配になってきました。

特に真夜中の苦しさは、単に肉体的なものだけではなく、何と表現したらよいか分かりませんが、「孤独」といったものとの戦いでした。道路での騒々しい声、タクシーの行きかう音、時おり通る救急車の音。夜が白々と明ける頃には、牛乳配達や、新聞配達、その他様々な音が、私の喉を痛く冷たく刺し、意識的に静まろうとする私の魂に、ビンビン響いてくるのです。苦しい毎日でした。

しかし、汗をかきかき努力しながら、全身の力を振り絞ってやっとできる、ひと呼吸の中に、イエスさまとの出会いを体験したのです。その出会いとは、細くなった気管で時間をかけて吸う酸素が、胎児の呼吸と成長のために役立っていると思う時、「恐れるな、わたしはあなたとともにいる」(イザヤ41・10)とおっしゃるイエスさまの臨在感が増して、イエスさまとの協同作業としてのひと呼吸、ひと呼吸であることに、何とも言えない深い感激と感謝が湧いてくるのでした。

この頃私は「主は、ご自身が試みを受けて苦しまれたので、試みられている者たちを、助けることがおできになるのです」(ヘブル2・18)のみことばに、たいへん力づけられ、また聖歌四九三番をよく心の中で歌っておりました。

わがとも主イエスは　われをみいだし
ひきよせ　たまいぬ　愛のいともて
みそばに　はべれば　何をか恐れん
今、主は、わがもの　われは主のもの

（聖歌　四九三）

主治医が産婦人科の医師と連絡を取りながら、胎児が薬の影響を強く受ける危険な時期は、一応脱出したとの判断のもとに、母体と胎児の維持のために、主人の承諾を得て、今まで私に一番よく効いていた、副腎皮質ホルモン剤、プレドニンを使い始めました。徐々に快方に向かい、呼吸も少しずつ楽になると、今までからだ全体に力を入れて、吸っていた酸素を、こんなにも楽に自由に吸うことできるとは、この時の私には奇跡のように思えてなりませんでした。

発作が楽になり、次第に肉体的、精神的にゆとりがでてきますと胎児に与える薬の影響が気になり出し、「私はもう少し忍耐と努力が必要だったのではないか」と自分をさいなむ思いに囚われました。しかし、私はぎりぎりまで頑張ったつもりです。イエスさまの力と支えをいただいて、私は頑張りました。ですから、私の心の奥深いところでは、安堵がありました。そして、次のみことばによって平安をいただきました。

ご自分によって神に近づく人々を、完全に救うことがおできになります。キリストはいつも生きていて、彼らのためにとりなしをしておられるからです。

（ヘブル　7・25）

ちょうどその頃、同じ病院に吉祥寺集会の安律子姉が、胃をわずらい入院しておられましたので、私は何かと頼りにさせていただきました。律子姉は、毎日私の病室をのぞいては、私を励ましてくださいましたので、一時病状の思わしくない時も、心強く思いました。

約三週間の入院生活を終えて、家に戻ると、入院中母の世話になっていました、幼ない三人の子供たちの顔が私を迎えてくれました。それは、母親に何が起こったのかも分からず、あどけない、平安そのものの顔でした。その様子を見て、私はほっとしました。母親不在のあいだ、イエスさまは、代理の母を助け、支えてくださり、目に見えないところで様々な危険からこの子供たちをお守りくださったのです。

車の免許

私も落ち着き、胎児も安定期に入った五ヶ月頃より、主人や母を初め、周囲の方々の助けと協力によって、私は車の教習所に通い始めました。それから二ヶ月後に運転の免許を修得することができました。

現在ワゴン車が与えられて、毎週日曜日には吉祥寺集会に集い、その他に婦人会や、近くの家庭集会や、また季節ごとにもたれている軽井沢でのバイブルキャンプなどに出席でき、時々は知人や友人もお乗せすることができますので、私達もたいへん満足しております。主イエスは、愛する魂をみもとに導くために、小さなことにおいても必要を満し、整えてくださいますので本当に感謝です。

次女誕生

お腹の中での波瀾万丈の十ヶ月間を、一生懸命に通り抜けてきたこの第四子は、一九七七年四月一三日無事この世に生まれ出ました。

看護婦さんより、「元気な女の子です」と伺って、「五体満足ですか、ありがとうございました」とお礼をのべるや否や、感謝の涙がとめどなくあふれ、しばらく人と顔を合わせることができないほどでした。名前は主美（ゆきみ）と名付けました。このみどりごも、主を愛し、主への賛美を絶やさず、そして主の美しさを伝える人間になって欲しいとの願いからつけられました。

五人目の子供

さて最後に、私たちの五人目の子供である、賛美（よしみ）をご紹介いたします。

賛美が生まれる頃は、吉祥寺より埼玉県の狭山に移り、三年を迎えていました。周囲にはクリスチャンの友達はなく、心細く感じておりましたが、時おり尋ねてくださる吉祥寺集会の兄弟姉妹方と楽しいお交わりを持っていました。

賛美を懐妊しました年は、天候が不安定な異常気象と呼ばれた年でした。七月、八月も、夏らしい暑さはまれで、冷害も少なくなかったようです。私のようなアレルギー体質の者には、苦手な年でした。

五人目の懐妊という予想外の出来事は、私をたいへん困惑させました。心の準備がまったくありませんでしたから、自分が立つ基盤を見失い、周囲のことだけが気になりだし、おどおどする

毎日が続きました。主人の思いつめた顔を想像し、しばらくはこの事実を告げることができませんでした。約一ヶ月後、日曜日の集会からの帰りに、車の中で話したところ私の案じていたとおり主人の顔に緊張が見られ、しばし沈黙が続きました。そして一言「そうだったのか」と。

続けて押し寄せてきたのが喘息の発作でした。六月にはやはり入院しなければならない状態になり、後ろ髪を引かれる思いで入院しました。主人や子供たちには、本当にすまない気持でいっぱいでした。胎児は三ヶ月に入る頃でしたので、担当の医師も慎重に治療にあたってくださいましたが、それも限界にさしかかった頃、ご自分の立場上、まず母親の病気を直すことが先決だとのご意見でした。

それまで喘息の発作だけだと思っていた私の両親は、なかなか発作のおさまらない私の容態を案じて、医師に問いただした時初めて、私のお腹に赤ちゃんがいることを知りました。

堕胎を迫られて

その後、両親ははっきりと堕胎をするよう勧めました。「あなたたちにはすでに四人の子供がおり、この子供たちを育てあげる義務と責任があります。そのためにあなた自身の体が健康でなければなりません。まず病気を直すことを考えて、出産は諦めなさい」という意見でした。親としてもっともなことですし、痛いほどその気持が分かりました。

この先喘息の発作が起きないとは限りませんし、それどころか発作を重ねるたびに、子供たちを悲しませ、苦労をかけてしまいます。一人ふえることでその負担が更に大きくなるのではない

だろうか。自分の体を維持し、どれだけ家事、育児に耐えられるか、母親としての責任をどれだけ果たすことができるか、私にはまったく自信がありませんでしたので非常に苦しみました。

五人目妊娠ということで、世間の批判は多少覚悟しておりました。今時五人の子持ちは珍しく、温たかい目で「おめでとう」はなく、白い目で「たいへんですね」が、私に返ってくる挨拶でした。

私の父は、苦しんでいる私には直接言えずに、主人に向って「君たちのしていることは非常識だ、五人目を生んだら、多津子の寿命は縮まる」などと何の根拠もない批難を浴びせました。母や姉もたびたび「あなたにはこれ以上無理だから諦めなさい。神さまだってそのことは分かってくれるのではないか」と責めるように言ってきます。

クリスチャンの友達の中にも、母体の健康回復をまず第一にという意見の方もいました。来る日も、来る日も悶々とした気持が続きました。

胎内の命

私はこのような心の中で、私なりの勝手な論理を組み立て、「私の胎内にいる命は、神から授かったものとして生むべきだと思う。けれども、これは私の完全主義をねらう、単なる人間的な意地であって、主イエスのみこころは別なところにあるのではないか。同じく神から授かった命であっても、私のようにいつまでも罪深い人間の域から、脱出できない者の救いのために、その贖いの代価として支払われるべき犠牲の命なのではないだろうか、この試練を通らなければ、私という高慢な人間は百パーセント砕かれないのではないか、『主は与え、主は取られる』とはこういうことなのだろうか」と、真剣にイエスさまに問いただしました。そして祈りました。「イエスさま、どうなのでしょうか、私にとっては本当につらいことです。私はあなたのみこころがどこにあるのかまだ分かりません。生むべきでしょうか、あるいは、私の健康回復と信仰のために、犠牲になるべき命なのでしょうか」私のもだえは続きました。

その頃、ドイツに帰国なさる直前で、たいへんお忙しい中をベック兄がお見舞いに来てくださいました。私の心の内をお話ししましたところ、「私達の罪からの贖いの代価は、イエスさまの十字架だけで十分です」と聞かされ、「ああ、私は何と傲慢なんだろう。イエスさまの救いの道は、私の生まれるずっと以前から備えられているのに、まだ自分の心のどこかで、自分の力で何かをしようとしていたのだ」と気づき、イエスさまの救いの恵みは、私たちに完全であり、十分であると心から確信を新たにしました。

神の栄誉と責任

またベック兄から「生まれてくる子供には、神さまの栄誉がかかっていますよ、頑張りなさい」と励まされ、同時に祈りを通してイエスさまから「生みなさい、私が責任をとります。あなたはただ、私を信じ、私に委ねなさい」と導きを受けましたので、私は「はい、そうします」と決心いたしました。主人もまた「見よ。子どもたちは主の賜物、胎の実は報酬である」(詩篇127・3)のみことばによる確信をもって、生むべきことの決意を医師や、両親に伝えました。

両親は、私たちの決意の堅いことを知って諦めはしましたが、父は主人に「勘当する」と言い、

しばらく絶交状態が続きました。しかしその後、「神の愛には負けたよ」とその愛と恵みの偉大さを分かってくれるようになりました。

入院生活はもうしばらく続きました。退院してからも一進一退の状態で、毎日の通院が私の日課でした。ひどい時は即、入院で、酸素吸入や点滴を必要としました。私は二度、三度とそのような状態が続く自分の姿を見つめ、残念でなりませんでした。私たちは両親に、「信仰によってやっていきます」と断言しましたが、現実的には両親の協力も必要となり、特に七十才を過ぎた母にはたいへんなことでしたが、家事と育児の世話をしてもらわなければなりませんでした。しばしば、自分の無力な状態が嘆かわしく、いらだたしくさえ思いました。

「イエスさま、これでよいのでしょうか」と何度もつぶやきました。産婦人科の先生は、「こんな状態でお産ができるのかね」といぶかしげにおっしゃいました。主人も日中は仕事に追われ、帰宅しても心安まるどころか、幼ない子供たちの世話をしなければならず、次第に心身ともに疲れてきました。「イエスさま、こんな状態がいつまで続くのでしょうか。主人も私もたいへん疲れました」と私はまたつぶやいてしまいました。

主の前に静まれ

このようにどうしようもなく、まったく疲れきっている時、主は私の魂に呼びかけられました。

「やめよ。わたしこそ神であることを知れ」
（詩篇　46・10）

主の前に静まり、耐え忍んで主を待て。
（詩篇　37・7）

神はわれらの避け所、また力。苦しむ時、そこにある助け。
（詩篇　46・1）

彼らが苦しむときには、いつも主も苦しみ、ご自身の使いが彼らを救った。その愛とあわれみによって主は彼らを贖い、昔からずっと、彼らを背負い、抱いて来られた。
（イザヤ　63・9）

無力な状態をよくご存じのイエスさまは、肉体的には発作で苦しむ私の中に、霊の静けさを与えてくださり、「主だけが神であること」（申命記4・35）を悟らせ、ただ主の前にそのままの姿でひれ伏すことによって得られる、真の慰めと平安を体験的に教えてくださいました。

私が苦しみの中を歩いても、あなたは私を生かしてくださいます。
（詩篇　138・7）

このみことばに支えられ、励まされて、この世に生を受け、こんなに弱い私であっても二人といない私を、この世に必要なものとして、イエスさまのために生かしてくださる。であるなら、これからは後を振り返らず、ただ前を向いて主と共に歩んでいくという信仰で進みました。

キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標を目ざして一心に走っているのです。
（ピリピ　3・14）

三女誕生

いよいよ一二月一六日の出産予定日が近づいてきました。しかしなかなか生まれず、家族の心をハラハラさせましたが、十三日遅れて、一二月二九日主の完全なお守りと祝福のうちに、無事女の子が誕生しました。私たち家族の心は踊りました。両親も子供たちと一緒に我が家で待機していてくれました。

主人が電話で、女の赤ちゃん誕生の知らせを告げると、子供たちは飛び上って喜んだそうです。子供たちの「V」サインが見えるようでした。

全地よ。主に向って喜びの声をあげよ。
喜びをもって、主に仕えよ。
喜び歌いつつみ前に来たれ。
知れ。主こそ神。
主が、私たちを造られた。
私たちは主のもの、主の民、
その牧場の羊である。
感謝しつつ、主の門に、
賛美しつつ、その大庭に、はいれ。
主に感謝し、御名をほめたたえよ。
主はいつくしみ深く、
その恵みはとこしえまで、
その真実は代々に至る。

（詩篇　100）

これは、私たちの主イエスへの賛美と証(あか)しのみことばです。

賛美（よしみ）という名前の中にも私たちは、この子供が主への賛美を絶やすことがないようにとの思いをこめてつけました。

結局、結婚後十年の間に五人の子供たちが与えられました。つらくもあり、悲しくもあり、また苦しくもあり、しかし、感謝と喜びの十年間、この間に子供たちは、すくすくと素直に育ってくれています。長女の泉は、弟たち妹たちの面倒をよく見てくれます。子供たちは、私の体の弱さをよく知っていて、食前の祈りには欠かさず私の健康のために祈ってくれます。子供たちもまた、イエスさまの愛と力を少しずつ体験してきています。

これから主人と私のなすべきことは、この五人の子供たち一人一人をイエスさまのもとに完全に導くことであり、私たち二人はそのためのかけ橋でありたいと願っています。そして、私たち二人が祈りをこめて名づけた一人一人が、主のご栄光を現わすものとなり得ますように、「子供たちよ、主の前にはばたけ」という祈りは、いつまでも絶えません。

主様　私は知りませんでした。あなた様こそ神の御子であり、
全人類を贖うために救い主として、この世に来られたということを。
主様　私は知りませんでした。あのむごい十字架上での御死は、
罪にけがれた私のようなものの身代りであられたということを。
主様　私は知りませんでした。あの流された聖なる御血潮は、
罪にけがれた私のようなものを聖めるために、ぜひとも必要であったということを。
主様　私は知りませんでした。あの十字架の御死は罪深い私のようなものが、
愛なる神様のみもとに立ち返るための唯一の方法であったということを。
主様　私は知りませんでした。ただ御愛のゆえに価値なき私のようなもののために、
父なる神様に忠実に御自身を低くして、十字架の死にまで従われたということを。
主様　罪人の私を赦してくださいませ。何も知らずに生きていた私です。
被造物の分も弁えず、御目的も御計画もまったくわからずに、
長い年月罪の中をさまよい歩いていた私にお目をとめられ、
新しい命を得て生きなさいと、妹の死を通してやさしく語りかけられました。
今、私は父なる神様のみもとに帰ります。罪人の私を赦してくださいませ。

「わたし、このわたしは、わたし自身のために、あなたのそむきの罪をぬぐい去り、もうあなたの罪を思い出さない」（イザヤ　43・25）

国籍は天にあり

森田美枝子

長野県に生る。戸隠尋常小を経て長野県立須坂高女卒業。夫君義衛さんは一九八二年十月に召天。現在二男三女と十一人の孫あり、趣味は読書、旅行、編物。



▲ウィーンにて主人とともに。



▼子供と孫とに囲まれて。'82年1月自宅にて。

ほむべきかなわが主。全宇宙の主権者であられる主の主。王の王を。
私は、生きる日の限り、ほめたたえ。あがめ、そしてよろこびます。
御名に御栄光と、賛美が限りなくつづきますように永遠に。永遠に。

私は、人生の下り坂をさまざまな疑問を抱いてトボトボと歩んでおりました時に、最愛の妹の死を通して聖書の神様に出会いました。そして聖書の世界に生きる、唯一の真の神様を信じて生きる人びとのすばらしさを、また人知では到底測り知ることのできない神様の大いなる御愛にふれることができました。

神様は私のようなものに御目をとめられ、憐れんでくださり、弱り切った心身の痛みをいやし生きる望みを与えてくださいました。今はよろこびの源であり望みの主である神様の満たしにあずかり、人が見ても何の見栄えも変りばえもしないようなものですが、主様に愛されていると思うだけでよろこびに溢れます。主様のすばらしさをまだ御存知でない方がたに、どのような方法をもってこの御恵みをお分けしたらよろしいのか、その術も知らない、自分でもはがゆく思うほど無力なものではございますが、このたび主様がどのようなことをしてくださったかをお証しする機会が与えられました。この御恵みを心から感謝して、どのようにして主様に導びかれたか、その過程を書きとめさせていただきます。

花の小さきを憂えず

私は信州の山奥の先祖代々神社に仕えるカビのはえそうな古い家柄に三女として一九一五年に

生れました。父は宮司をしておりました。もの心のつく頃から「神ながらの道」を教えられ、祀ってある神々を恐れ礼拝し、さまざまな行事の古い習慣の中にそれをよしとして育てられました。父はやさしい人でしたが、躾はきびしく、小さい時から何事にも我慢することを教えられ、また年令に従って人には寛大に、自分にはきびしく努力と忍耐、忍という字は刃の下に心、ただじっと耐えることである、と訓されました。母は、自分のことはどうでもいいから人によくしてあげなさい、後悔するようなことをしないようにと、また旧制の女学校では「花の小さきを憂えず、汝が全力をつくせ」と教えられ、そのような環境の中に若い日々を過しました。今考えますと、結婚生活を送る中にも、そのような言葉がしみついていたように思います。旧制の女学校を卒業して間もなく、一まわり年のはなれた主人と結婚いたしました。大家族の心やさしい人びとにかこまれて過した実家の日々とちがって、留守勝ちの主人との生活は、ほんとうに泣きだしたいくらい淋しいものでございました。役人でしたから転勤も多く、官舎を出たり入ったり、また戦争もありましたから疎開もあり、今の住居に落ちつきますまで、お引越しは二十一回目でございます（お引越しはもうたくさんですが、この次は天の御国に用意された父なる神様の家にお引越しができるので、今から楽しみにしております）。主人はほんとうに働き者で、世のために人のために、家族のため親戚のために、本当に一生懸命に働き、ほとんど仕事だけの人で、帰りはいつも遅く、たまに早い時はお客様を幾人か連れて帰るか、身体の調子のわるい時で、心の安まる時はございませんでした。子供が大勢いても、どんなに可愛くても、また人びとの出入りも多く忙しさにまぎれる日々でありましても、心の中はなぜか淋しいものでございました。主人は留守が多

いゆえか、不思議に思うほど子供達を可愛がり、子供達は主人に叱られた記憶はないと思います。父親なのだから甘やかすだけでなくたまには叱ってほしいと私はいつも思いましたが、子供達を可愛がって大切にしてくれますのはとてもうれしく有難く、私のたった一つの救いでした。子供達のことならどんなことでも労をいといませんでした。主人は常に血圧が高いとか心臓が苦しいとか、また肝臓だ胃炎だ、風邪をひけば肺炎になるかもしれない、子供達が大きくなるまで生きられないといって、何種類かの薬を飲み、朝晩、いつも変らず多くの薬をのんでおりました。私は思い煩いばかりしており、子供達を残して主人にもしものことがあったらと思いますと死の恐怖におびえて、本当の神様がいらっしゃるなら、主人は何をしてもかまいません、また私の残る命も丈夫なところがあったら、僭越ですけれど主人にみなあげます、ただ子供達のために生かしておいてください、と叫びつづけました。私は一生懸命に与えられたことを、自分を捨てて、まわりの人達のために人のためにしていればいいのだと思っておりましたが、心の中は不安、不平、不満でいっぱいでした。結婚生活とはこんなものなのかしら、こんなことをして一生終るのかしら、人間とは一体何なのかしら、生れて生きて死んでゆく、それだけのものなら他の生物と同じではないか、しかしそんなものであってはならないようにも思えました。私は争うのも叱るのも、また叱られるのも嫌いな本当に意気地のない人間でしたから、何か確かなものにたよりたい気持でいっぱいでした。そんな時、故郷の美しい星空を想い出し、あの数えきれないほどのお星さまの中に平和な愛に満ちた世界があるのではないかなどと考え、すーっと翔んで行ってしまいたい思いにかられたことも幾度かございました。そのような生活の中でただ一人の同情者であり、私

も子供同様に愛していた八歳年下の妹がおりました。山国育ちのまったく世間知らずの私達は、二人合わせても一人前にもならない愚かなものでしたが、お互いに助けあってすべてにおいて誠実に一生懸命に生きたいと願っておりました。そしてどこに行くにも一緒でしたからお神酒徳利などと笑われていたものでございます。子供に恵まれなかった妹は、私が忙しくって可愛そうといっては、子供達をそれは可愛がってよく面倒をみてくれ、家事もよく手伝い、口ぐせのように次男をほしがり私ども夫婦を困らせましたが、私にとりましては両親亡きあとの心の支えでございました。

妹の死と聖書との出逢い

今想い出しても涙があふれて仕方がありませんが、その妹が七年前に突然死にました。余りのことに何がどうなったのかもわからず信じなさいといわれても信じることのできない驚天動地の出来事でございました。これからという時でしたので目の前が真暗になり、絶望のどん底につきおとされた思いでした。生きる望みをまったく失ってしまった私は、なぜ？　どうしてこんなことが？　のくりかえしでした。何の思考力もなくなってしまい、ぼんやりした頭の中で、妹はどこへ行ってしまったのかしら、死が私達を遠く遠く隔ててしまったのだ、この地上のどこを探してもいない、妹に会うには私も死ぬよりないと思いこみました。いつも一緒だった妹は私がいないからきっと淋しがっていると思うと可哀想で可哀想でなりませんでした。食事をとる力

もなく、ベッドに横になりこのまま妹の所に行きたいと思いました。そうだわ、私はもう死んでもいいのだわ。五人の子供達はそれぞれ愛する者を得て結婚し、家庭を持ち、独立することができましたし、主人は自分の考えがあると思いますが、相変らず仕事仕事で留守が多く、夜、食事を一緒にすることもめったにない生活でしたから、私も食事にさえ帰って来てくれればいいくらいに思うようになっていましたので、この世で心残りになるものは何一つありませんでした。地の底にでも引きずりこまれるような淋しさは、日がたつとともに一そう堪えがたく、空ろになった心は悲しみでいっぱいになり、涙はとめどなく流れておりました。

そのような中でふと以前によみました古人の歌が心にうかんでまいりました。

「泣く涙　雨とふらなん涙川　水まさりなば帰り来るかに」

愛するものを失った悲しみは、古人も今日に生きるものも変らない悲しみでございます。残されるものの悲しみは、妹一人の死で充分すぎました。私は放心状態の中で皆私をおいて死なないでください、私は今妹の所に行きたいのです、と叫んでおりました。そのような状態で生活していたある日のこと、長女道子がだまって聖書を渡してくれました。この人がどうしてクリスチャンになったのか私どもの知恵では理解することはできませんでしたが、今では全能の神様の奇しき御業と心の底から感謝しております。

身も心も弱りはてておりました私には聖書はそれはそれは重いものでございました。読む気力もなくパラパラとページをめくっておりました時に、道子の信じている聖書の神様とはどのようなお方なのか、何となく知る必要を感じました。そして創世記のはじめに目がとまりました。

初めに、神が天と地を創造した。　（創世記　1・1）

聖書の神様は万物の創造の神様であること、世界は偶然に存在しているのではなく、創造主なる御方がおられたのだ。死ぬことばかりしか考えていなかった私ははっといたしました。このお方によってすべてのものが造られたのなら、私の命も神様によって与えられ生かされているとしたら、自分のものではない。生も死も支配しておられる絶対者の御存在を覚えました。漠然としてはおりましたが、小さい時から折あるごとに叫び求めておりました神様は、聖書にある創造の神様であることがはっきりわかってきました。そのお方が妹をとり去られたのだ、それならばあきらめるよりないと思えてきました。長い時間をかけて少しずつ読んでいるうちに、神様は私達一人一人を目的をもって造られ、親が子供を愛する以上の愛をもって愛していて下さる愛の神様であることがわかってきました。そして私のようなものを愛していてくださる、そう思ったら急に心の中の重く暗いものが、少しずつなくなるとともに、私は死んではいけないのだ、命は自分一人のものではないのだからどんなに悲しくても、淋しくても、辛くても与えられている命の日の限り生きなくてはと思うようになりました。でも聖書はほとんどわかりませんでした。ただ私を愛していてくださる神様、今もなお生きて私達のために働いておられる神様がいらっしゃることだけはわかりましたので、このお方の御愛に生きようと思うようになりましたら、心の中に何かあたたかい灯がともったように感じました。

死の悲しみはたびたび見てまいりました。人を絶望におとし入れる死。何ゆえにそのようなこ

とが起きるのか、死んだらどこに行ってしまうのか、また生れながらに病気や障害をもって生れてくる人、働いても働いても貧しくしか生きられない不遇の人々、事故、災害……世には何といやなことが多いことかと時々考えさせられる問題でした。小学校四年生の時に姉が十七歳で亡くなりました。出棺の時に行列の中からふり返って見ましたら、母が広い玄関に一人ションボリと一まわりも二まわりも小さくなったような姿で両手で顔をおおって泣いていた姿が子供心にも余りにも痛々しく感じ、今でもはっきりと覚えております。その頃から死ということが恐ろしく、今に父も母も私をおいて死んでいってしまうと思っただけで悲しくなり、夜泣きながらお祈りしていたことを想い出します。

私達の一番恐れる誰でもがさけて通ることのできない死の問題、またさまざまな問題の解決は、私達を造られた神様のみことばである聖書の中にあるのではないかと思い読みはじめましたが、何もわからず、もっといろいろと神様のことが知りたいと思うようになりました。少しずつですが元気を取りもどしてまいりましたので、道子も時々集会に誘ってくれるようになりました。知らない方ばかりの中に出て行くのは気が重うございました。集会の責任者のベックさんご夫妻には以前にお目にかかってはおりました。私は忙しい生活の中で愚痴ばかり言っておりましたので、道子がドイツ人ですばらしい御夫妻がいらっしゃって、大勢の人達が出入りしている中でいつもニコニコしてお世話しておられるから紹介して上げる、といって連れて行ってくれました。本当に想像以上のすばらしい御夫妻で、私もできることならあの御夫妻のように生きたいと思いました。そして何か私とは違ったものをもっていらっしゃるということを感じました。ある日重い足

取りで集会にうかがいましたら、ベックさんご夫妻をはじめ、主にある方がたがよろこんで私を迎え、仲間に入れてくださり、そのやさしさに心うたれ、また慰められはげまされました。この何が善か悪か判断の基準も失ってしまい、すべて自己中心の混乱の世にあって、主にある方がたのすばらしさは、今時このような世界が存在するのかと不思議に思うほどでございました。そして集会に行くのがどこに行くより楽しみになりました。この不思議な世界のことがだんだんわかってきました。それは一人一人が神様のみことばである聖書に土台をおいていること、心と思いを一つにしてみことばを学び、交わり、祈り、み心に従って歩むことができるように、お互いに愛をもってはげましあって生きる神の子供とされていること。主様は、死のみ頼っておりました罪深い私を、滅びの穴から救い出してくださったばかりでなく、妹の代りに主にある多くの心やさしい兄弟姉妹を与えてくださり、可愛いらしい孫のような人達まで与えてくださり、週に二回、三回とお会いでき、肉の兄弟姉妹以上の親しい交わりの中において祝福してくださいました。私の今日ございますのは主様、そして集会の皆さまの御愛のゆえとただ感謝をしております。聖書のみことばは余りわかりませんでしたが、神様のみことばであることを全面的に信じることができました。親が生れてきた子供をよい人間になってほしいと願いをこめて一生懸命に訓育するように、神様は造られた人間がいかに生きるべきかの道標（みちしるべ）として聖書を与えられたこと、また聖書はすべてのものの源であり、すべての解決があり、知恵と知識にみちみちており、本の中の本であることを学びました。そして神様のみことばである聖書に従って歩みたいと思うようになりましたので、他のことは何もわからないままに昭和五十年四月イースターの記念すべき日にバプテ

スマにあずかりました。新しい創造、何とすばらしい神様のみ業でしょう。

だれでもキリストのうちにあるなら、その人は新しく造られた者です。古いものは過ぎ去って、見よ、すべてが新しくなりました。

（Ⅱコリント　5・17）

結婚してからの四十年間は、あたかもイスラエルの民の荒野の訓練そのものでございました。高慢で強情な私が砕かれるには格好な時と場所でした。そのことはすべてにおいて無知以外の何ものでもない私には是非とも必要なことでございました。今では、すべて私のために主様が備えてくださった祝福と、心から感謝することのできるものに私をつくりかえてくださいました。ずっと聖書を学ばせていただき、何の考えもなく生きてきた今までの六十年間、大損をしたように思えますほど人生にとって一番大切なことをたくさん学ばせていただきました。今まで自分はあのようなことを言ったり、したりしないからまだましな人間だ、などと高慢にも自分を義として生きておりましたことは、聖書の光に照らし出されますと、自分は本当に自分のこともわからないほどみじめで盲目で神様の前に裸同然のものであり、愛の神様の御憐れみにすがって救われなくてはならない罪人以外の何者でもないことを思いしらされました。そして人間は罪を犯したから罪人なのではなく、罪をもって生れてきているから条件さえそろえば、罪を犯すものであること、また神様の前にすべての人は罪人であるので、神様の前に人間は平等であるということを知りました。人間の善行が天国に行ける条件にはならないことは本当に驚くべきことでございました。主イエス様を神の御子であると信じる信仰によって義とされるということを学びました。

あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるのではありません。だれも誇ることのないためです。私たちは神の作品であって、良い行ないをするためにキリスト・イエスにあって造られたのです。神は、私たちが良い行ないに歩むように、その良い行ないをもあらかじめ備えてくださったのです。

（エペソ　2・8～10）

わたしの名で呼ばれるすべての者は、わたしの栄光のために、わたしがこれを創造し、これを形造り、これを造った。

（イザヤ　43・7）

神様は私達を愛する対象としてすばらしいものに創造してくださいました。それなのに罪を犯すことしかしらないような私達の罪を贖うために御子をくださり、御子は私達にいのちをくださいました。そして三日目に復活なさったことによって私達を死の恐怖と罪の奴隷から解放し、永遠のいのちにあずかるものとしてくださいました。愛の極致の十字架の御死を思うだけで涙があふれます。でも主様はわたしのために泣くな、自分の罪のために泣きなさいと仰せられます。主様の御愛のゆえに罪赦された罪人として御前に立つことのできる幸せなものとしてくださいました。私達はよく霊魂は不滅という言葉を耳にします。このことは何を根拠としていわれているのかよくわかりませんが、聖書の中には罪を犯した魂は必ず肉体の死後に神の裁きを受けるとあります。ですから人間の死は無になることなのではなく、永遠の世界への出発点なのでございます。

永遠に天国と地獄のどちらかで生きつづけるかが問題であるし、そのことを自分自身の問題として真剣に考えなくてはならないと思います。

罪から来る報酬は死です。しかし神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです。

（ローマ　6・23）

人間には一度死ぬことと死後にさばきを受けることが定まっている。（ヘブル　9・27）

聖書は厳然と宣言しております。長い間何かを探し求めてさまよっておりました私は、妹の死を通して生けるまことの神様に出会い、小さい時から特に疑問に思っておりました死の問題の解決を教えていただきました。みことばの中に、すべてのことが、神から発し、神によって成り、神に至るからです、とございます。人間は、おるべき所におり、帰るべき所に帰る、という摂理を学ぶことができました。私の地上での旅路が終りました時、遺された者達が、私がよろこんで主イエス様のみもとに帰って行ったと思い、そのことが確信できましたらどんなに慰められることでしょう。このことが、私の何よりのうれしいことでございます。妹の時のような悲しみは母親として子供達に味わってほしくはありません。今になって思いますことは、神様は妹を一番いい時に、一番いい方法で召してくださったのだ、子供のいない妹は年の順とはいえ私が先に逝くようなことがあったらどんなに淋しい思いをしたことでしょう、このようなこまかいことにまで御配慮くださる主様の深い御愛の御業に胸がいっぱいになり、妹の死も感謝に変りました。死はさけて通ることのできない誰にでものぞむ最も民主的なことがらであると学んだことがありますが、どんな名医もまたどんなに高価な薬も、また科学の力も死に対してはまったく無力で人の命を救うことはできないことを痛感いたします。またどんなに健康に自信のある人も、名誉権力地位能力財宝善行のすべてを備え、人にうらやましがられるような身分の人でも、死をまぬがれることはできないことは本当に悲しく思います。

神に会う備え

あなたはあなたの神に会う備えをせよ

（アモス　4・12）

聖書はこのように私達に語りかけます。みことばを信じ、みことばに従って平安の中に感謝とよろこびをもって心静かに備えをされ、私たちがお姉様のように思い敬愛しておりました吉祥寺集会の愛する松田義子姉妹が過日天に召されました。遺言状が召天式の当日読まれ、深い感動をおぼえましたので一部を御紹介します。

「前夜式について。集会の兄弟方の指導に従って祈りと賛美を中心とした秩序ある集まりにしてください。お通夜については集会の規定に従って行ってください」

「葬儀について。霊は肉体を離れてすでに天国に安らいでおります。遺体を拝んだり焼香する必要はありません。私の信仰を認めてください。葬儀はイエス・キリストの栄光が証しされる場としてください。讃美歌は私の愛唱する聖歌を加えてください。聖歌　ヨルダンのかなたに

六四二番。やがて天にて　六三八番」

「遺骨は集会の納骨堂高尾に安置してください。葬儀からおよそ一ヵ月後に行ってください。分骨はできたら鳥取にしてください。私はぜひにとは申しません。遺族の意にまかせます。以上私の意を受け入れてくださるようお願いいたします。

昭和五十二年四月九日記す　　松田義子　七十二歳

白衣も自分で縫っております。聖歌三九六番「十字架のかげに」を賛美しつつ」

このように主様と正しい関係に立つことのできる人は本当に誰よりも幸いな人と思います。松田姉妹は常に主様と共に歩み、どんな時にも何があっても主様にすべてをゆだね、もの静かに過されており、私などはぜひとも学ばなければならない多くの賜物をお持ちになっておられました。

お苦しみもなく平安の中に、主様と、先に召された御主人様の待っておられる天の御国にお帰りになられたことを御遺族の方からうかがいました。クリスチャンの大きな祝福は墓を越えて神の未来の栄光にまで広がっている偉大な希望である、と何かの本で読みましたが、同感でございます。

私たちの国籍は天にあります。そこから主イエス・キリストが救い主としておいでになるのを、私たちは待ち望んでいます。

（ピリピ　3・20）

聖書を今日まで七年間私は学んでまいりました。本の好きな私は今まで本当にいろいろな本を

乱読してきましたが、他の本は色あせて見えるようになり、聖書を離れては生きられないような今の状態です。みことばの真実さ、救いの重要性、またみことば通りに動いている世界。聖書も聖書の神様も知らない善良な勤勉で、また信仰心の厚いこの国の人々を主様が憐れんでくださり、そのすべてを生けるまことの神様にむける日がきましたらどんなにすばらしいことでしょう。私はこのことのために多くの兄弟姉妹方と共に熱心に夜となく昼となくお祈り申しあげています。主様を知らない時の私の愚かさは、多くの神々を信じ、五人もの子供がおりましたので、良縁が得られると聞けば遠く出雲大社まで出かけ、お金に不自由しないと聞けば鎌倉の銭洗い弁天、交通安全、家内安全は成田山、またお産の神様、勉強の神様、とお友達と一緒に、京都、奈良、鎌倉の神社仏閣を歩きまわって、国家安泰、平安長寿を祈り、道ばたの石ころまで拝んでいたものでございます。そのように創造の神様をまったく知らず、まことの神ならぬものをよりどころとしていたことは、無知ゆえにしていたことで、悔い改めてまことの神様にたち返る時に赦してくださるお約束ですから感謝でございます。主様を私の救い主と信じる信仰によって、私の数えきれないほどの罪の問題が解決され、主様との平和をもつことができ、主様をただ一つのよろこびとして生きる日々は、自分が、まわりがどんな状態でありましょうとも、この世では得ることのできない満足と平安で満たされます。今までは何に対しても当り前と思っておりました私のようなものが、すべてにおいて主様に感謝し、祈ることを聖書を通して教えられ、そのようなものに造りかえていただきました。幼子が親を信頼し甘えて呼ぶように、私達もどんな時にも主様を見あげて全き信頼をもって天のお父様とお呼びすることのできる幸いはただ感謝だけでござ

います。私は小さい時からイエス様のお話をきいてはおりましたが、この年になるまで実在のお方と思ったこともなく、西洋の美しいおとぎばなしと思っておりました。なぜか今もよくわかりませんが、父方の伯父の家がクリスチャンホームでした。毎年夏になりますと、いとこ達が勉強に来て、よくイエス様のお話をしてくれたり賛美歌を聞かせてくれました。その時の美しい歌詞と調べは心に残っておりました。女学校の時にバイブルクラスと、賛美歌のコーラスに誘われ一度行ってみましたが、雰囲気がとてもよかったのでつづけて行きたいと思いました。そこで父に相談しましたら、キリストはユダヤ人である、私はユダヤ人が大嫌いだと申しました。私はびっくりしてなぜですかと聞きましたら、救い主として来られたキリストを十字架につけて殺し、それからも世界の富をにぎり、亡国の民として世界中に住んで嫌われている恐ろしい民族である、と話してくれましたので父の言葉に従いそれきりになりました。でも私の心は折にふれユダヤ人がユダヤ人のキリストを殺したというのはどういうことなのか、また亡国の民ユダヤ人のことが気になっていました。でも主様は不思議な方法で無知な私を導いてくださり背後にあって働かれ、聖書を通してこの疑問に答えてくださいました。理解できないことはまだまだたくさんございますが、旧約聖書において罪深い私達人間のために救い主を送ると約束され、新約聖書においてその救い主が来られ、イエス・キリストが救い主であるとのみことばが成就されたのを知ることができました。

聖書は歴史の先取りといわれております。そして世界は今みことば通りに動いているという事実は本当に恐るべきことと思います。

主を恐れることは知識の初めである。愚かな者は知恵と訓戒をさげすむ。わが子よ。あなたの父の訓戒に聞き従え、あなたの母の教えを捨ててはならない。それらは、あなたの頭の麗わしい花輪、あなたの首飾りである。

（箴言　1・7～9）

主なる神様を恐れ、戒めに従って歩みたいと思っております。詩篇の中に、あなたのみことばはわが足の灯、わが道の光、とございます。本当にその通りです。主様は私のようなものを豊かに顧みてくださり、主人は八十歳に手の届く年令ですのに御恵みによって生かしていてくださり、今も体の調子が悪いといいながらもほとんど毎日のように出かけることができます。五人の子供達もそれぞれすばらしい配偶者が与えられ、十一人の孫達に恵まれ代る代る訪ずれてくれます。

孫達の一人一人、それはそれは可愛らしくやさしく老人の私達を慰めてくれています。何一つ恵みをいただくのに値しないものですのに、主様はもったいないほどに祝福してくださいます。過日の婦人会で母親の子供を育てる上での一番大切なことは子供を小さい時からイエス様のみもとに連れて行くことであると学びました。大切な家庭はしっかりした土台の上にたてること、世のすべてのものは移り変っても、永遠に変ることのない神様のみことばである聖書に土台をおいて子供達を訓育できたら、今社会問題となっている多くの青少年の問題のほとんどの解決に大きな力となると思います。私の最も愛する身近の者達は主様との本当の出会いはまだですが、主は不思議な方法をもって一人一人の心をとらえてくださいますから感謝です。主様はこのようにお約束していてくださいます。

主イエスを信じなさい。そうすればあなたもあなたの家族も救われます。(使徒　16・31)

願わくば、一日も早く主様に出会い、新しい創造という奇しいみ業がなされ、この罪とけがれの満ちた世の中から主様の御支配の中にうつされ、新しい希望とよろこびのある人生に変えられ、平安が与えられ、心と思いを一つにして天の御国をめざして旅するものとなることができましたならどんなに幸いなことでございましょう。みことばを唯一の希望としてすべてをおゆだねして、数えることのできないほどの多くの恵みのお約束を感謝し、私の信仰を増し加えてくださいますように祈りつつ、愛する者達の救いの日を待ち望んでおります。聖書の中にこのように記されている個所がございます。

神は言われます。「わたしは、恵みの時にあなたに答え、救いの日にあなたを助けた」
確かに、今は恵みの時、今は救いの日です。
(Ⅱコリント　6・2)

わたしを信じる者は死んでも生きるのです

すべての人が救われて真理そのものであられる主イエス様を知るようになることが、一人として滅びることをお望みにならない主様の御計画であり御目的であられます。今日も一人一人に新しいいのちを得て生きなさい、あなたはどうして死んでよかろうか、私は何人の死をも喜ばない、とただ御愛のゆえに語りかけておられます。

イエスは言われた。「わたしは、よみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は、死

んでも生きるのです。また、生きていてわたしを信じる者は、決して死ぬことがありません。このことを信じますか」
(ヨハネ　11・25、26)

「ハイ。主様信じます」と、私は素直に信じましたから、私のような罪にまみれて生きていたものをも滅びの穴から救い出してくださり、永遠のいのちにあずかるものとしてくださいました。主様こそ私の救い主であり、命の主、望みの主、そして助け主また慰め主であり、すべての必要を知っておられ、共に歩んでくださるお方であることを日々の体験の中におぼえて、ただ感謝するだけでございます。

愛する者よ。あなたが、たましいに幸いを得ているようにすべての点でも幸いを得、また健康である様に祈ります。
(Ⅲヨハネ　2)

主様は私達がすべてに恵まれて幸せであることを望んでおられます。でもこの世は本当の満足と平安を与えることはできません。どんなことでも恵みとして感謝できる、価値観の違った世界に生きる時に、真に満たされた人生を歩むことができると思います。この世は悲しみ、苦しみ、悩み、そして争いに満ちておりますが、私達の重荷を日毎に負われる主様は、世の終りまで、私達と共にいてくださるとお約束しておられますことは、何というよろこびであり慰めでしょう。私は年をとり自分の力でできることはほとんどございませんが、主様は常に私を力ある御手の中に守り、支えてくださり、不思議な力を与えていてくださいますので、すべてをおまかせして心

静かに過させていただいておりますことは本当に感謝でございます。よみがえられたキリストを今日信じる信仰と確信は、あなたの恐れを希望に、あなたの失望を喜びに変えることができます。この喜びは信仰だけでうけとることができるものです。

わたしの父の家には、住まいがたくさんあります。もしなかったら、あなたがたに言っていたでしょう。あなたがたのために、わたしは場所を備えに行くのです。わたしが行って、あなたがたの場所を備えたら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしのいる所に、あなたがたをもおらせるためです。

（ヨハネ 14・2、3）

永遠の住居を用意して待っていてくださる、はかり知ることのできない御愛の主様との平和をもつすばらしさ、また死の彼方まで希望をもつことのできる幸せを思う時、私はよろこびにあふれます。そして愛する主様、先に召された愛する兄弟、姉妹にお会いすることのできる日、そしてその天の御国を思うだけで胸がおどります。私のようなものに御目をとめられ、神の子供としてくださり、数えきれないほどの特権と祝福を備えていてくださる主様です。当然私にしてくださったと同じようにすべての人に御目をとめられ、お一人お一人の心にふれ、救いに導いてくださることを確信しております。主様に愛されているものとしてよろこびをもって、主様のために、人々のために、私に残された命の日数はわかりませんが、生きる日の限り、主様のすばらしさを御紹介したいと思います。私のまずしい筆舌ではいい表わすことはできませんが、救いの御計画のよろこびのおとずれを一人でも多くの方々にお伝えしたい気持でいっぱいです。すべての人が

救われて、心と思いを一つにして、私達の国籍は天にありと告白する日が一日も早くまいりますよう心からお祈りし、主様の御再臨の日を待ち望みつつ、すべてに感謝して、私の大好きな、そして今の気持そのままのみことばを引用させていただきます。

あなたがわたしの心にお与えになった喜びは、穀物と、ぶどう酒の豊かな時の喜びにまさるものでした。わたしは安らかに伏し、また眠ります。主よ、わたしを安らかにおらせてくださるのは、ただあなただけです。

（詩篇 4・7、8）

このつたない証しを書きながら、みことばを改めて拝読し、私のような地のちり、灰に過ぎない私をも、また失敗ばかりくりかえし、うんざりするようなものをも、一つ一つ行き届いた御配慮の中に終始お守りくださり、主様の御愛の深さを、一そう身近に感じ幾度涙したことでございましょう。言葉ではいいつくすことのできない感謝をお捧げするとともに、永遠から永遠の御存在であられる主様の御名を心から賛美して終らせていただきます。

天に召された主人のこと

「見よ。神の幕屋が人とともにある。神は彼らとともに住み、彼らはその民となる。また、

神ご自身が彼らとともにおられて、彼らの目の涙をすっかりぬぐい取ってくださる。もはや死もなく、悲しみ、叫び、苦しみもない。なぜなら、以前のものが、もはや過ぎ去ったからである」

（黙示　21・3、4）

突然のことでございましたが、昨秋主人は、主様の限りない御恩寵のうちに、安らかに父なる神様のみもとに旅立ちました。余りにも思いがけない出来事に私は驚愕の中でこれから何をしたらいいのかただ呆然自失のありさまでございました。つい今しがたまで何かいっていた主人の死を目のあたりにして、人の命のはかなさ、もろさ、あっけなさに、人間の死に対する無力さをいやというほど味わいました。そして寂漠たる思いのひろがってゆく中で、今が神のみ旨の時ということを覚え、主人の魂は救われ、主様と共にあることが確信でき、私も救われた思いでほっといたしました。そして何一つとして主様におよろこびいただけるようなことのできない私達に今日までなしてくださった奇しき数々のみ業、その御恩寵の救いに厚い感謝の思いで胸がいっぱいになっておりました。子供達とそれぞれの思いを胸に秘め、黙々と後始末をして夜のあけやらぬ間に、入院先の病院から帰りたがっていた主人をこんな姿で、と思いながら家に連れて帰りました。何故か私の心に主人が召されるまでいつも、イザヤ書五十三章のみことばと聖歌の百五十五番が流れておりました。それは昨年九月十二日、ちょうど日曜日でした。息子が珍らしく二人そろって来てくれました。主人は日頃から無口な人でしたから何も申しませんでしたが、よほどうれしかったらしくいつもの量を越して飲んだり食べたりし、お風呂嫌いな人が、今までないこと

に自分からお風呂に入りたいからといって入り、先に休みましたが、夜中に激しい腹痛を訴え、いつもと様子が違うと申しますので救急車の心配もしましたが本人の希望で朝になるのを待って、かかりつけの病院に行き、即時入院となりました。それからは科学の粋を結集したような検査と治療がつづきましたが、熱は下らず、病気の原因もわからないままに日に日に弱ってゆく主人の様子をみているのは本当に辛く、何もしてあげられないし、代れるものなら代りたいと思い、元気のよい人だっただけに余計憐れでカーテンの後ろで幾度涙したことでしょう。主人は日頃それはそれは元気のよい人で自分の力を頼り、無神論をとなえ、宗教はアヘンである、それは弱いものが頼るものでお前は神主の娘だし、信心が好きだからちょうどいいなどと私をばかにしてよろこぶような人でしたから、多くの恵みをいただきながら主様をないがしろにし、自分勝手な道を歩む日常生活でございました。そのような主人が四十日余りの病床生活の中にあって日毎に弱り、自分の力では何一つできないみじめで不安な立場におかれ頼ることのできる確かなよりどころを求めるようになり、多感な中学時代に青山学院で学んだ創造主なる聖書の神様をみいだし、素直にイエス・キリストを自分の救い主と信じて受け入れる事ができるようになりました。そして幼子のようになり苦しい時もイエス様、辛い時もイエス様と主様によびかけておりました。賛美歌も思い出したように口ずさんでおりました。あの強がりの人がと不思議に思われましたが、主様の御憐れみは私どもの知恵でははかりがたく、また主人は過去における生活態度からはいつ母子家庭になっても不思議ではない状態でしたのに、主は救いたいために八十歳近くまで生かしてくださり、治る見込みのないような重い病を通して救いの御手をさしのべ主様のものとしてくださ

いましたことを思います時、この大きな耐えがたい試練も恵みとして感謝してうけとりたいと思いました。しかし弱い肉のものにしかすぎない私達は、入院して手当をしたら全快は老人ですから無理でも小康を得て帰れるものと思っておりましたので子供達と力を合わせ看病に専心しておりましたから余りにも突然の死は本当に残念でなりませんでした。死因は心筋硬塞と思われましたが、病気の原因をはっきり知るために解剖となりました。その結果はすい臓がはっきり見えないほど腫瘍でおおわれ、それがくずれて出てきたら、耐えられるような痛みではないものであることがわかりました。

主人は夏の暑さにも冬の寒さにも、またかすり傷ぐらいの痛みにも我慢できない人でしたから、どんなにか主様は痛み苦しみを共に負ってくださり、守ってくださったか、その御愛の深さにただただ感謝するばかりでした。大好きなイザヤ書の五十三章のみことばの成就をみた思いでございました。

まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。

（イザヤ　53・4、5）

悲しい納棺。お通夜。召天式。告別式と夢の中の出来事のように過ぎましたが、いまだに信じることができず、あの時の驚きは消えないままに月日は流れてゆきますが、主様は一番よい時に

最善の方法をもって主人を召してくださったことを心から信じることができ、主人はこの世の業をおえて一足先に天の故郷に帰り私達を待っていてくれるという聖書の約束が、希望となり慰めとなっております。弱いやもめという立場にたつものでございますから、この世にあって全存在だった主人のいない日にはぽっかり穴があいてしまったような、また目的を失ったようで頼りない日々でございますが、妹を失った時のような絶望感はまったくなく、不思議なことに公共物的で、私にとっては遠い存在だった主人は、今は何でも話せる主にある兄弟としていつも一緒にいるように思えるのです。また長い間留守に慣らされていたことも私が残された時の準備期間であったのかと、あの時の淋しさも今は恵みと感謝にかわりました。まことに主様は生きて働いておられ、行き届いたご配慮の中に私達をおいてくださり、すべてを益としてくださることを改めて体験させていただきました。淋しくない、悲しくないといえばうそになりますが、とるに足りない私達のようなもののために、他にお心をお遣いになることがおありにならないほどに豊かに顧りみてくださった主様。主人はどこへ行ってしまったかわからないような死ではなく、多くの罪を赦されて、主様のみもとに送ることができたという確信は何より感謝でございますし、必ず会えると信じることができますから、悲しみ、淋しさを超えたよろこびがございます。ですからいつまでもそのことにこだわっていては主様に対して申しわけないと、自分自身にいいきかせております。主人の魂が救いにあずかるまでには、主様のもとに導いてくださいました集会のベック兄をはじめ、多くの主にある兄弟姉妹が心を一つにしての長い間、熱心に祈っていてくださいました。主様は憐れみをもって応えてくださいましたことをおぼえて、すべてにすべてに感謝でご

ざいます。その奇しき御業に、主様には不可能はなく、人にはできないが、神にはできると仰せられる主様のお声がひびいてくるようでございます。心から御名をほめたたえます。主様の一方的な御愛と御恵みにより、主人は一生懸命に働き生きてきた地上の生涯を終り、永遠の安息に入り、争いも、苦しみも、痛みもなく、また暑くも寒くもなく、私などには想像することもできないようなすばらしい所で平和の君であられる主様のみもとに憩っていると思いますと、うらやましくさえなってまいります。主人には主様のために生きる日はこの地上には残されておりませんでしたが、葬儀の場において蒔かれました多くの種が良き地におちて、豊かに実を結ぶ一粒の麦となりますよう祈る気持でいっぱいでございます。顧みますと主人ならびに私達が今日までこられましたのは、多くの心やさしい知人友人また会社関係の方がた、御近所や親戚の方達の大きな力とお心遣いに支えられてのことでありますのを改めて思いしらされ心から感謝するとともに、主様の御祝福がより豊かに増し加えられますように、またお一人お一人に一日も早く主様との出会いの時が備えられますようにお祈り申しあげる日々でございます。主人亡き後は一そう主様が大きなよりどころとなり、みことばが慰めとなりはげましとなっておりますことはもちろんでございますが、集会には愛する大勢の兄弟姉妹、また家庭にありましてはたくさんの子供や孫達が与えられておりますことも、私の慰めであり、よろこびの源となっております。この大いなる御祝福を心から感謝しつつ、主様が値なしに提供しておられる救いを受け取っていない愛する身近の者達の魂の救いの成就の日を確信し、主様と主人の待つ天の御国めざして旅することができましたらこのことにまさる幸いはないと思います。祈りは必ず応えられることを信じ、その日を待

ち望みながら、主様の歩まれた道を、主様が仰せられるからできないながらも従って、一足一足歩いて行きたいと願っております。主様は私達一人一人を御自分の瞳のように守り愛しておられ、すべての人が救われて魂に平安を得るのが御目的であられ、一人の魂の救いのために綿密な御計画と方法をもっておられ、さまざまなことを通して語りかけておられます。主人は重い病を通して救いにあずかりました。かたくなな主人が救いにあずかりましたことは本当に奇しき御業ですし、信仰をもってうけとりただ感謝でいっぱいですが、そのよろこびをどう表現しましたらよろしいやら言葉が足りませんが書き加えさせていただきました。

神は愛です

ゴットホルド・ベック



▲自宅の屋上にて。

一九三〇年西ドイツシュトゥットガルトに生る。一九五三年来日。茨城にて開拓伝道の後、一九六四年吉祥寺に導かれる。妻ミンヘンさん、長女ハイデさん、二女ウスラさん、四女ブリギッテさん、五女スーシーさん。

二女リンデさんは一九八〇年、がんのため20才で召天。その記録が「実を結ぶ命」の本となる。

▼成田空港。五女スーシーとの別れ。



▼妻と高知にて。



愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。

私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。（Ⅰヨハネ　4・8〜10）

神は愛です。

しばしば人間は、今まで続けてきたことを、もうやめるべきではないか、という問いの前に立たされます。たとえばある人は、何かの仕事を始めたけれども、それによって出てくるものは問題ばかりで、そのために絶えずお金を注ぎこまなければならないような時、その人は、その仕事を続けるべきか、一日も早くやめるべきであるか、という問いの前に立たされます。また別の人は、自分に悪い影響を与える友達を持っています。その人は、自分がしたくないことも、その悪友によって誘惑されてしまうのです。その場合の問いは、この悪友から離れるべきか、あるいはこの状態を続けるべきか、ということでありましょう。しばしば最もいいことは、一日も早くやめること、今の状態に終止符を打つことです。

しかし、もっともっとはるかにむつかしい問題があります。それはたとえば結婚生活です。いろいろな不一致が起ってくると、多くの人は、今まで続いてきた状態や関係をやめてしまいたいと思うのです。つまりそのような人にとっては、離婚こそ、問題解決のただ一つの道となるので

す。しかし、ほとんどすべての場合に、離婚は問題の解決にならないのです。なぜなら、そのことによって出てくるものは、ただ新たな問題と困難であるからです。

また現在、もはや何の生きる道をも見ることができず、人生に終止符を打ちたい、今までの人生に終りをつげたい、と思っている人もいます。しかし、これもまた、逃避にすぎないのです。というのは、死によってすべてが終るのではないからです。

私たちの地上の生活の次には、永遠がやってまいります。そうしてそこで、すべての人が直面する最初のものは、神の裁きです。たった一人で、主なる神の裁きの前に立つ者は、失われた、また呪われた者であります。しかし、主イエスを弁護人としてもつ者は、救われて永遠のいのちを持つことが許されているのです。

今のこの地上での生活は、私たちが永遠に対して、正しい決断を行うこと、すなわち主イエスキリストを受けいれて、主なる神との交わりを持つための準備期間です。

イエス・キリストを知ることは、神が一人一人に提供してくださっておられる新しい出発です。自分中心の生活をやめて、主イエスに従ってゆくこと、このことこそ、救いと解放を意味するのです。悪魔は、いわゆる宗教に対しては反対せず、また、哲学や理想などといったものに対しても反対しません。しかし、一人の人間が主イエスの後に従っていこうとすると、猛烈に反対するのです。悪魔は人間を惑わして、神に対して不信の念を持たせようとするものです。その結果多くの人びとは、神は私たち人間から、すべての喜びまた楽しみを奪い取ってしまうと思いこんでしまうのです。そうして主イエスに従うということは、重荷を負わなければならないこと、すべ

てのことを断念しなければならないことであると思いこんでしまい、人間はまったく制限されたものになってしまうと、思いこんでしまうのです。

ごく少数の人だけが、神は愛であること、また主なる神は私たちのことをいつも配慮していてくださること、そして、神に信頼する人は誰でも、本当に助けていただける、ということを知っています。ただひとり、神だけが、絶対的な信頼に値するおかたであるにもかかわらず、この神から期待する人は、何と少ないことでしょうか。これは最大の悲劇です。

神が愛ならば、どうしていろいろなことが起っていいのでしょうか、ベトナムやカンボジヤには、この地上における不条理の責任は神にあるのだ、と言う人がいます。すなわち大部分の人びとです。たしかにこの地上では、愛のない状態や、残酷な状態が存在しています。しかしその責任は神にあるのではなく、人間と、人間の罪にあるのです。

神は愛です。このまことの愛は、その恵みと行いの中に現れます。神のみことばである聖書は、神が憐れみと恵みに富みたもうお方であり、忍耐深く、真実で、愛なるお方であると言っています。そのように、主なる神は、神のみことばである聖書の中に、ご自身を顕しておられるのです。私たちは、神の行い方が、神の愛と一致しているかどうかを吟味してみることができます。そこで次に、神の五つの行いについて、簡単に考えてみましょう。

まず第一に、神は人間を造られました。しかしその前に、神は宇宙と地球を、人間の住む所として、お造りになられました。神は人間に、住いとして楽園をお与えになりました。人間の住む

所を完全に備えてくださること、これこそ、愛であります。

第二に、神は、アダムが一人でいることをご覧になりました。そして配偶者として、エバをお与えになりました。人間が一人でいることを終らせること、これは、大きな愛です。

第三に、神は、人間に自由意志をお与えになりました。私たちは、操り人形ではなく、神の自由な被造物なのです。人間に決断の自由を与えること、これも愛です。

第四に、神は、人間に、戒め及び律法の中に、ご自分のみ心を明らかに示してくださいました。神は律法を破った者が、いかなる罰を受けなければならないか、ということに対しても、警告を与えてくださいました。人間を盲目に、自分の運命へゆかせないことは、愛です。私たちは、人間が神の掟を守らなかったことを知っています。人間は神から離れ落ちてしまったのです。人間は神に対して罪を犯してしまったのです。

最後に第五番目として、愛の最大の証明が、十字架におけるイエス・キリストの死であることをあげなければなりません。そこでイエス・キリストは、血を流して私たちの罪を贖ってくださったのです。

それでは、イエスとは、一体いかなるお方であるのか、について考えてみましょう。

まず第一に、イエス・キリストは立派な人でしょうか？　そうです。イエス・キリストは、最も立派な人であります。イエスは一度も罪を犯したことがなかったただ一人の人間なのでした。

第二にイエスは、偉大なる神の人でありましょうか？　そうです。イエスは、ご自分の考えと意志が、父なる神の考えと意志と、まったく同じものである、ただ一人の人間でした。

第三にイエスは、ユダヤ人の王でありましょうか？　そうです。イエスは、最も力のある支配者であります。この地上におけるすべての力と権力は、主イエスに与えられているのです。

第四にイエスは、神の子でありましょうか？　そうです。聖書はそのことを、はっきりと証ししています。

イエス・キリストは、神ご自身であります。

イエス・キリストは、おかすべからざる、偉大なる栄光に富みたもう完全なお方であります。はじめから一度も罪を犯したことのない、ただ一人の人間は、人間となってくださった、神の子イエス・キリスト。父なる神は、私たち人間の罪の身代りとして、イエスを罰したまいました。イエスは私たちの身代りとして、十字架で死んでくださいました。過ちは、ただ一度だけ罰せられれば十分です。イエスが私たちの罪のために身代りとして、罰をお受けになってくださったゆえに、父なる神は、私たちを恵んでくださいます。イエスは、十字架で、私たちの債務を贖ってくださいました。そして、私たちのために、神に至る道となってくださいました。このすばらしい、主イエスの尊い死のみわざを少しでも理解するものは、神の愛を発見することができるのです。

これこそ、神の愛です。すなわち、神のみ子、主イエスは、ご自分に対して、嘲りや軽蔑だけしか与えない人間の身代りとなって死んでくださったのです。これほど高価な代価を、神は私たちのために支払ってくださったのです。

そしてこれらすべては、神の側からなされました。主イエスは、完全な贖いを成就してくださいました。今や、提供された救いを受けるかどうかは、私たちにかかっています。

では一体、どうしたらよいのでしょうか？　それは、悔い改めと信仰によってなされるのです。私たちは、私たちのために十字架でなしてくださったイエスのみわざを受け取らなければなりません。救い主、また主としてのイエス・キリストを、私たちは、自分たちの生活の中へ、受け取らなければなりません。そして、主イエスに、すべてを明け渡さなければなりません。しかし、これは、生命を捨てることではなく、まったく新しい出発、まったく新しい生命が与えられることを意味しています。

主イエスに従う人生は、平安の人生です。あらゆる絶望や不安や不安定さは、消え失せます。というのは、神の子を持つものは、永遠のいのちを持ち、これこそ、本当の幸せであります。

あとがき

大切なことについて

現代人は、ますます見せかけだけのはかない物の世界の中に生きるようになっています。私たちは、本当に大切なものを見ることができなくなっているのではないでしょうか。私たちは、テレビ・ラジオ・新聞・週刊誌などのマスメディアから無分別に影響を受け、激動する毎日の出来事や、個人や、家族や仕事上の些細な事柄にふりまわされて、それらの虜になって生活しています。

私たちは、このような時代の流行に流され、この世界の小さな一時的な事柄にかまけており、私たちの人生における最も重大な事実から目をそらしてしまっています。

イギリスの偉大な政治家ウィンストン・チャーチル卿は、彼の「回想録」の中で、ある一人の老人の臨終に立ち合ったことによって、いかにチャーチルの心の目が開かれたかを記しています。それは戦争のさなか、一九四一年のことでした。その老人の臨終の言葉はチャーチルに、本質的な事柄への洞察を迫り、当時の戦況における苦境と困難に対する大きな助けとなったのでした。その老人の言葉とは次のようなものでした。――私の心配の大部分は虚しかった――

私たちもまた毎日の生存競争の中で、そしてまた私たちの人生の大小様々な苦しみの中で、マスメディアによる圧迫のもとで繰り返し次のことを問うべきです。今私たちを圧迫し、あるいは特に大切なものとして私を虜にしているものが、一ヵ月後も、一年あとも、十年あとも、二十年あともなお意味を持つのでしょうか？と。

確かに人は、人生の小さな事柄を簡単に無視することができません。しかしまた、それを過大評価することによって、本質的なものから目をそらすことも許されません。ひとりの人間の人生において、本当に大切なものは、死の直前の三十分前においてなおも重要な意味を持ち続けているものだけです。ここで二、三の歴然たる事実を皆さまの前に提起することをお許しください。この世界の創造者は、ご自分の被造物を決しておろそかにはなさいません。主なる神は生きておられ、イエス・キリストの形でご自身を啓示なさいました。主イエスには、天地のすべての力が与えられています。主は今日もなおこの世界で働いておられ、ひとりひとりの人間のことを考えていてくださいます。

本書の中で証しをしてくださいましたすべての方々は、これらの真理を身をもって経験なさいました。その人たちはみな、次のように告白せざるをえませんでした。私たちを神から引き離すものは、私の自我であり、私の意志であり、私の誇り、私の自己中心、妬みの固まり、すぐによくよするような心の状態です。

しかし、このようにただ自分だけにより頼む自我は不安定で動きやすく、疑い深く、一度行った決断が正しいか間違っているかを決して知ることができません。

このことがその人たちに明らかになった時、その人たちは決断しました。彼らは自我を主イエス・キリストに引き渡しました。彼らは強情で、頑固で、自己追求的で、孤独なそのありのままの状態で、イエスさまのみもとに行きました。

彼らは思い切って、直接イエスさまに次のように祈らざるをえませんでした。「主イエスよ、あ

なたは私の主であり救い主です。私は今まであなたを知らず、あなたなしに生きてきました。どうか主よ、私をお赦しください。私はありのままの状態であなたさまのところに行き、あなたの血潮で、私を潔めてくださるようにお願いします。主イエスよ、私は私の人生の支配権をあなたに明け渡します。どうかあなたのみ心のままに私を造り変え、あなたが私を必要となさる所で私をお用いになってください。私の主、また私の神に心から感謝します」

この態度を取るとき、平安が心の中に入ってきて、人は宗教の強制力と間違ったやり方から解放され、確実な将来を持つようになります。どうか、自分自身に対して正直であってください。この決断を逃すことだけはしないでください。生ける神は、義務的に日曜日だけ教会に行き、それから一週間は毎日自分勝手な生活をするという人ではなく、月曜の朝から土曜の夜まで、毎日の大変な生活の中にあって、よみがえられた主との結びつきが喜びと平安と力となっている人を求めておられます。その時にだけ、初めてすべての不確実性と不満足の代りに、あなたの人生ははっきりとした主イエスのご臨在によって、平安と希望に満たされたものとなります。

あなたはいろいろな証しをお読みになって、ひとりひとりの人生における神の導きをどのように思われたことでしょうか。その人たちがみな、まったく同じことを、まったく同じように経験しなければならなかったとお感じになられたのでしたら、それは間違いです。ひとりひとりの導きは多種多様なのです。

しかしすべての人に共通していたことは、神のことばは真理であるという事実です。聖書の中にこそ、神のみ心が啓示されています。方向を指し示すものは、なにかの経験ではなく、神のこ

とばだけです。

それですから私は、心から次のことをお願いします。どうか「主よ、語りたまえ。僕は聞きます」という態度で、神のことばである聖書を真剣に読んでください。そうすればあなたは、聖書の中に、新しいいのち、永遠のいのちを見出すに違いありません。

そして次の二ページにわたる聖書のみことばが、あなたの助けになりますように。

ゴットホルド・ベック

基礎的なみことば

救いに至らせる信仰は、人間の理性や感情に基づくのではなく、ただ神のみことばに基づくのです。理解したいという意欲や、何かを感じたいという意欲ではなく、ただ幼な子のように神のみことばを信頼することだけが誘惑の危険からあなたを守ってくれます。

その助けとなるように、いくつかのみことばを次にご紹介いたします。聖書を開いて、そのみことばを考えつつ読んで下さい。そして与えられたみことばの内容のために、イエス様に感謝して下さい。そうすれば主はあなたを祝福して下さるでしょう。

一　みことばの大切さ
ヨハネ17・17　エレミヤ15・16　Ⅰヨハネ5・13　Ⅰペテロ1・23　詩篇119・105、160、162

二　悔い改めと信仰
Ⅰヨハネ1・9　箴言28・13　詩篇32・1～5　イザヤ55・6、7　ヨハネ6・37

三　私たちの身代わりとなられたイエス
イザヤ53・4～6　Ⅰペテロ2・24　Ⅱコリント5・21

四　血潮の価値
イザヤ1・18　ローマ3・24～25　Ⅰヨハネ1・7　エペソ1・7　Ⅰペテロ1・18～19
黙示12・11

五　確信の根拠
イザヤ43・1、25　イザヤ44・2　ルカ7・48　ヘブル8・12　ヘブル10・17
詩篇103・12　ヘブル13・5～6

六　思いわずらうな
マタイ13・22　マタイ6・25～32　ピリピ4・6～7　Ⅰペテロ5・7～9　詩篇55・22

七　試練の時
ヤコブ1・12　ヤコブ4・7～8　Ⅰコリント10・13　Ⅰペテロ5・8～10
Ⅰペテロ1・5～7　Ⅱコリント12・9～10　ローマ5・3～5　ローマ8・28
イザヤ40・29～31